

特65-302

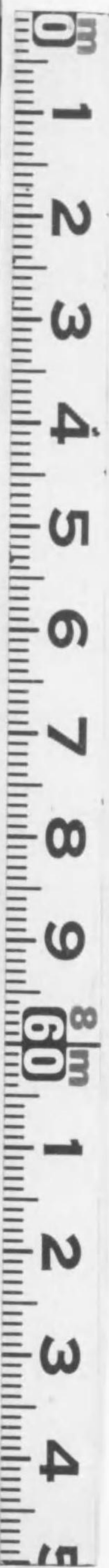


1200800265636

傳染病豫防叢書 全



特 3



始



目次

- ◎市町村衛生組合設置ニ關スル規程 四八
- ◎市町村傳染病豫防費補助規程 五〇
- ◎官吏准官吏職務上感染又ハ死亡手當支給 五一
- ◎豫防救治吏員手當 五二
- ◎全上療治料ノ件 五二
- ◎傳染病豫防法上補助ニ關スル件 五三
- ◎傳染病豫防從事官吏及傭員手當給與 五三
- ◎傳染病豫防ニ從事シ感染又ハ死亡シタル者へ手當ノ件 五三
- ◎傳染病豫防救治ニ從事スル者ノ手當金ニ關スル件 五五
- ◎全上市町村吏員ニ支給スル手當金 五八
- ◎郡醫職務規程 五九
- ◎市町村醫設置規程 六〇
- ◎檢疫委員設置規程 六一
- ◎臨時檢疫官設置ノ件 六三
- ◎海港檢疫法 六四

- ◎海港檢疫施行規則 七〇
- ◎瀛車檢疫規則 七八
- ◎船舶檢疫規則 八〇
- ◎清潔方法消毒方法 八四
- ◎學校清潔方法 九三
- ◎市町村清潔規則 九七
- ◎種痘規則 一〇一
- ◎種痘藝術心得 一〇三
- ◎種痘細則 一一〇
- ◎痘苗賣下規則 一一八
- ◎飲食物へ覆蓋ヲナスベキ件 一二一
- ◎死体、汚物ノ處置家屋、什器消毒及清潔方法 一二一
- ◎獸疫豫防法 一二九
- ◎獸疫豫防法施行細則 一三五
- ◎獸疫豫防法心得 一四一

目次

目次

●牛疫檢疫規則	一八一
●臨時獸醫備入手當金ノ件	一八二
●臨時獸醫備入レノ場合監督方ノ件	一八三
●畜牛結核病豫防法	一八三
●獸疫及畜牛結核病豫防ニ關スル費用負擔區分ノ件	一八八

傳染病豫防叢書

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル傳染病豫防法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
法律第三十六號 (明治卅年三月卅日)

傳染病豫防法

第一條 此ノ法律ニ於テ傳染病ト稱スルハ虎列刺、赤痢、腸窒扶私、痘瘡、發疹窒扶私、猩紅熱、實布埤利亞(格魯布ヲ含ム)及「ペスト」ヲ謂フ
前項ニ掲クル凡病ノ外此ノ法律ニ依リ豫防方法ノ施行ヲ必要トスル傳染病アルトキハ主務大臣之ヲ指定ス

第二條 傳染病流行シ若ハ流行ノ虞アルトキハ地方長官ハ其ノ傳染病ノ疑似症ニ對シ此ノ法律ノ全部若ハ一部ヲ適用スルコトヲ得

第三條 醫師傳染病患者ヲ診斷シ若ハ其ノ死體ヲ檢案シタルトキハ其ノ家人ニ消毒方法ヲ指示シ且直ニ患者若ハ死體所在地ノ警察官吏、市町村長、區長、戶長、檢疫委員又ハ豫防委員ニ届出ヘシ其ノ轉歸ノ場合亦

同シ

第四條 傳染病又ハ其ノ疑アル患者若ハ其ノ死者アリタル家ニ於テハ速ニ醫師ノ診斷若ハ檢案ヲ受ケ又ハ直ニ其ノ所在地ノ警察官吏、市町村長、區長、戶長、檢疫委員又ハ豫防委員ニ届出ヘシ

前項ノ届出ヲ爲スヘキ義務者ハ一般民家ニ在リテハ戶主若ハ之ニ代ルヘキ者、社寺、公私立ノ學校病院、製造所又ハ船舶、會社、各種事務所、貸席興行場其ノ他集會ノ場所ニ在リテハ其首長、管理人又ハ代理者トス

第五條 傳染病患者アリタル家ニ於テハ醫師又ハ當該吏員ノ指示ニ從ヒ清潔方法及消毒方法ヲ行フヘシ
當該吏員ハ傳染病豫防上必要ト認ムルトキハ其ノ近鄰ノ家又ハ患家ト交通ヲ爲シタル家ニモ清潔方法及消毒方法ヲ施行セシムヘシ

第六條 清潔方法及消毒方法ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 傳染病豫防上必要ト認ムルトキハ當該吏員ハ傳染病患者ヲ傳染病院又ハ隔離病舎ニ入ラシムヘシ
健康者ノ隔離ヲ必要ト認ムルトキハ隔離所ニ入ラシムコトヲ得

第八條 當該吏員ニ於テ必要ト認ムルトキハ一定ノ日時間傳染病患者アリタル家及其ノ近鄰ノ家ノ交通ヲ遮斷スルコトヲ得

第九條 傳染病患者及其ノ死體ハ當該吏員ノ認可ヲ經ルニ非サレハ他ニ移スコトヲ得ス

第十條 傳染病毒ニ汚染シ若ハ汚染ノ疑アル物件ハ當該吏員ノ認可ヲ受クルニ非サレハ使用、授與、移轉、遺棄又ハ洗滌スルコトヲ得ス

第十一條 傳染病患者ノ死體ハ當該吏員ニ於テ充分ト認ムル消毒方法ヲ施シタル後ニ非サレハ埋葬スヘカラス

傳染病患者ノ死體ハ醫師ノ檢案ニ依リ當該吏員ノ認可ヲ經テ二十四時間内ニ埋葬スルコトヲ得

第十二條 傳染病患者ノ死體ハ火葬スヘシ但シ所轄警察官署ノ許可ヲ經タルトキハ此ノ限ニ在ラス

傳染病患者ノ死體ヲ土葬シタルトキハ三箇年ヲ經過スルニ非サレハ他ニ改葬スルコトヲ得ス但シ公共ノ工事ノ爲必要アル場合ニ於テ所轄警察官署ノ許可ヲ經タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十三條 死體ヲ既ニ埋葬シ若ハ埋葬セムトスル場合ニ於テ傳染病患者
タリシ疑アルトキハ當該吏員ハ死體及家屋其ノ他ニ對シ更ニ相當ノ處
分ヲ爲サシムルコトヲ得

第十四條 傳染病豫防上必要ト認ムルトキハ當該吏員ハ其ノ事由ヲ戶主
首長又ハ管理人ニ告知シ家宅、船舶其ノ他ノ場所ニ立入ルコトヲ得但
シ當該吏員タルノ證票ヲ示スヘシ

第十五條 傳染病流行シ若ハ流行ノ虞アルトキハ市町村ハ地方長官ノ指
示ニ從ヒ市制第六十一條町村制第六十五條ニ依リ傳染病豫防委員ヲ置
キ檢疫豫防ノ事ニ從ハシムヘシ但シ市町村會ノ議決ニ依ルノ限ニ在ス
豫防委員ニハ醫師ヲ加フヘシ其ノ醫師ヨリ出ツル者ハ市町村長之ヲ選
任ス

第十六條 市町村ハ地方長官ノ指示ニ從ヒ市町村内ノ清潔法及消毒方法
ヲ施行シ醫師其ノ他豫防上必要ナル人員ヲ雇入レ及器具、藥品其ノ他
ノ物件ヲ設備スヘシ

第十七條 市町村ハ地方長官ノ指示ニ從ヒ傳染病院、隔離病舎、隔離所又

ハ消毒所ヲ設置スヘシ

傳染病院、隔離病舎、隔離所又ハ消毒所ノ設備及管理ノ方法ハ地方長官
之ヲ定ム

第十八條 傳染病流行シ若ハ流行ノ虞アルトキハ地方長官ハ檢疫委員ヲ
置キ檢疫豫防ニ關スル事務ヲ擔任セシメ及特ニ船舶汽車ノ檢疫ヲ行ハ
シムルコトヲ得

船舶汽車ノ檢疫ヲ行フ場合ニ於テハ其ノ船舶若ハ其ノ船舶汽車ノ乗客
乗組人ニシテ病毒感染ノ疑アル者ヲ必要ノ日時間停留シ及無償ニテ當
該吏員又ハ醫師ヲ船舶汽車中ニ乗込マシムルコトヲ得

船舶汽車ノ檢疫ニ於テ發見シタル患者ハ其ノ地市町村立ノ傳染病院又
ハ隔離病舎ニ收容治療セシムルコトヲ得市町村ハ相當ノ理由ナクシテ
之ヲ拒ムコトヲ得ス但シ之カ爲特ニ要シタル費用ハ地方長官ニ請求ス
ルコトヲ得

前各項ノ外檢疫委員ノ設置及船舶汽車ノ檢疫ニ關スル規程ハ命令ヲ以
テ之ヲ定ム

第十九條 地方長官ハ傳染病豫防ト認ムルトキハ左ノ事項ノ全部又ハ一部ヲ施行スルコトヲ得

- 一 傳染病患者ノ有無ヲ檢診セシムルコト
- 二 市街村落ノ全部又ハ一部ノ交通ヲ遮斷スルコト
- 三 祭禮、供養、興行、集會等ノ爲人民ノ群集スルコトヲ制限シ若ハ禁止スルコト
- 四 古着、襪履、古綿其ノ他病毒傳播ノ虞アル物件ノ出入ヲ制限シ若ハ停止シ又ハ其ノ物件ヲ廢棄スルコト
- 五 傳染病毒傳播ノ媒介トナルヘキ飲食物ノ販賣、授受ヲ禁止シ又ハ之ヲ廢棄スルコト
- 六 船舶ニ醫師ノ雇入ヲ命シ又ハ汽車船舶若ハ多數人民ノ集合スル場所ニ豫防上必要ノ設備ヲ爲サシムルコト
- 七 清潔方法、消毒方法ノ施行ヲ命シ及井戸、上水、下水、溝渠、芥溜、廁園ノ新設改築變更若ハ廢止ヲ命シ又ハ其ノ使用ヲ停止スルコト
- 八 一定ノ場所ノ漁撈、游泳又ハ其ノ水ノ使用ヲ必要ナル日時間制限

シ若ハ停止スルコト

第二十條 諸官廳、集治監及官立ノ學校、病院、製造所等ニ傳染病發生シ若ハ發生ノ虞アルトキハ其ノ首長ハ地方長官ト協議シ此ノ法律ニ準シ豫防方法ヲ施行スヘシ陸海軍所屬ノ部隊、軍艦等ニ傳染病發生シ若ハ發生ノ虞アルトキハ其ノ首長ハ此ノ法律ニ準シ各其ノ所定ノ規則ニ依リ又必要アル場合ニ於テハ地方長官ト協議シ豫防方法ヲ施行スヘシ

第二十一條 左ノ諸費ハ市町村ノ負擔トス

- 一 豫防委員ニ關スル諸費
- 二 市町村ニ於テ施行スル清潔方法、消毒方法及種痘ニ關スル諸費
- 三 豫防救治ノ爲雇入タル醫師其ノ他ノ人員竝豫防上必要ナル器具、藥品其ノ他ノ物件ニ關スル諸費
- 四 傳染病院、隔離病舎、隔離所及消毒所ニ關スル諸費
- 五 豫防救治ニ從事シタル者ニ給スヘキ手當、療治料及其ノ遺族ニ給スヘキ救助料、弔祭料
- 六 第八條ニ依レル交通遮斷ニ關スル諸費及交通遮斷ノ爲又ハ一時營

業ヲ失ヒ自活シ能ハサル者ノ生活費

七 市町村ニ於テ發見セル傳染病貧民患者竝ニ死者ニ關スル諸費
其ノ他市町村ニ於テ施行スル豫防事務ニ關スル諸費

第二十二條 左ノ諸費ハ府縣稅又ハ地方稅ノ負擔トス

一 檢疫委員ニ關スル諸費

二 船舶又ハ氣車ノ檢疫ニ關スル諸費

三 第十九條第二ニ依レル交通遮斷ニ關スル諸費及交通遮斷ノ爲自活
シ能ハサル者ノ生活費其ノ他府縣ニ於テ施行スル豫防事務ニ關ス
ル諸費

第二十三條 地方長官ハ衛生組合ヲ設ケ清潔方法消毒方法、其ノ他傳染
病ノ豫防救治ニ關シ規約ヲ定メシメ之ヲ履行セシムルコトヲ得

市町村ハ其市町村内ノ衛生組合ニ於テ傳染病豫防救治ノ爲支出スル費
用ノ全部又ハ一部ヲ補助スルコトヲ得

第二十四條 第二十一條第二十三條第二項ノ支出ニ對シテハ命令ノ規定
ニ從ヒ府縣稅又ハ地方稅ヨリ市町村ニ補助スヘシ

第二十五條 國庫ハ第二十二條第二十四條ノ府縣稅又ハ地方稅ノ支出ニ
對シ其ノ六分一ヲ補助スルモノトス

第二十六條 此ノ法律若ハ此ノ法律ニ基キテ發スル命令ニ依リ清潔方法
消毒方法ヲ施行スヘキ義務者之ヲ施行セヌ又ハ之ヲ施行スルモ當該吏
員ニ於テ充分ナラスト認ムルトキハ當該吏員之ヲ施行シ其ノ費用ハ市
町村ヲシテ支辨セシムヘシ此ノ場合ニ於テ市町村ハ其ノ費用ヲ義務者
ヨリ追徵スルコトヲ得

私人ニ於テ前項ノ費用ヲ指定ノ期限内ニ納付セサルトキハ國稅滯納處
分ニ關スル規程ニ依リ之ヲ徵收ス

第二十七條 此ノ法律若ハ此ノ法律ニ基キテ發スル命令ニ依リ市町村又
ハ私人ニ於テ施爲スヘキ事項ヲ施爲セス若クハ之ヲ施爲スル充分ナラ
スト認ムルトキ又ハ必要ノ期限内ニ施爲シ得スト認ムルトキハ地方長
官ハ府縣稅又ハ地方稅ヲ以テ之ヲ施爲シ其ノ費用ヲ市町村又ハ私人ヨ
リ追徵スルコトヲ得

私人ニ於テ前項ノ費用ヲ指定ノ期限内ニ納付セサルトキハ國稅滯納處

分ニ關スル規程ニ依リ之ヲ徵收ス
第二十八條 第二十六條及第二十七條ノ費用追徴ニ關シ不服アル私人ハ
訴願法ニ依リ訴願スルコトヲ得

第二十九條 此ノ法律若ハ此ノ法律ニ基キテ發スル命令ニ依リ當該吏員
ノ指示命令シタル事項ヲ指定ノ期限内ニ履行セサル者ハ五圓以下ノ罰
金又ハ科料ニ處ス

第三十條 醫師傳染病患者ヲ診斷シ若ハ其ノ死體ヲ檢案シタル後十二時
間以內ニ届出ヲ爲サス又ハ虚偽ノ轉歸届ヲ爲シタルトキハ五圓以上五
十圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十一條 第四條第五條第一項第九條第十條第十一條第一項第十二條
ニ違背シタル者第五條第二項ニ依リ清潔方法及消毒方法ヲ施行セサル
者交通遮斷ヲ犯シタル者又ハ醫師ニ請託シテ第三項ノ届出ヲ爲サシメ
ス若ハ届出ヲ妨ケタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

附 則

第三十二條 此ノ法律中ノ規程ニシテ其ノ準用シ得ヘキモノヲ除ク外北

海道沖繩縣ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
此ノ法律中市町村ニ關スル規程ニシテ其ノ準用シ得ヘキモノヲ除ク外
市制町村制ヲ施行セサル地ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
第三十三條 海外諸港及臺灣ヨリ來ル船舶ニ對シ施行スル檢疫ハ別ニ定
ムル所ニ依ル

第三十四條 此法律ヲ施行スル爲ニ必要ナル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
第三十五條 此ノ法律ハ明治三十年五月一日ヨリ施行ス但シ第二十四條
及第二十五條ハ明治三十年四月一日ヨリ施行ス
第三十六條 明治十三年布告第三十四號傳染病豫防規則ハ此ノ法律施行
ノ日ヨリ廢止ス

內務省令第十一號 (明治卅年五月一日)
傳染病豫防法施行規則左ノ通定ム

第一條 傳染病豫防法施行規則
警視總監府縣知事ハ其ノ管内ニ傳染病流行ノ兆アリト認ムルト

キ及傳染病豫防法第一條ニ掲クル八病ノ外同法ニ依リ豫防方法ノ施行ヲ必要ト認ムル傳染病發生シタルトキハ其ノ性狀ヲ記シテ速ニ内務大臣ニ申報スヘシ但前段ノ場合ニ於テハ鄰接若クハ船舶氣車交通ノ地ノ警視廳府縣廳最寄兵營及最寄港灣ニ碇泊ノ軍艦等ニ通報スヘシ

第二條 市町村長區長(沖繩縣ノ區長以下之ニ倣フ)戶長(戶長ニ準スヘキ者ヲ含ム以下之ニ倣フ)又ハ豫防委員ニ於テ傳染病豫防法第三條ノ届出ヲ受ケタルトキハ互ニ通報シ且警察官吏ニ通報スヘシ但町村長又ハ戶長ニ於テ届出又ハ通報ヲ受ケタルトキハ郡役所島廳ニ報告シ郡長市長島司又ハ區長ハ府縣廳ニ報告スヘシ

市町村長區長戶長又ハ豫防委員ニ於テ傳染病豫防法第四條ノ届出又ハ通報ヲ受ケタルトキハ直ニ醫師ヲシテ診斷セシメ傳染病ナルトキハ前項ノ手續ヲ爲スヘシ

第三條 警察官吏又ハ檢疫委員傳染病豫防法第三條又ハ第四條ノ届出ヲ受ケ又ハ傳染病アルコトヲ知リタルトキハ市町村長區長戶長又ハ豫防委員ニ通報スヘシ但警察署長又ハ分署長ヨリ府縣廳(東京府ハ警視廳)

ニ報告スヘシ

前項ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ醫師ヲシテ診斷セシムル事ヲ得

第四條 市町村長區長戶長又ハ豫防委員第二條ニ依リ傳染病ノ届出又ハ通報ヲ受ケ又ハ傳染病アルコトヲ知リタルトキハ直ニ其ノ家ニ臨ミ清潔方法消毒方法ヲ施行セシムヘシ但警察官吏衛生官吏郡吏員嶋廳吏員又ハ檢疫委員ハ市町村長區長戶長又ハ豫防委員ヲ指示シテ其ノ事務ニ従事スヘシ

第五條 市町村長區長戶長又ハ豫防委員ハ豫防上必要ト認ムルトキハ傳染病患者ヲ傳染病院又ハ隔離病舎ニ入ラシメ健康者ヲ隔離所ニ入ラシムヘシ但警察官吏衛生官吏郡吏員嶋廳吏員又ハ檢疫委員ハ市町村長區長戶長又ハ豫防委員ヲ指示シテ其ノ事務ニ従事スヘシ

第六條 警察官吏又ハ檢疫委員ハ傳染病豫防法第八條又ハ第十九條第二ニ依リ左ノ日時間交通ヲ遮斷スルコトヲ得但第十九條第二ニ依リ交通ヲ遮斷スルハ特ニ府縣知事(東京府ハ警視廳總監)ノ命アル場合ニ限ル

虎列刺

赤痢

患者又ハ死體アル間及患者ヲ入院若クハ入舎セシメ又ハ患者治癒若クハ死亡シタル後消毒方法ノ施行ヲ了リタル時ヨリ起算シ滿五日間

發疹室扶私

『ペスト』

患者又ハ死體アル間及患者ヲ入院若クハ入舎セシメ又ハ患者治癒若クハ死亡シタル後消毒方法ノ施行ヲ了リタル時ヨリ起算シ滿十日間但傳染病豫防法第十九條第二ノ場合ニ於テハ尙十日間以内繼續スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ハ警察官吏又ハ檢疫委員ノ指示ヲ受ケテ交通遮斷ニ關スル事務ニ從事スヘシ
第七條 左ノ場合ニ於テハ書面又ハ口頭ヲ以テ警察官吏市町村長區長戸長檢疫委員又ハ豫防委員ノ認可ヲ受クヘシ但第ニノ場合ニ於テハ認可ヲ爲書タル吏員ヨリ患者又ハ死體ヲ移スヘキ他ノ吏員ニ通報スヘシ

一 傳染病豫防法第九條ニ依リ傳染病患者及其死體ヲ他ニ移サントスルキ

二 傳染病豫防法第十條ニ依リ傳染病毒ニ汚染シ若クハ汚染ノ疑アル物件ヲ使用授與移轉遺棄又ハ洗滌セントスルトキ

三 傳染病豫防法第十一條第二項ニ依リ傳染病患者ノ死體ヲ二十四時間内ニ埋葬セントスルトキ

第八條 傳染病豫防法第九條第十條及第十一條第一項ノ場合ニ於テハ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ハ充分消毒方法ヲ施行セシムヘシ但警察官吏衛生官吏郡吏員島廳吏員又ハ檢疫委員ハ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ヲ指示シテ其ノ事務ニ從事スヘシ

第九條 傳染病豫防法第十四條ニ依リ家宅船舶其ノ他ノ場所ニ立入ルハ成ルヘク日出後日没前ニ於テスヘシ其ノ戸主首長管理人等ニ示スヘキ證票ハ左ノ如シ

木札 表凡
又ハ 面一
厚紙 面寸

傳染病豫防吏員之證

裏 官廳公署印

第十條 府縣知事(東京府ハ警視總監)ハ市町村ノ醫師ヲシテ傳染病豫防法第十九條第一ノ檢診ヲ行ハシムルコトヲ得

第十一條 府縣知事(東京府ハ警視總監)傳染病豫防法第十九條第七ニ依リ清潔方法消毒方法等ノ施行ヲ命シタルトキハ第四條ノ規程ヲ準用ス

第十二條 市町村立ノ傳染病院隔離病舎又ハ隔離所ニ於テハ食費藥價ヲ徵收スルコトヲ得其ノ金額ハ市ニ在テハ府縣知事町村ニ在テハ郡長ノ認可ヲ受クヘシ

第十三條 市町村長區長戸長又ハ豫防委員ハ傳染病豫防法第二十六條ニ依リ清潔方法消毒方法ヲ施行スヘシ但警察官吏衛生官吏郡吏員嶋廳吏員又ハ檢疫委員ハ市町村長區長戸長又ハ豫防委員ヲ指示シテ其ノ事務ニ從事スヘシ
前項ノ場合ニ於テ市町村ハ必要ナル人夫器具藥品等ヲ供給シ又ハ其ノ費用ヲ支出スヘシ

第十四條 府縣知事ハ衛生組合ヲシテ消毒器具藥品等ヲ設備セシムルコトヲ得

第十五條 傳染病豫防法第二條第十八條(第三項但書ノ場合ヲ除ク)及第十九條ノ地方長官ノ職務其ノ他傳染病豫防法又ハ此ノ規則ノ施行ニ關シ警察ニ屬スル事項ハ東京府ニ於テハ警視總監之ヲ行フ

東京市京都市大阪市ニ於テハ傳染病豫防法又ハ此ノ規則ノ施行ニ關シ市長ニ屬スル職務ハ區長ヲシテ之ヲ補助執行セシムルコトヲ得

第十六條 傳染病豫防法又ハ此ノ規則ノ規程ニシテ其ノ準用シ得ヘキモノ除ク外沖繩縣ニ關シ必要ナル事項ハ沖繩縣知事之ヲ定ム

第十七條 傳染病豫防法又ハ此ノ規則ノ施行ニ關シ必要ナル細目ハ警視總監府縣知事之ヲ定ム

島地ニ關シ此ノ規則ノ規程ヲ適用シ難キ場合ニ於テハ警視總監府縣知事ハ別段ノ規程ヲ設クルコトヲ得

縣令第二十號 (明治三十一年三月十七日)

傳染病豫防法施行細則左ノ通相定ム

但明治十九年二月甲第十三號布達ヲ廢止ス

傳染病豫防法施行細則

- 第一條 傳染病豫防法第三條ノ届出ハ第一號乃至第三號書式ニ據ルヘシ
- 第二條 同法第三條第四條ノ届出ハ便宜口頭ヲ以テナスモ妨ケナシ
但シ第三條ノ届出ヲ口頭ヲ以テナシタルモノハ更ニ十二時間以内ニ書式ノ届書ヲ差出スヘシ
- 第三條 當該吏員ニ於テ傳染病タルノ疑アリト認ムルモ主治醫ニ於テ届出ヲ爲サ、ル時ハ市町村醫若クハ他ノ醫師ヲシテ主治醫ト立會診斷ヲ爲サシムヘシ
- 第四條 市町村ハ傳染病豫防救治上必要ナル人夫器具消毒藥品等豫メ設備スヘシ
但其種類數量人員等ハ警察署長警察分署長ト協議スヘシ
- 第五條 左ノ各項ニ該當スル者ハ傳染病院又ハ隔離病舎ニ入ラシムヘシ
- 一 家屋内ニ隔離スヘキ病室ナキモノ
 - 二 學校又ハ病院其他衆人群集ノ場所及交通頻繁ナル道路ニ接近スルモノ

- 三 看病人ナキモノ
 - 四 主治醫ナキモノ
 - 五 患者ニ専用スヘキ臥具什器其他消毒上必要ナル器具藥品ヲ備フルノ資力ナキモノ
 - 六 宿屋飲食店其他多數ノ同居人等アリテ豫防方法ノ行届キ難シト認ムルモノ
 - 七 以上各項ノ外豫防方法ノ行届キ難シト認ムルモノ
- 第六條 前條各項ニ該當セサルモ近隣ノ狀況病勢ノ如何ニ依リ隔離ヲ必要ト認ムルトキハ傳染病院又ハ隔離病舎ニ入ラシムルコトアルヘシ
- 第七條 自宅療養ノ場合ハ左ノ各項ヲ遵守スヘシ
- 一 病室ニハ醫師看護人ノ外出入スヘカス
但當該吏員ノ指示ヲ受ケタルモノハ此限りニアラス
 - 二 患者ノ用ヒタル飲食物ノ殘余病室内ノ塵芥又ハ患者ノ排泄物其病毒汚染ノ虞アル者ハ總テ覆蓋アル器物ヘ收メ消毒又ハ焼却スヘシ
 - 三 病室内ニハ蚊蠅ノ集ラサル様防禦スヘシ

- 四 病室内ニ於テハ患者ノ外飲食スヘカラス
- 五 患者用ノ物品ハ他ニ使用スヘカラス
- 六 病室ニハ患者ノ飲食物ヲ料理スヘキ器具ヲ備ヘ廢水等ハ滲漏ノ虞ナキ容器ニ受クヘシ
- 七 患者ノ沐浴シタル湯水並ニ患者用ニ供シタル汚水廢水ハ消毒ノ上無害ノ地ヲ撰ミ埋却スヘシ
- 八 病室ハ當該吏員ノ指揮ヲ受クルニアラサレハ移轉スヘカラス
- 第八條 自宅療養中前條ノ各項ヲ遵守セス爲メニ病毒傳播ノ虞アリト認ムルトキハ當該吏員ハ即時傳染病院又ハ隔離病舎ニ入ラシムヘシ
- 第九條 當該吏員ニ於テ患者ヲ傳染病院又ハ隔離病舎ニ入ラシメントスルトキハ途中患者ニ必要ナル藥品器具飲料等ヲ準備セシムヘシ
- 第十條 公私立學校劇場寄席其他興行場又ハ宿屋料理店貸座敷等多人數集合スル場所ニ傳染病患者發生シタルキハ當該吏員ハ迅速豫防消毒ノ手續ヲ施行シ其病毒傳播ノ虞ナシト認ムル者ハ速ニ立退カシムヘシ
- 第十一條 患者又ハ死体ヲ他ニ移轉セントスルトキハ其事由移轉先キ引

受人ノ住所氏名移轉ノ月日及通路ヲ定メ届出認可ヲ受クヘシ當該吏員前項ノ届出ヲ受ケタルトキハ警察官吏市町村長ト協議ノ上其事由及移轉先引受人ノ諾否ヲ調査シ不都合ナシト認ムルトキハ之ヲ認可シ其旨移轉先警察署警察分署又ハ市役所町村役場ヘ通報スヘシ

第十二條 死体ハ總テ沐浴セシムヘカラス

第十三條 死体ヲ土葬セントスル者ハ左ノ各項ヲ具シ許可ヲ受クヘシ

- 一 棺ハ陶器又ハ木製ニシテ水分滲透ノ虞ナキモノヲ用ユルコト
- 二 棺ノ覆蓋ハ厚板ヲ用ヒ「チャン」又ハ松脂ヲ以テ密閉スルコト
- 三 壙穴ノ深サハ八尺以上ヲ穿テ棺ノ四側上下ニ一尺以上ノ生石灰末又ハ石灰末ヲ填充スルコト

第十四條 熱氣消毒又ハ煮沸消毒ヲ要スヘキ物品ニシテ患家ニ於テ消毒シ難キモノハ滲漏ノ虞ナキ器物ニ入レ消毒所ニ送ラシムヘシ

第十五條 患者死者排泄物若クハ病毒汚染ノ虞アル物品ヲ乘載シタル船車昇輿釣臺等ノ消毒法ハ清潔方法消毒方法第十一條第四項第八項第九項ノ例ニ依ルヘシ

第十六條 排泄物其他病毒汚染ノ物品ヲ燒却スルニハ病毒ノ地中ニ滲透セサル様裝置ヲナスヘシ

第十七條 病毒井水ニ混入シ又ハ使用者中傳染病續發シ井水中病毒含有ノ虞レアルトキハ其水量百分ノ二ニ當ル鹽酸又ハ粗製鹽酸ヲ投入シ攪拌ノ後井戸蓋ヲ封鎖シ廿四時ノ後井戸浚ヲ爲シ尙ホ淨水ヲ以テ井戸側ノ内外ヲ洗滌シタル後ニアラサレハ使用スヘカラス

第十八條 患者ノ治癒シタル者並ニ看護人運搬人消毒人夫死体取扱人ハ消毒法了リタル後ニアラサレハ外出若クハ他人ト交通スヘカラス患者傳染病ハ治癒スルモ併發症等ノ爲メ消毒法ヲ行フコト能ハサルモノハ其消毒法了ル迄ハ傳染病患者ト同一ノ取扱ヲナスヘシ

第十九條 市町村ニ於テハ患者又ハ排泄物其他病毒汚染ノ物品ヲ運搬若クハ燒却シ又ハ死体ノ運搬埋葬ノ節ハ相當ノ看守者ヲ付スヘシ

第二十條 虎列刺、赤痢、發疹室扶私「ベスト」患者發生シ左ノ場合ニ該當スルトキハ患者又ハ其近隣ノ家ノ交通ヲ遮斷スヘシ

一 患者又ハ死体アル間ニ於テ病毒傳播ノ虞アルトキ

二 患者死者ヲ移轉シ又ハ患者轉歸後家人同居人又ハ接近家屋ノ家人同居人ニシテ病毒潜伏ノ虞アルトキ

三 自宅療養ヲ許シタルトキ

第廿一條 交通遮斷中物品ヲ區域外ニ搬出セントスルモノハ當該吏員ニ申出指揮ヲ受クヘシ

第廿二條 交通遮斷ヲ命シタルトキハ市町村ニ於テハ相當ノ看守者ヲ置キ取締ヲナサシムヘシ

第廿三條 傳染病豫防法施行規則第二條第一項但書第三條第一項但書ノ報告書ハ第四號第五號様式ニヨリ調製シ町村長ハ速ニ郡役所ヘ報告シ郡市長警察署長警察分署長ハ直ニ當廳ヘ報告スヘシ

第廿四條 左ノ場合ニハ郡長警察署長警察分署長ヨリ事實ヲ具シ報告スヘシ

但第三項ハ警察署長警察分署長ヨリ報告スヘシ

一 傳染病豫防法第一條列記以外ノ傳染病流行ノ兆アリテ豫防法施行ヲ必要ト認ムルトキ

- 二 同法第二條ノ疑似症ニ對シ法律ノ全部又ハ一部ノ適用ヲ必要ト認ムルトキ
- 三 同法第十二條第二項但書ニ依リ改葬ヲ許可シタルトキ
- 四 同法第十九條列記事項ノ一部又ハ全部施行ノ必要ト認ムルトキ
- 五 同法第廿七條ニ依リ地方長官ノ施行ヲ必要ト認ムルトキ
- 第廿五條 傳染病豫防法第十九條ニ依リ警察官吏又ハ檢疫委員ニ於テ交通遮斷ヲ行ヒタルトキハ速カニ其日時場所及遮斷内ノ戶數人口等ヲ詳記シ圖面ヲ添ヘ報告スヘシ
- 第廿六條 郡市役所警察署警察分署町村役場ニ於テハ別紙第六號様式ノ患者名簿ヲ調製シ發病轉歸ノ都度記入スヘシ
- 第廿七條 傳染病豫防法第十五條ニ據リ豫防委員ノ設置ヲ命シタルトキハ市町村ハ直ニ適當ノ者若干名ヲ撰拔シ姓名及手當又ハ報酬額ヲ記シ市ニ在ツテハ直ニ町村ハ郡役所ヲ經テ縣廳ヘ届出ツヘシ
- 傳染病撲滅シ豫防委員ヲ置クノ必要ナシト認ムルトキハ市町村ニ於テ之ヲ除解シ其旨市ニ在ツテハ直チニ町村ハ郡役所ヲ經テ縣廳ヘ届出ツ

第一號書式

傳染病患者届

病名	何病
發病月日	何年何月何日
傳染系統	何々
現住所	郡市町村大字番地
患現所在地	郡市町村大字番地
職業	何々
既未痘	未(初種再三種又)最終種痘天然痘濟ノ年月日(本痘ハ天然痘濟)欄ハ痘瘡病ニアラサレハ要セス
戶主並患者氏名	氏名何男(女)氏名

年 齡	何	年	何
初診月日	何月何日	午前午後	何時何分
診斷月日	何月何日	午前午後	何時何分

右御届候也

年 月 日

住 所
醫師 氏 名

名

市町村長豫防委員
警察署長分署長宛
檢 疫 委 員

第二號書式

傳染病患者全治(死亡)届

病 名	書例第一號表ニ同シ
現住所	全

患者 現在地	全
戶主並患 者氏名	全
全治死亡 月 日	全

右御届候也

住 所
醫師 氏 名

名

宛 (全上)

第三號書式

傳染病患者死体検案届

病 名	書例第一書式ニ同シ
發病月日	全
傳染ノ系	全

傳染病豫防法施行細則

患者 現在地	全
職業	全
既未痘	全
戶主並患者 氏名	全
年齡	全
死亡 月日時	全
檢案 月日時	何年何月何日時

右御届候也

年 月 日 宛 (全上)

住 所 醫師 氏 名

第四號書式(本紙ハ各病毎ニ別紙ニ認ムルコト)

傳染病患者報告

届出通報ニ接 シタル日時	病發病 診斷月日時	一家中ニ同患 者アラハ其數	住所	氏名	年齢

右及報告候也

年 月 日 何町村役場(郡市役所)(警察署、警察分署)

何郡役所(縣廳)宛

第五號書式(本紙ハ各病毎ニ別紙ニ認ムルコト)

傳染病全治死亡報告

病名	全治死亡月日	住	所	氏名	年齢

右及報告候也

年月日

何町村役場(郡市役所)(警察署、警察分署)

何郡役所(縣廳)宛

一紙ニ全治死亡ヲ列記スル場合ハ死亡者ニ限リ朱書スルヲ要ス
第六號書式

傳染病患者名簿

發病月日	診斷日	轉隨日	治死	町村 字名或 戸主 子或 女	職業	氏	名	年齡	已未 痘及 感否 ノ別	痘 種 痘 入 痘 殆	療 養 主 治 場 所 醫 師

縣令第二十二號 (明治三十一年三月十八日)

明治三十年三月法律第三十六號傳染病豫防法第二條ニ依リ虎列刺病及赤痢病疑似症ニ關スル規程左ノ通り相定メ明治三十年三月縣令第十八號虎列刺病及赤痢病流行ノ際吐瀉病及下痢病患者届出並取扱手續ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

但施行ノ終始及區域ハ別ニ告示ヲ以テ之ヲ定ム

虎列刺病及赤痢病疑似症ニ關スル規程

第一條 此規程ハ虎列刺病又ハ赤痢病流行シ若クハ流行ノ虞アルトキ吐瀉併發病及下痢病患者ニ對シ施行スルモノトス

第二條 虎列刺病流行ノ際吐瀉併發病及赤痢病流行ノ際下痢病患者アリタルトキハ直チニ醫師ノ診斷ヲ受クヘシ

前項醫師ノ診察ヲ速ニ受クル能ハサル場合ニ於テハ家族若クハ隣保ノ者ヨリ最寄警察官署又ハ市町村役場ヘ届出ツヘシ

第三條 (削除)

第四條 警察官又ハ市町村長ニ於テ第二條第二項届出ニ接シタルトキハ直チニ醫師ヲ伴ヒ患者ノ家ニ至リ虎列刺病又ハ赤痢病ナルヤ否ヲ診斷セシムヘシ

第五條 警察官又ハ市町村長ハ届出ニ接シタル患者虎列刺病又ハ赤痢病ナルトキハ制規ニ依リ豫防消毒ノ手續ヲ爲スハ勿論未タ該病タルノ証判然セサルモ注意ノ爲メ相當ノ豫防消毒法ヲ指示施行セシムヘシ

第六條 第二條第二項家族ヨリ届出テサルモノ又ハ第三條ニ違背シタルモノハ十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

縣令第二十三號

明治三十年三月法律第三十六號傳染病豫防法第十九條ニヨリ虎列刺病赤痢病、發疹室扶私病及バスト發生地交通遮斷手續左ノ通相定ム

但明治十六年七月甲第六十九號布達ハ廢止ス

虎列刺病、赤痢、發疹室扶私、バスト病發生地交通遮斷手續

第一條 市街村落ニ於テ虎列刺病、赤痢病、發疹室扶私病又ハバストヲ發生シ續テ數戸ニ傳播シタルトキ其他ノ部分ニ及ホサル様遮斷シ得ヘシト認ムルトキハ其全部若クハ一部ヲ限リ他所トノ交通遮斷ヲ命令ス

第二條 交通遮斷ヲ命シタルトキハ警察官吏又ハ檢疫委員ハ直ニ之ヲ市町村長ニ通知シ及區域内一般ヘ命令シ且明治三十一年三月縣令第二十二號傳染病豫防法施行細則第廿五條ノ手續ヲ爲スヘシ

但交通遮斷ハ傳染病豫防法施行規則第六條第一項ノ時日間ニ限ル

第三條 市町村長ニ於テ前條ノ通知ヲ受ケタルトキハ直ニ之ヲ豫防委員等ニ通知シ共ニ警察官吏又ハ檢疫委員ヲ助ケ其事務ニ従事スヘシ

第四條 自己ニアラサレハ處分シ難キ要件若クハ農業等ノ爲メ遮斷區域

ヲ出入セントスルモノハ警察官吏又ハ檢疫委員ニ申出其指揮ヲ受ヘシ
但區域外ニ出テントスルモノハ十分ノ消毒法ヲ行フアラサレハ之
ヲ許サス

第五條 日要必需ノ物品購入其他要用ヲ辨セシムル爲メ使役者ヲ置クノ
必要アルトキハ其市町村ニ於テ之ヲ定メ警察官吏又ハ檢疫委員ノ取締
ヲ受ケシムヘシ

第六條 交通遮斷ノ爲メ自活シ能ハス救助ヲ願フモノアルトキハ市町村
長ニ於テ篤ト調査ヲ遂ケ事實至當ト認ムルモノハ之ニ証明書ヲ付シ警
察官吏又ハ檢疫委員檢印ヲ受ケ市長ハ直チニ縣廳ヘ町村長ハ郡役所ヘ
差出スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ郡長ハ之ヲ調査シ至當ト認ムルモノハ之ヲ許可シ直
チニ縣廳ヘ届出ツヘシ

第七條 前條自活シ能ハサルモノハ一人ニ付一日金拾五錢以内ノ生活費
ヲ救與ス
但患家ニ對スルモノハ傳染病豫防法第二一條七ノ例ニ據ル

第八條 交通遮斷ノ區域及終始ノ期日ハ之ヲ管内ニ告示ス

第九條 病毒他方ニ蔓延スルカ若クハ其區域内ニ於テ全ク撲滅スルトキ
ハ交通遮斷ノ解除ヲ命令ス

前項ノ場合ニ於テハ警察官吏又ハ檢疫委員ハ市町村長及區域内ニ通シ
且遮斷中ノ情况ヲ詳記シ縣廳ヘ報告スヘシ

傳染病患者鐵道乘車規程

明治三十三年八月
遞信省令第三八號

第一條 傳染病患者ヲ乘車セシムルトスルトキハ豫メ之カ申込ヲ爲シ鐵
道ノ承諾ヲ受クルコトヲ要ス

第二條 前條ノ申込ヲ受ケタルトキハ鐵道ハ列車ヲ指定シ其ノ他運送上
旅客及公衆ノ安全ヲ保スルニ必要ナル事項ヲ指定スルコトヲ得

第三條 傳染病患者ハ傳染病豫防法第九條ニ依リ當該吏員ヨリ移送認可
ヲ得タルコトヲ證明スルニ非サレハ乘車セシムルコトヲ得ス

第四條 傳染病患者ニハ少クトモ一人ノ附添人ヲ附スルコトヲ要ス
鐵道ノ請求アルトキハ前項附添人ノ外醫師ヲ附スルコトヲ要ス

第五條 傳染病患者ハ貸切車ヲ以テ運送シ普通旅客ト其ノ車輛ヲ區別シ當該掛員ノ外一切之カ交通ヲ遮斷スヘシ

第六條 傳染病患者ハ傳染病豫防法第九條ニ依リ移送ノ認可ヲ受ケタル地ノ外猥リニ下車セシムルコトヲ得ス

第七條 傳染病患者ヲ搭載セル車輛ハ其ノ入口ニ「傳染病者」ノ四字ヲ掲示スヘシ

第八條 傳染病患者者車中ニ於テ死亡シタルトキハ警察官又ハ其ノ他ノ當該吏員ニ之ヲ申報スヘシ

第九條 乗車中傳染病ニ罹リタルモノアルトキハ速ニ警察官又ハ其ノ他ノ當該吏員ニ之ヲ申報スヘシ

第十條 車輛、器具ノ消毒其ノ他傳染病豫防ニ關スル取締ハ一般法令ノ規定ニ依ル

附 則

第十一條 本規程ハ鐵道營業法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

訓令丙第三六三號 (明治卅四年五月廿八日)

郡役所、市役所、警察署、全分署

旅行中ノ外國公使又ハ其家族雇人ニシテ傳染病ニ罹リ若クハ其旅館内ニ傳染病患者ノ發生シタル場合ニ於テ之ヲ傳染病院又ハ隔離病舎ニ收容シ又ハ交通遮斷ヲ執行シ若クハ豫防消毒法ヲ施行スルコトヲ得ルヤ否ヤニ付テハ國際公法上外國公使ト雖トモ衛生及公安警察ノ爲メ設ケラレタル法令ヲ遵守スヘキ等ナルモ其身体上及執務上ノ完全ナル自由ハ又最モ尊重ヲ要スヘキ儀ニ付右等ノ場合ニ於テ共同商議シ先以テ豫防方法施行上ノ協議ヲ遂ケタル後處置スヘク其調ヒ難キ場合ニハ何分ノ指揮ヲ受クヘキ儀ト心得ラルヘシ

右訓令ス

縣令第三十五號 (明治卅四年四月卅日)

(縣令第四十八號市町村名ハ畧ス)

明治卅三年五月縣令第四十八號左記市町村中濱松町ノ下蒲村天神町村淺

塙村市野村伊佐見村白脇村小笠郡掛川町ノ二十五字及沼津町ノ楊原村ノ内大字下香貫ノ十字ヲ削リ總テノ病死者ヲ肺炎腦膜炎肋膜炎腦出血(卒中)脚氣衝心心臟麻痺マラリヤ窒扶斯及其類症梅毒病名不詳病死者其他必要ト認ムル病死者ト改正ス
本令ハ五月一日ヨリ施行ス

内務省訓令第四號 (明治廿八年四月卅日)

道 廳 府 縣

市町村ニ設置スヘキ避病院設備標準左ノ通定ム

市町村ニ設置スヘキ避病院設備標準

- 一 避病院ハ消毒法充分ナルトキハ病毒ヲ傳播スルノ虞ナキヲ以テ其建設地ハ力メテ患者運搬ノ便利ヲ圖リ道路險惡交通不便ノ地ヲ避クヘシ
- 一 避病院ハ左ノ建物ヲ設クヘシ
 - 一 重症患者室 若干棟
 - 一 輕症患者室 若干棟
 - 一 快復期患者室 一棟

以上ノ建物ニハ各別ニ廁ヲ設ケ且快復期患者室ニハ浴室ヲ備フヘシ
一 醫員其他事務員詰所調劑所看護人室及炊場等 一棟

但浴室廁ヲ備フヘシ

一 消毒所

一 箇所

但洗濯所ノ附屬ヲ要ス

一 屍室

一 箇所

一 汚物置場及燒却所

一 箇所

一 物置

一 箇所

町村ニ於テハ其狀況ニヨリ重症患者室輕症患者室及快復期患者室ヲ同
一 建物中ニ區劃シテ設クルコトヲ得

一 病室ノ廣サハ患者一人ニ付凡一坪半ノ割合ヲ以テ造ルヘシ

一 病室ハ床側壁トモ板張ト爲シ總テ洗滌消毒ニ使スヘシ

一 屍室ハ床ヲ漆喰敲キ又ハ板張ト爲スヘシ

一 各病室ノ床下ハ可成漆喰敲キト爲シ多少ノ傾斜ヲ付シテ汚水ノ流下ニ
便ニシ別ニ滲透セサル汚水溜ヲ設ケテ之ニ入ルノ施設ヲ爲スヘシ

- 一 避病院ニハ左ノ割合ヲ以テ醫師、調劑掛、看護人、事務員ヲ置クヘシ
 - 一 醫長 一人 一 醫員 患者十五名乃至二十名ニ付一人
 - 一 調劑掛 二人以上 一 看護人 患者五名ニ付一人
 - 一 事務員 若干
- 町村ニ於テハ其狀況ニヨリ別ニ醫長、調劑掛ヲ置カス醫員ニ於テ之ヲ兼ヌルコトヲ得

甲第二十一號 (明治廿八年八月十五日)

郡役所、市役所、町村役場

市町村ノ避病院ハ左ノ各項ニ依リ管理スヘシ

- 第一 醫長ハ院内ノ醫務衛生事務ヲ掌理シ醫員以下看護人等ヲ監督スヘシ
- 醫長ハ毎日一回以上廻診シ治療並看護ノ方針ヲ醫員及看護人ニ指示スヘシ
- 第二 醫員ハ醫長ノ指揮ヲ受ケ治療其他患者ニ關スル事務ヲ擔當スヘシ

- 第三 調劑掛ハ醫長ノ指揮ヲ承ケ調藥ニ關スル一切ノ事務ヲ擔當スヘシ
- 第四 消毒ニ從事セシムル爲メ豫メ院内諸員ニ就キ消毒擔當者若干名ヲ定メ置クヘシ

- 第五 看護人ハ醫長及醫員ノ指揮ヲ承ケ懇切ニ患者ノ看護ヲ爲スヘシ
- 第六 醫員調劑掛事務員ハ交番宿直スヘシ

看護人ハ院内ニ宿泊シ交番ヲ以テ通宵看護ニ從事スヘシ
看護人ニシテ調劑所及賄場ニ往復スルモノハ豫メ之ヲ定メ置キ其他ハ猥リニ出入セシムヘカラス

- 第七 入院患者ノ父母妻子兄弟等附添看護ヲ出願スルトキハ院務ニ妨ケナキ限ハ之ヲ許可スルコトヲ得但院内ノ諸規則醫長以下ノ指揮ヲ遵守セシメ且猥リニ外出ヲ許スヘカラス

- 第八 醫長醫員及看護人病室ニ入ルトキハ病室用衣ヲ被ヒ病室ヲ出テタルトキハ之ヲ脱スヘシ

見舞人其他病室ニ出入スルトキハ本項ニ準シ病室用衣ヲ被ハシムヘシ
消毒所屍室汚物置場及燒却所ニ出入スルトモ亦本項ニ準ヌヘシ

- 第九 病室用衣ハ一週二回以上消毒ノ上之ヲ洗濯スヘシ若シ患者ノ排泄物ニ觸レタルトキハ其都度十分消毒ヲ爲スヘシ
- 患者護送ノ人夫及運搬ノ器具ハ十分消毒ヲ爲スヘシ
- 第十 病室其他ニ於テ患者又ハ其被服寢具器具等ニ觸接シタルトキハ速ニ手足其他觸接シタル部分ヲ二十倍ノ石炭酸水五十倍ノ格魯兒石灰水又ハ千倍ノ昇汞水(着色シタルモノ)ヲ以テ消毒スヘシ
- 第十一 飲料水及飲食物ハ必ス煮沸シタルモノヲ用ユヘシ
- 第十二 飲食物ハ避病院指定ノモノ、外ハ總テ他ヨリ院内ニ運ヒ入ル、ヲ禁スヘシ
- 第十三 患者用ノ飲食器具ハ毎回必ス之ヲ煮沸シ又ハ熱湯ニテ洗滌スヘシ
- 第十四 患者ニ供シタル飲食物ノ殘餘ハ直チニ消毒ノ上一定ノ場所ニ棄却スヘシ
- 第十五 患者ノ排泄物ハ必ス一定ノ容器中ニ取り概ネ排泄物量二倍ノ石灰乳(十倍ノモノ)ヲ混シ一時間以上放置スヘシ

石灰乳ニ代フルニ格魯兒石灰ヲ以テスルコトヲ得此場合ニ於テハ排泄物量約十五分ノ一ヲ格魯兒石灰ヲ混シ十五分間放置スヘシ汚水ノ消毒モ亦之ニ準ス

第十六 患者ヲ恢復期患者室ニ移ストキハ豫メ相當ノ消毒ヲ爲スヘシ

第十七 患者全愈退院ノ際ハ先ツ千倍ノ昇汞水又ハ四十倍ノ石炭酸水ニテ全身ヲ拭淨シタル上入浴セシメ石鹼ヲ以テ身体ヲ清洗シ然ル後衣服ヲ更ヘ退院セシムヘシ

第十八 患者ノ被服又ハ寢具器具其他病毒汚染ノ疑アルモノハ消毒法ヲ行ヒタル後ニアラサレハ院外ニ持出ツルコトヲ禁スヘシ

第十九 患者ノ寢具衣類其他ノ布片ヲ消毒スルニハ蒸溜消毒又ハ煮沸消毒ヲ行フヘシ但シ同法ヲ行ヒ能ハサルトキハ二十倍ノ石炭酸水中ニ浸漬スヘシ

第二十 革製ノ物品ハ二十倍ノ石炭酸水又ハ五十倍ノ格魯兒石灰水ヲ以テ拭淨スヘシ

第二十一 患者ニ觸接シタル物ニシテ瀋熱又ハ藥力ヲ以テ消毒シ能ハサ

ルモノハ少ナクモ六日間日光ノ直射シ乾燥セル場所ニ曝スヘシ
第二十二 患者ノ排泄物ニ觸接セシ物品ニシテ價格ノ低廉ナルモノハ成
ルヘク之ヲ燒棄スヘシ

第二十三 牀板側壁及家具中木製及金屬製ノ部分其他之ト類似ノ物品ハ
二十倍石炭酸水ヲ以テ濕シタル布片ヲ以テ拭淨スヘシ但床板側壁等ヲ
消毒スルニハ十倍ノ石炭乳ヲ用ユルモ可ナリ此場合ニ於テハ少クモ二
時間放置シタル後洗滌スヘシ
病室ハ消毒ヲ終リタル後成ルヘク二十四時間放置シ空氣ヲ流通セシム
ヘシ

第二十四 死者アルトキハ直チニ二十倍ノ石炭酸水ニ浸シタル布片ヲ以
テ全身ヲ被包シ速ニ之ヲ屍室ニ移スヘシ

第二十五 火葬又ハ埋葬スル爲メ死体ヲ他所ニ移ストキハ棺中ニ生石灰
又ハ格魯兒石灰ヲ入レ其上ニ屍体ヲ置キ更ニ該藥ヲ撒布シテ之ヲ密閉
スヘシ

死体ノ運搬ハ未明又ハ夜間ニ於テスヘシ

第二十六 院内ニハ寢具其他必要ナル器具藥品等ヲ備置クヘシ

院内ノ諸員及外來者ニ使用セシムル爲メ病室用衣ヲ備ヘ置クヘシ
寢臺ヲ用ヒサル場合ニ於テハ壘ノ上ニ油紙其他汚物滲透ノ虞ナキ物ヲ
敷クヘシ

朕地方衛生會規則ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
勅令第二百七十號 (明治廿九年七月廿三日)

地方衛生會規則

第一條 地方衛生會ハ府縣知事ノ監督ニ屬シ其ノ府縣内公衆衛生獸畜衛
生ニ關スル事項ニ就キ警視總監府縣知事諮詢ニ應シ意見ヲ開申ス

第二條 地方衛生會ハ前條ノ事項ニ就テハ警視總監府縣知事ニ建議スル
コトヲ得

第三條 地方衛生會ハ議事整理ノ爲メ規則ヲ議定シ府縣知事ノ認可ヲ受
クヘシ

第四條 地方衛生會ハ會長一人委員十五人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

會長ハ府縣知事ヲ以テ之ニ充ツ

委員ハ府縣書記官、警部長（東京府ハ警視廳第三部長）參事官名譽職府縣參事會員四人、府縣廳所在地ノ郡長又ハ市長（沖繩縣ニ於テハ區長）醫師藥學家獸醫若干人ヲ以テ之ニ充ツ

第五條 臨時必要ノ場合ニ於テハ前條定員ノ外臨時委員ヲ命スル事ヲ得

第六條 委員中名譽職府縣參事會員ハ郡部議員ヨリ出ツル者及市部議員ヨリ出ツル者各二名ヲ互選シ府知事之ヲ命ス

委員中醫師藥學家獸醫及臨時委員ハ府縣知事之ヲ命ス

醫師藥學家獸醫ヨリ出ツル委員ノ任期ハ四箇年トス但シ滿期後再任セラル、コトヲ得

第七條 會長ハ會務ヲ總管シ議事規則ニ依リ議事ヲ整理シ其ノ決議ヲ警視總監府縣知事ニ具申ス

第八條 會長事故アルトキハ府縣書記官ヨリ出ツル委員之ヲ代理シ府縣書記官ヨリ出ツル委員事故アルトキハ府縣知事ノ指名シタル委員ヲシテ事務ヲ代理セシム

第九條 委員ハ第一條ノ事項ニ就キ意見アルトキハ何時ニテモ會長ニ開申スルコトヲ得

第十條 地方衛生會ニ書記ヲ置キ府縣屬又ハ警部ヲ以テ之ニ充ツ書記ハ會長ノ指揮ヲ承ケ議事ノ筆記及庶務ニ從事ス

第十一條 會長委員臨時委員及書記ニハ府縣稅（府縣稅ヲ施行セサル府縣ニ於テハ地方稅、沖繩縣ニ於テハ沖繩縣地方費以下倣之）ヲ以テ手當ヲ給スルコトヲ得

第十二條 官吏ノ資格ヲ以テ委員トナリタル者ノ旅費ハ其ノ所屬廳ノ經費ヨリ支給シ其ノ他ノ委員ニ係ル旅費ハ府縣稅ヨリ支給ス

附 則

第十三條 府縣制ヲ施行セサル府縣ニ於テハ常置委員ヲ以テ名譽職參事會員ニ代フ此ノ場合ニ於テハ常置委員互選シ府縣知事之ヲ命ス但シ市部會郡部會ヲ開設シタル府縣ニ於テハ市部議員ヨリ出ツル者及郡部議員ヨリ出ツル者各二名ヲ互選スハシ

第十四條 沖繩縣ニ於テハ其ノ地方ニ於テ學識名望アル者若干人ヲ以テ

第四條第三項ノ名譽職府縣參事會員ニ代フルモノトス
前項委員ノ任命ハ第六條第二項ノ例ニ依リ其ノ任期ハ同條第三項ノ例
ニ依ル

第十五條 此ノ規則ハ明治二十九年八月一日ヨリ施行ス
第十六條 從前ノ委員ハ別ニ辭令ヲ用キス本令施行ノ日ヨリ其ノ任ヲ解
カレタルモノトス

縣令第二十一號 (明治三十一年三月十八日)

市町村衛生組合設置ニ關スル規程左之通相定ム

第一條 明治三十年三月法律第三十六號傳染病豫防法第二十三條ニ依リ
市町村ヲ以テ其區域トシ衛生組合ヲ設クヘシ

但土地ノ狀況ニ依リ數箇ノ組合ヲ設クルモ妨ケナシ
第二條 衛生組合ニ於テ施行スヘキ事項ノ概目左ノ如シ

- 一 飲料水常用水ノ使用ニ關スルコト
- 一 飲食物ノ取締ニ關スルコト

- 一 清潔方法消毒方法ノ設備ニ關スルコト
 - 一 清潔方法消毒方法實施ニ關スルコト
 - 一 溝渠下水ノ廁園、芥溜等ノ掃除及改造ニ關スルコト
 - 一 衛生上有害ヲ認ムル諸建造物ノ位置構造ニ關スルコト
 - 一 不潔物等洗濯取締ニ關スルコト
 - 一 傳染病患者ヲ隱蔽セシムルモノノ取締ニ關スルコト
 - 一 患者發生ノ際交互ニ於テ敏速通牒ニ關スルコト
 - 一 保護者ヲ傳染病患者救治ニ關スルコト
- 第三條 衛生組合規約ヲ以テ定ムル事項左ノ如シ
- 第四條 組合規約及役員ノ氏名ハ郡長ニ届出ヘシ

附 則

第五條 衛生組合ハ本年五月迄ニ之ヲ設ケ市ニ在テハ直ニ町村ニ在テハ郡役所ヲ經テ縣廳ヘ届出ヘシ

内務省令第十八號 (明治卅年七月十五日)

傳染病豫防法第二十四條補助ニ關スル件左ノ通改ム

府縣知事ハ傳染病豫防法第二十四條ニ依リ府縣稅又ハ地方稅ヨリ市町村ニ對スル補助ニ關シ左ノ各項ニ依リ規程ヲ定メ内務大臣ノ認可ヲ受ヘシ

- 一 傳染病豫防法第二十一條及第二十三條第二項ノ支出總額ニ對シ府縣稅又ハ地方稅ヨリ各市町村ニ補助スル歩合ハ精算額ノ六分ノ一以上二分ノ一以下トス但支出ニ伴フ收入アルトキハ支出總額ヨリ其ノ收入ヲ控除シタル額ニ對シ本項ノ補助歩合ヲ定ムルコトヲ得
- 二 傳染病豫防法第二十一條及第二十三條第二項ノ支出中特ニ費途ヲ指定シテ別段ノ補助歩合ヲ定メ又ハ指定シタル費途ニ限り補助ヲ爲シ又ハ市町村ノ負擔ニ應ジテ別段ノ補助歩合ヲ定ムルコトヲ得

但本項ニ依リ算出シタル補助ノ金額前項六分ノ一ヲ下ルトキハ六分ノ一迄増額シ二分ノ一ヲ超ルトキハ二分ノ一迄減額スヘシ

三 市町村ノ支出額其ノ負擔ニ堪ヘスト認ムルトキ其ノ他特別ノ事由アルトキハ二分ノ一以上全部迄ヲ補助スルコトヲ得

四 補助ハ現品ヲ以テ之ヲ交付スルコトヲ得但金額ニ換算スヘシ

(明治十九年七月閣令第二三號)

官吏公務ニ依リ傳染病豫防救治ニ從事シ爲メニ感染シ又ハ死亡シタルトキハ左ノ區別ニ從ヒ手當金ヲ給ス

- 一 手當金ヲ分チ弔祭料救助料療治料ノ三種トス
- 一 救助料ハ感染者又ハ死亡シタル者ノ遺族ニ之ヲ給ス
- 一 療治料ハ感染者治療看護ノ雜費トシテ之ヲ給ス
- 一 弔祭料ハ年俸十二分ノ一若クハ月俸一箇月分若クハ日給三十日分ヲ給ス但官ヨリ埋葬スル者ハ之ヲ給セス
- 一 救助料ヲ分テ二等トス

- 一 等俸給五箇月分日給百五十日分
- 二 等俸給三箇月分日給九十日分
- 一 感染者死亡シタルキハ二等救助料ヲ給シ死亡セサルキハ二等救助料ヲ給ス
- 一 療治料ハ高等官ニハ一日三圓判任官ニハ一日二圓ヲ給ス 但官ヨリ治療スル者ハ之ヲ給セス

(明治二十八年六月勅令第七二號)

傳染病豫防救治ニ従事スル官吏准官吏及備員ニシテ專ラ該病者又ハ病毒汚染ノ虞アル物品ニ接近スル者ニハ各其ノ俸給又ハ給料月額三分一以内ノ月手當ヲ給スルコトヲ得但府縣ノ收入ヨリ俸給又ハ給料ヲ受ル官吏准官吏及備員ニシテ本官職ノ資格ヲ以テ従事スル者ニ給スル手當並傳染病豫防法第十八條ニ依リ檢疫委員ト爲ル者ニ給スル手當其府縣ノ負擔トス

(明治二十三年四月勅令第一四一號)

明治三十三年法律第三十號第五條ノ療治料ハ給料ヲ受クル者ニ在リテハ其ノ給料額ニ依リ同法別表ノ等級ニ照シ一等乃至四等ノ者ニハ一日三圓五等乃至十二等ノ者中一日二圓十三等ノ者ニハ一日一圓ヲ給ス其給料ヲ受ケザル者ニ在リテハ一日三圓以内ニ於テ本局長官適宜之ヲ給ス

(明治二十八年八月勅令第七一號)

傳染病豫防救治ニ従事スル官吏准官吏及備員ニシテ專ラ該病者又ハ病毒汚染ノ虞アル物品ニ接近スル者ニハ各其俸給又ハ給料月額三分一以内ノ月手當ヲ給スルコトヲ得但府縣ノ收入ヨリ俸給又ハ給料ヲ受クル官吏准官吏及備員ニシテ本官職ノ資格ヲ以テ従事スル者ニ給スル手當並傳染病豫防法第十八條ニ依リ檢疫委員ト爲ル者ニ給スル手當ハ府縣ノ負擔トス

(明治十九年八月内務省訓令第五九八號)

傳染病豫防救治ニ従事シ爲ニ感染シ又ハ死亡シタル者等へ手當給與ノ儀ハ左ノ手續ニ依リ支給スヘシ

- 一 官吏準官吏ハ本年七月第二十三號閣令ニ依リ廳府縣ノ定額經費内ヨリ支給スヘシ 但高等官ニ係ルモノハ其都度具申スヘシ
 - 一 該閣令ハ恩給令及一時賜金ノ法ニ拘ラス特ニ其手當金ヲ支給スルモノトス
 - 一 巡查看守ハ明治十五年七月第四十一號公達巡查看守給助例ニ依リ巡查ハ警察費ヨリ看守ハ監獄費ヨリ支給シ其感染死ニ至ラサル者ハ該閣令ニ依リ二等給助料ヲ支給スヘシ 但該給助例實施以前ニ在テ未タ支給セサル者ハ明治八年第三號公達ニ依リ巡查ハ警察費看守ハ監獄費ヨリ支給スヘシ
 - 一 該閣令以前ニ係ル者ニシテ給與未濟ノモノハ此手續ニ據リ具申スヘシ
 - 一 備醫師檢疫掛看護夫人夫等ハ總テ明治十年十二月第八十九號公達ニ依リヨリ地方稅中衛生費若ハ身分所屬ノ地方費ヨリ適宜支給スヘシ
- (明治三十三年三月法律第三〇號)

第一條 判任以上ノ官吏ニ非スシテ傳染病ノ豫防救治ニ從事スル者公務ニ因リ病毒ニ感染シ又ハ之ニ原因シテ死亡シタルトキハ本法ノ規定ニ依リ手當金ヲ給ス

第二條 手當金ハ左ノ四種トス

- 一 療治料
- 二 給助料
- 三 弔祭料
- 四 遺族扶助料

第三條 病毒ニ感染シタル者ニハ療治料ヲ給ス感染者治癒シタルトキハ給助料ヲ給シ死亡シタルトキハ其遺族ニ弔祭料及遺族扶助料ヲ給ス遺族ナキトキハ葬儀ヲ行フ者ニ弔祭料ヲ給ス

遺族中遺族扶助料ヲ受クヘキ者ノ順位ハ官吏遺族扶助法ノ例ニ依ル
第四條 遺族扶助料ハ死者ノ受ケタル給料ノ金額ニ應シ別表ニ依リ一時之ヲ給ス其給料ヲ受ケサル者ニ在リテハ別表ノ範圍内ニ於テ本屬長官適宜之ヲ給ス

第五條 療治料ハ命令ノ定ムル區別ニ依リ一日三圓以内ヲ給ス
 給助料ハ遺族扶助料ノ二分ノ一ニ相當スル金額ヲ給ス
 弔祭料ハ月給一箇月分又ハ日給三十日分ニ相當スル金額ヲ給ス其給料
 ヲ受ケサル者ニ在リテハ本屬長官適宜之ヲ給ス
 第六條 手當金ハ國庫支辨ノ事務ニ従事スル者ニ在リテハ國庫ノ負擔ト
 シ府縣費支辨ノ事務ニ従事スル者ニ在リテハ府縣ノ負擔トス
 第七條 地方長官ハ市區町村ニ指示シ本法ノ規定ニ準シ其傳染病豫防救
 治ニ従事スル者ノ手當金支給ニ關スル規定ヲ設ケシムルコトヲ得

(別表)

等	級	月	給	遺族扶助料
一	等	二百圓以上	千	圓
二	等	百六十圓以上	九	百圓
三	等	百三十圓以上	八	百圓

四	等	百圓以上	七	百圓
五	等	八拾圓以上	六	百圓
六	等	七拾圓以上	五	百圓
七	等	六拾圓以上	四	百五十圓
八	等	五拾圓以上	四	百圓
九	等	四拾圓以上	三	百五十圓
十	等	三拾圓以上	三	百圓
十一	等	二拾圓以上	二	百五十圓
十二	等	拾圓以上	二	百圓
十三	等	拾圓未滿	百	圓

静岡縣令第八十三號 (明治三十三年九月廿一日)
 市町村ハ明治三十三年法律第三十號ニ準シ傳染病豫防救治ニ従事スル者
 ノ手當金支給ニ關スル規定ヲ設ケ施行スヘシ但其給料ヲ受ケサル者ノ手
 當金ハ別表ノ範圍内ニ於テ之レヲ定ムヘシ
 前項ノ規定ハ市ハ直ニ町村ハ郡役所ヲ經由シテ縣知事ニ報告スヘシ
 本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

名譽職町村長 全助役	吊祭料	遺族扶助料
衛生委員 豫防委員	拾圓以上 四拾圓以上	百五拾圓以上 三百圓以内

療治料ハ一日壹圓以上二圓以内給助料ハ遺族扶助料ノ二分ノ一二相
 當スル額トス

郡第四號 (明治廿八年七月十一日)

郡役所 警察署

郡醫職務規程左ノ通り相定ム

郡醫職務規程

第一條 郡醫ハ受持郡内公衆ノ健康ヲ保持シ傳染病ヲ豫防防遏スルノ目
 的ヲ以テ郡長及警察署長ヲ輔佐シ左ノ各條ノ任務ヲ盡スヘキ責ヲ有ス
 ルモノトス

第二條 郡醫ハ衛生上ノ利害又ハ傳染病豫防ニ關シ郡長又ハ警察署長ヨ
 リ通達アリタルトキハ左ノ事項ヲ視察シ意見ヲ復申スヘシ

- 一 道路、溝渠、井戸、下水、便所、芥溜等
- 二 學校、病院、製造場、市場、劇場、寄席、宿屋、湯屋裏店等
- 三 飲食物玩弄物等

第四條 前項ノ外衛生上又ハ傳染病豫防上有害ノ結果ヲ來スヘキ虞アル件
 第三條 郡醫ハ受持郡内ニ傳染病又ハ流行病若クハ之ニ類似ノ病發生ス
 ル時ハ郡長又ハ警察署長ノ通達ニ依リ豫防救治ノ實況ヲ視察シ若シ不

充分ト認ムルハ町村長及町村醫ト謀リ救療及豫防消毒上不行届ナキ様之カ指示等ヲ爲シ病毒ノ傳播ヲ防遏スヘシ

第四條 郡醫ハ受持郡内ノ町村衛生組合長ヲ指導シ清潔法ノ持續傳染病ノ豫防ニ付該組合員共同一致シテ實効ヲ舉クル様盡力セシメ且質疑等アルハ懇篤説明ヲ爲スヘシ

第五條 郡長又ハ警察署長ニ於テ臨時必要アリト認メ受持郡内ノ出張ヲ命スルトキハ郡醫ハ何時ニテモ出張スヘキモノトス

第六條 郡醫ハ受持郡内傳染病豫防消毒其他公衆衛生及醫事上ノ景况ニ付必要ノ事項アルハ意見ヲ具シ其時々郡長及警察署長ヘ申報スヘシ

甲第十號 (明治二十年二月九日)

郡役所 市役所 町村役場

市町村醫設置規則左ノ通之ヲ定ム

市町村醫設置規則

第一條 市町村ニハ必ラス一名以上ノ市町村醫ヲ設置スヘシ

但都合ニ據リ數町村聯合シテ之ヲ置クモ妨ナシ

第二條 市町村醫ハ其市町村内傳染病其他公衆衛生ニ關スル一切ノ事務ニ從事スルモノトス

但一醫ニシテ數町村ノ町村醫タルヲ得

第三條 市町村醫ノ姓名給料若クハ報酬額ハ其市町村ヨリ縣廳ヘ届出ツヘシ但市町村醫ヲ變更シタルトキ亦同シ

附 則

第四條 市町村ニ於テハ本年五月三十一日迄ニ市町村醫ヲ定メ第三條ノ届出ヲ爲スヘシ

第五條 明治十七年七月號外達町村醫設置概則ハ本則施行日ヨリ廢止ス

(明治三十年六月内務省令第一五號)

傳染病豫防法第十八條ニ依リ檢疫委員設置規則左ノ通定ム

第一條 檢疫委員ハ廳府縣郡島廳ノ官吏醫師藥劑師等ニ就キ府縣知事(東京府ハ警視總監以下之ニ做フ)之ヲ命ス

警視總監ハ東京府知事ニ協議シ府ノ官吏ニ檢疫委員ヲ命スルコトヲ得
第二條 檢疫委員ハ府縣知事ノ命ヲ承ケ傳染病豫防事務ノ監督廳府縣ニ
於テ施行スル船舶汽車ノ檢疫其他傳染病豫防救治ニ關スル事務ニ從事ス
第三條 檢疫委員ノ設置及廢止ハ之ヲ告示スヘシ
第四條 檢疫委員ノ組織及職務ハ第五條以下ニ準據スヘシ 但廳府縣ノ
本廳ニ限り檢疫委員ヲ置キ又ハ郡市嶋ニ限り檢疫委員ヲ配置スルモ妨
ナシ

第五條 廳府縣ノ本廳ニ檢疫委員長一人ヲ置ク 但必要アルトキハ副長
一人又ハ數人ヲ置ク

檢疫委員長ハ警部長(警視廳ハ警察醫長)副長ハ委員中ニ就キ府縣知事
之ヲ命ス

第六條 府縣知事ハ郡市島ニ檢疫委員事務所ヲ置キ其郡市島内ニ屬スル

第二條ノ事務ニ從事セシムルコトヲ得

第七條 檢疫委員事務所ニ所長一人及副長一人又ハ數人ヲ置ク

檢疫委員事務所ハ郡長島司又ハ警察署長ニ副長ハ委員中ニ就キ府縣知

事之ヲ命ス

第八條 檢疫委員ノ職務章程ハ府縣知事之ヲ定ム

(明治三十三年三月勅令第九七號)

第一條 傳染病流行シ又ハ流行ノ兆アルトキハ内務大臣ノ指定シタル廳

府縣ニ檢疫官若干人ヲ置キ之ヲ警察部(警視廳ニ在リテハ第三部)ニ屬
セシム

第二條 檢疫官ハ上官ノ命ヲ承ケ檢疫豫防ニ關スル事務ヲ分掌ス

第三條 檢疫官ハ醫師藥劑師等ニ就キ警視總監地方長官之ヲ命ス

第四條 檢疫官ニシテ有給ノ官職ヲ帶ヒサル者ニハ一箇月百二十圓以内
ノ手當ヲ給スルコトヲ得

第五條 檢疫官ニハ内國旅費規則ニ依リ四等旅費ヲ給ス

附 則

本令ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

明治二十八年勅令第四十四號ハ本令施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル海港檢疫法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
法律第十九號 (明治卅二年二月十三日)

海港檢疫法

第一條 海外諸港及臺灣ヨリ來ル船舶ニ對シテハ傳染病豫防ノ爲檢疫ヲ
施行ス檢疫ヲ施行スヘキ海港及傳染病ノ種類ハ內務大臣之ヲ指定ス

第二條 海外諸港及臺灣ヨリ檢疫ヲ施行スル港ニ來ル船舶ハ其ノ入港
ニ於テ此ノ法律ニ依リ檢疫ヲ受ケ許可證ヲ得タル後ニ非レハ其ノ港ニ
入港シ陸地又ハ他船ト交通シ船客乗組員ノ上陸物件ノ陸揚ヲ爲スコト
ヲ得ス

前項ノ船舶ニシテ入港後傳染病患者ヲ發生シタルトキハ檢疫官吏ノ指
定ニ從ヒ更ニ檢疫ヲ受ケ許可證ヲ得ルニ非レハ他港ニ進航シ陸地又ハ
他船ト交通シ船客乗組員ノ上陸、物件ノ陸揚ヲ爲スコトヲ得ス

第三條 船長其ノ他ノ乗組員及船客ハ檢疫官吏ノ尋問ニ對シテ之ニ應答
シ又船長其ノ他ノ乗組員ハ檢疫官吏ノ請求アルトキハ所定ノ式紙ニ事
實ヲ記入シ其ノ氏名ヲ署シタル明告書ヲ差出スヘシ

船長ハ檢疫官吏ノ請求ニ應シテ航海日誌ヲ示シ且船内ノ各部ヲ開キ檢
査ヲ受クヘシ但シ艙ハ航海中船客又ハ乗組員ニテ占居シタルトキ又ハ
他ノ事故ニ依リテ傳染病毒ニ汚染シタル疑アルトキニ限り其ノ検査ヲ
受クヘシ

第四條 海外諸港及臺灣ヨリ檢疫ヲ施行スル港ニ來ル船舶ニシテ左ノ各
號ノ一ニ該當スルモノハ其ノ入港前ヨリ許可證ヲ得ルマテ檢疫信號ヲ
掲クヘシ

- 一 現ニ傳染病患者若ハ死者アルモノ
- 二 航海中傳染病患者若ハ死者アリタルモノ
- 三 傳染病流行地ヲ發シ又ハ其ノ地ヲ經テ來航シ若ハ傳染病毒ニ汚染
シタル船舶ト交通シタルモノ

第二條第二項ノ船舶ハ患者發見ノ時ヨリ許可證ヲ得ルマテ檢疫信號ヲ
掲ヘシ

檢疫信號ハ晝間ハ船舶ノ前檣頭ニ黃旗ヲ掲ケ夜間ハ同所ニ紅白二燈ヲ
連掲スルモノトス

第五條 海外諸港及臺灣ヨリ檢疫ヲ施行セサル港ニ來ル船舶ニシテ第四條第一項ノ各號ノ一ニ該當スルモノ又ハ其ノ港内ニ碇船中傳染病患者ヲ發生シタルモノハ前條ノ規定ニ從ヒ檢疫信號ヲ掲ケ其ノ地ノ警察官吏ニ届出テ指揮ヲ受クヘシ

前項ノ場合ニ於テ警察官吏ノ命アルトキハ直ニ檢疫ヲ施行スル港ニ回航シテ檢疫ヲ受クヘシ

第一項ノ場合ニ於テ警察官吏ノ指揮アルマテハ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ船客乗組員ノ上陸、物件ノ陸揚ヲ爲スコトヲ得ス

第六條 檢疫官吏ハ第一條ノ船舶ニ對シ左ノ處分ヲ爲スコトヲ得

- 一 現ニ傳染病患者若ハ死者アルモノハ命令ノ定ムル期間停船ヲ命シ患者死者ノ處分ヲ指示シ船舶其ノ他ノ物件ノ消毒法ヲ施行シ且必要アリト認ムルトキハ船客乗組員ヲ檢疫所ニ移轉セシムルコト
- 二 航海中傳染病患者若ハ死者アリタルモノハ第一號ノ規定ニ準シテ處分スルコト
- 三 傳染病流行地ヲ發シ又ハ其ノ地ヲ經テ來航シ若ハ其ノ船舶ニ傳染

病毒ノ汚染シタル疑アルモノハ必要アリト認ムルトキ第一號ノ規定ニ準シテ處分スルコト

四 停船中傳染病患者ヲ發生スルトキハ更ニ第一號ノ規定ニ依リ處分スルコト

五 傳染病ノ疑アル患者アルトキハ二日ヨリ多カラサル期間停船ヲ命スルコト

第七條 停船ヲ命セラレタル船舶ハ檢疫官吏ノ指示シタル場所ニ碇船シ其ノ許可ヲ得ルニ非レハ他ニ移轉スルコトヲ得ス

第八條 檢疫所ニ移轉セシメラレタル船客乗組員ハ檢疫官吏ノ許可ヲ得ルニ非レハ本船其ノ他ト交通シ若ハ物件ヲ搬出スルコトヲ得ス

第九條 船舶及物件ノ消毒ハ檢疫官吏之ヲ施行シ船長其ノ他ノ乗組員ハ其ノ施行上ニ關シ之ヲ補助スルノ義務アリ

前項ノ消毒費ハ船主船長若ハ其ノ代理人ヨリ徴収ス

第十條 檢疫所ニ移轉セシメラレタル者ノ食費及患者死者ニ關スル費用ハ其ノ乗組員ニ屬スルモノハ船長若ハ其ノ代理人ヨリ其ノ船客ニ屬ス

ルモノハ本人ヨリ之ヲ徴収ス
本條及第九條第二項ノ費額及其ノ徴収ニ關シ必要ノ規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十一條 第二條第五條第七條第八條ノ規定ニ違背シタルモノハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十二條 此ノ法律ノ執行ヲ拒ミ若ハ之ヲ妨害シ又ハ檢疫官吏ノ尋問ニ對シテ答辯ヲ爲サス若ハ僞虛ノ事實ヲ答辯シ又ハ其ノ命令ニ從ハサル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス
船長若ハ船長ノ職務ヲ行フ者前項ノ罪ヲ犯シ又ハ船客乗組員ノ之ヲ犯スヲ知テ制止セサルトキハ五十圓以上五百圓以下ノ罰金ニ處ス

附 則

第十三條 内外國ノ軍艦ニシテ檢疫ヲ施行セル港ニ來航スルニ當リ第四條第一項各號ニ該當スル事實ナキトキハ其ノ艦長及醫官ヨリ書面ヲ以テ檢疫官吏ニ其ノ旨ヲ明告スヘシ
内外國ノ軍艦ニシテ第二條第二項第四條第一項各號ノ一ニ該當スル事

實アルモノハ檢疫官吏ニ於テ其ノ艦ト陸地又ハ他船トノ交通乗組員ノ上陸、物件ノ陸揚ヲ制限スルコトヲ得又同上ノ軍艦ニシテ第五條ノ規定ニ該當スル場合ハ其ノ他ノ警察官吏ニ於テ同上ノ處分ヲ爲スヲ得
第二條第二項及第五條ニ該當スル事實アルトキハ艦長及醫官ヨリ其ノ旨ヲ檢疫官吏又ハ警察官吏ニ通知スヘシ
前三項ノ外軍艦ニ對スル檢疫ハ檢疫官吏ニ於テ艦長ト協議シ其ノ法律ノ規定ニ準シテ執行スルモノトス

第十四條 此ノ法律施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條 明治十二年第二十九號布告明治十五年第三十一號布告明治二十七年勅令第六十五號明治二十七年勅令第五十六號ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

法律第十九號參照

明治十二年(七月二十一日)第二十九號布告ハ檢疫停船規則、同十五年(六月二十三日)第三十一號布告ハ虎列刺流行地方ヨリ來ル船舶檢査規

則、同二十四年(六月二十二日)勅令第六十五號ハ海外諸港ヨリ來ル船舶ニ對シ檢疫ノ件、同二十七年(五月二十六日官報)勅令第五十六號ハ清國及香港ニ於テ流行スル傳染病ニ對シ船舶檢疫ノ件ナリ

海港檢疫法施行規則 (明治三十二年七月內務省令第三四號)

第一條 檢疫ヲ施行スル海港ハ橫濱港、神戸港、長崎港、門司港、下ノ關港及口ノ津港トス其ノ他ノ海港ニ於テ臨時ニ檢疫ヲ施行スルトキハ告示ヲ以テ之ヲ指定ス

下ノ關港ニ來ル船舶ハ門司海港檢疫所ノ檢疫ヲ受クヘシ

橫濱港ニ於テ檢疫ヲ受ケタル船舶ニシテ消毒ヲ要スルトキハ長濱ニ口ノ津港ニ於テ檢疫ヲ受ケタル船舶ニシテ消毒ヲ要スルトキハ女神ニ回航セシム

第二條 檢疫ヲ施行スル傳染病ハ虎列刺、痘瘡、猩紅熱、「ペスト」、黃熱トス其他ノ傳染病ニ對シ臨時檢疫ヲ施行スルキハ告示ヲ以テ之ヲ指定ス

第三條 海港檢疫法第六條第一項第一號ノ停船期間ハ消毒法ノ施行ヲ了

リタル時ヨリ起算シ「ペスト」ハ十日間、虎列刺、黃熱ハ五日間トス 但同第三號ノ場合ニ於テハ傳染病流行地ヲ發シ又ハ其地ヲ經過シ若ハ傳染病毒ニ汚染シタリト疑フヘキ事實アリタル時ヨリ起算ス

帝國ノ海港檢疫所ニ於テ消毒又ハ停船ノ處分ヲ受ケ其後異狀ナキモノハ再ヒ停船又ハ消毒セラレ、コトナシ

傳染病流行地ハ其都度告示ヲ以テ之ヲ指定ス

第四條 海港檢疫法ニ依リテ交付スル許可證ハ其處分ノ如何ニ依リ第一號乃至第三號様式ニ據ル明告書ハ第四號様式ニ據ル

第五條 傳染病及其疑アル患者ハ海港檢疫所ノ隔離室ニ入ラシムルコトヲ得

第六條 海港檢疫所ノ停留所ニ移轉セシメタル船客若ハ乗組員ハ第三條第一項ノ期間之ヲ停留ス若其船客若ハ乗組員ニ傳染病ヲ發シタルトキハ其全部若ハ一部ノ人員ニ對シ更ニ第三條第一項ノ期間停留ヲ繼續ス但其船舶ニ及ホスコトナシ

第七條 死體ハ所定ノ場所ニ於テ火葬シ其遺骨ハ其引受人又ハ船長若ハ

其代理人ニ引渡スヘシ若引受人ナク船長若ハ其代理人在ラサルカ又ハ引受ヲ拒ムトキハ行旅病人及死亡人取扱法ニ依リ處分スヘシ
親族又ハ縁故アル者ヨリ死體引渡ヲ願出タルトキハ病毒傳播ノ虞ナシト認ムル場合ニ限り之ヲ許可スルコトヲ得

第八條 海港檢疫法第五條ノ場合ニ於テハ警察官吏ハ最寄檢疫所ニ回航セシムヘシ

但船長若ハ其代理人ノ申出アルトキハ本條第二項第三項ニ依リ處分スルコトヲ得

警察官吏若ノ其船舶ノ檢疫ヲ施行スル海港ニ回航シ難シト認ムル場合又ハ相當ノ處置ヲ爲シ得ヘシト認ムル場合ニ於テハ最寄檢疫所ニ回航セシメス船長及其他ノ乗組員ヲシテ相當ノ消毒法ヲ施行セシムルコトヲ得此場合ニ於ケル費用ハ船主、船長若ハ其代理人ノ負擔トス
前項ノ場合ニ於テ患者ヲ隔離スルノ必要アリト認メタルトキハ本人又ハ船主、船長若ハ其代理人ヲシテ實費ヲ仕拂ハシメ所定ノ場所ニ收容スルコトヲ得

第九條 消毒費ハ左ノ區別ニ依リ徴収ス 但内外國軍艦及帝國陸軍部隊

ニ關スルモノハ此限ニアラズ

船舶消毒費

登簿噸數百噸未満 拾圓

同百噸以上千噸未満 貳拾圓

同千噸以上二千噸未満 參拾圓

二千噸以上一千噸未満ヲ増ス毎ニ拾圓ヲ加フ

積荷消毒費 一個ニ付 拾錢

船客乗組員ノ衣服、手荷物、所持品ノ消毒費

一二等船客及之ニ準スヘキ乗組員 一人分ニ付壹圓

三等船客及之ニ準スヘキ乗組員 一人分ニ付拾錢

第十條 海港檢疫所ニ移轉セシメタル者ノ食費及患者死者ニ關スル費用ノ徴収額ハ内務大臣ノ認可ヲ經テ海港檢疫所長之ヲ定ム

附 則

第十一條 大和船、漁船等ニ對シテハ此規則ヲ適用セス

第一號樣式

許可證 (第一號)

船種某號ハ明治三十二年法律第十九號海港檢疫法ノ規程ニ依リ之ヲ
検査シ異狀ナキヲ認ム依テ同法第二條ニ據リ此證ヲ交付シ某港ニ入
港シ陸地又ハ他船ト交通シ船客乗組員ノ上陸、物件ノ陸揚ヲ爲スコ
トヲ許可ス

年 月 日

某海港檢疫所

長 某 印

第二號樣式

許可證 (第二號)

船種某號ハ明治三十二年法律第十九號海港檢疫法ノ規程ニ依リ之ヲ
検査シタルニ何病患者、死者又ハ病毒汚染ノ疑ヒアリタルヲ以テ同
法第六條ニ基キ其ノ處置ヲ了ス依テ同法第二條ニ據リ此證ヲ交付シ
某港ニ入港シ陸地又ハ他船ト交通シ船客乗組員ノ上陸、物件ノ陸揚

ヲ爲スコトヲ許可ス

年 月 日

某海港檢疫所

長 某 印

第三號樣式

許可證 (第三號)

船種某號ハ某港ニ入港シタル後何病患者死者アリタルヲ以テ明治三
十二年法律第十九號海港檢疫法ノ規程ニ依リ同法第六條ニ基キ其處
置ヲ了ス依テ同法第二條第二項ニ據リ此證ヲ交付シ陸地又ハ他船ト
交通シ乗客乗組員ノ上陸、物件ノ陸揚ヲ爲スコトヲ許可ス

年 月 日

某海港檢疫所

所 某 印

第四號樣式

明 告 書

- 一、船籍 船種 船名
- 二、總噸數 登簿噸數

- 三、船主又ハ其代理人
- 四、發航地名 發航月日
- 五、寄航地名 發着月日
- 六、船客 一等船客 二等船客 三等船客 其他ノ船客

男	女	男	女	男	女	男	女	計
名	名	名	名	名	名	名	名	名
- 七、乘組員事務員以上ノ船員 名 名
- 八、飲料水ヲ汲入シ若ハ食料ヲ積入タル地名
- 九、積荷ノ種類及搭載セシ地名
- 十、積荷中檻樓、古綿等ノ有無若シアラハ其搭載地名

- 十一、出向地
 - 十二、航海中寄港中及現在船中ニ「ペスト」虎列刺、黃熱、痘瘡、猩紅熱、又ハ該病疑似症ノ有無
 - 十三、航海中寄港中及現在船中ニ「ペスト」虎列刺、黃熱、痘瘡、猩紅熱ノ外病者ノ有無若シアラハ其病名
 - 十四、航海中寄港中及現在船中ニ死者ノ有無若シアラハ其病名
 - 十五、航海中寄港中「バスト」虎列刺、黃熱、痘瘡、猩紅熱アリタル船及疑ハシキ船トノ交通ノ有無
 - 十六、他船ニ於テ検査消毒停船ノ有無
- 右之通相違無之候也

年 月 日

船 長 某 印

船 醫 某 印

某海港檢疫所

御 中

瀛車檢疫規則 (明治三十年七月內務省令第十九號)

第一條 府縣知事(東京府ハ警視總監)瀛車檢疫ヲ施行セントスルトキハ
 檢疫スヘキ傳染病及其ノ目的地方ヲ指定シ檢疫施行ノ停車場及開始ノ
 ノ期日ヲ定メテ內務大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ告示シ併テ關係府縣廳(東
 京府ハ警視廳)ニ通知スヘシ其廢止ノキ亦之レニ準ス但官設鐵道ノ停
 車場ニ於テ檢疫ヲ施行スルキハ遞信省ニモ申報スヘシ
 關係府縣廳(東京府ハ警視廳)ニ於テ本條ノ通知ヲ受ケタルトキハ其ノ
 旨告示スヘシ

第二條 瀛車中ニ傳染病患者又ハ死者アリタルトキハ患者ハ之ヲ市町村
 立ノ傳染病院又ハ隔離病舎其ノ他適當ノ場所ニ収容治療シ死者ハ引受
 人ニ引渡シ若シ引受人ナキトキハ明治十五年(九月)布告第四十九號行
 旅死亡人取扱規則ニ準シ市町村長、區長(沖繩縣ノ區長)又ハ戶長(戶長
 ニ準スヘキモノヲ含ム)ヲシテ其處置ヲ爲サシムヘシ但該規則第二條
 末段ノ場合ニ於テ發見地ノ府縣稅又ハ地方稅ヲ以テ其ノ費用ヲ支辨ス
 ヘシ

第三條 瀛車檢疫ノ際發見シタル傳染病患者ヲ市町村立ノ傳染病院又ハ
 隔離病舎ニ收容中特ニ要シタル費用ニシテ該患者ヨリ徵收スヘキモノ
 ハ前條末段ニ依リ取扱ヒ其ノ本籍詳カナラサル場合又ハ身元赤貧ニシ
 テ償却ノ途ナキ場合ニ限リ發見地府縣知事ニ請求スヘシ 但本條ノ費
 用ニシテ患者ヨリ徵收スヘカラサルモノハ直ニ發見地府縣知事ニ請求
 スルコトヲ得發見地府縣知事ハ前項ノ請求アリタルトキハ府縣稅又ハ
 地方稅ヨリ之ヲ支辨スヘシ

第四條 瀛車中ニ傳染病患者又ハ死者アリタルトキハ患者死者ト同車室
 ニアルカ否ラサルモ病毒汚染ノ虞アル乗客及手荷物ハ一時之ヲ留メテ
 消毒方法ヲ施行スヘシ

第五條 傳染病患者又ハ死者アリタル車室ハ之ヲ取離シテ消毒方法ヲ施
 行スヘシ此ノ場合ニ於テハ鐵道掛員ヲシテ補助ヲ爲サシメ及器具藥品
 等ヲ供給セシムルコトヲ得傳染病患者又ハ死者ナキ車室ト雖トモ檢疫
 掛員ニ於テ必要ト認ムルトキハ清潔方法消毒方法ヲ施行セシムルコト
 ヲ得

第六條 汽車中ニ傳染病患者又ハ死者アリタルトキハ其停車場ニ於ケル設備ノ都合等ニ依リ前數條ニ規定シタル事項ヲ施行スル能ハサルトキハ假リニ病毒ノ散逸ヲ防クヘキ相當ノ手當ヲ爲シ該車室ノ出入口ヲ閉鎖シテ乗客ノ出入ヲ止メ他ノ停車場ニ至リ其ノ處置ヲ爲スヘシ

第七條 檢疫掛員ニ於テ職務執行上必要アルトキハ無償ニテ其列車ニ乘込ミ又ハ必要ナル通信ヲ驛長若クハ掛員ニ求ムルコトヲ得無償乘車ノ場合ニ於テハ官職氏名ヲ記シタル証票ヲ驛長若クハ掛員ニ示スヘシ

附 則

第八條 汽車檢疫施行中府縣知事(東京府ハ警視總監)ノ指定シタル以外ノ地方ヨリ來リタル汽車ニ傳染病患者又ハ死者アリタルトキハ此ノ規則ヲ準用ス

第九條 明治廿三年内務省訓令第四五二號汽車檢疫心得ハ廢止ス

内務省令第二十號 (明治三十年七月十九日)
傳染病豫防法第十八條ニ依リ船舶檢疫規則左ノ通定ム

船舶檢疫規則

第一條 府縣知事(東京府ハ警視總監)船舶檢疫ヲ施行セントスルトキハ檢疫スヘキ傳染病及其ノ目的地方ヲ指定シ檢疫施行ノ場所及開始ノ期日ヲ定メテ内務大臣ノ認可ヲ受ケ之ヲ告示シ併セテ關係府縣廳(東京府ハ警視廳)ニ通知スヘシ其廢止ノトキ亦之ニ準ス

第二條 府縣知事(東京府ハ警視廳)ノ指定シタル地方ヲ發シ又ハ其地方ヲ經テ檢疫ヲ施行スル港ニ來ル船舶ハ檢疫掛員ノ尋問又ハ検査ヲ受ケ其ノ許可ヲ得タル後ニアラサレハ他港ニ進航シ陸地又ハ他船ト交通シ乗客乗組人ヲ上陸セシメ又ハ積荷手荷物ノ陸揚ヲ爲スヘカラス
航行中又ハ現ニ傳染病患者若クハ死者ナキ船舶ニハ直ニ前項ノ許可ヲ與フルコトヲ得

第三條 航行中又ハ現ニ傳染病患者又ハ死者アリタル船舶及停留中ノ船舶ハ黃旗ヲ並橋ニ掲揚スヘシ

但檢疫掛員ノ許可ヲ得ル迄ハ之ヲ下スヘカラス
第四條 航行中又ハ現ニ傳染病患者又ハ死者アリタル船舶ニハ消毒方法

ヲ施行シ港内適當ノ場所ニ停留セシメ其ノ船舶ノ乗客乗組人ニハ消毒方法ヲ施行シ停留所船中其ノ他適當ノ場所ニ停留セシムルコトヲ得前項停留ノ日時ハ傳染病豫防法施行規則第六條交通遮斷ノ日時ニ準ス停留中新タニ患者ヲ發シタルトキハ其ノ處置ヲ了シタルトキヨリ起算シ更ニ同期間停留ヲ繼續スルコトヲ得檢疫掛員ニ於テ消毒方法ヲ施行スルトキハ乗組人ヲシテ補助ヲナサシメ及器具藥品等ヲ供給セシムルコトヲ得

第五條 船舶中傳染病患者又ハ死者アリタル場合ト雖モ乗客乗組人中患者死者ト飲食起臥ヲ共ニシタル等ニ依リ檢疫掛員ニ於テ病毒感染ノ虞アリト認ムル者ノ外ハ消毒方法ヲ施行シタル後直ニ上陸ヲ許可スルコトヲ得

第六條 船舶中傳染病患者又ハ死者アリタル場合ト雖モ積荷手荷物ハ消毒方法ヲ施行シタル後直ニ陸揚ケヲ許可スルコトヲ得但檢疫掛員ニ於テ病毒汚染ノ虞ナシト認ムル積荷手荷物ニハ消毒セサルモ妨ケナシ

第七條 船舶檢疫ノ際發見シタル傳染病患者ハ市町村立ノ傳染病院又ハ

隔離病舎其ノ他適當ノ場所ニ収容治療シ死者ハ引受人ニ引渡シ若シ引受人ナキトキハ明治十五年九月布告第四十九號行旅死亡人取扱規則ニ準シ市町村長、區長(沖繩縣ノ區長)又ハ戶長(戶長ニ準スヘキ者ヲ含ム)ヲシテ其處置ヲ爲サシムヘシ但該規則第二條末段ノ場合ニ於テハ發見地ノ府縣稅又ハ地方稅ヲ以テ其ノ費用ヲ支辨スヘシ

第八條 船舶檢疫ノ際發見シタル傳染病患者ヲ市町村立ノ傳染病院又ハ隔離病舎ニ収容中特ニ要シタル費用ニシテ該患者ヨリ徵収スヘキモノハ前條末段ニ依リ取扱ヒ其ノ本籍詳カナラサル場合又ハ身元赤貧ニシテ償却ノ途ナキ場合ニ限り發見地府縣知事ニ請求スヘシ但本條ノ費用ニシテ患者ヨリ徵収スヘカラサルモノハ直ニ發見地府縣知事ニ請求スルコトヲ得

發見地府縣知事ハ前項ノ請求アリタルトキハ府縣稅又ハ地方稅ヨリ之ヲ支辨スヘシ

第九條 消毒方法ヲ施行スヘキ船舶ハ其ノ港ニ於ケル消毒設備ノ都合等ニ依リ他ノ港ニ回航セシムルコトヲ得

第十條 檢疫掛員ハ職務執行上必要アルトキハ無償ニテ其ノ船舶ニ乗込ムコトヲ得此ノ場合ニ於テハ船長若クハ事務員ニ其旨ヲ通告スヘシ

第十一條 傳染病患者又ハ死者ナキ船舶ト雖モ檢疫掛員ニ於テ必要ト認ムルキハ其ノ全部又ハ一部ニ清潔方法消毒方法ヲ施行セシムルコトヲ得

附 則

第十二條 船舶檢疫施行中府縣知事(東京府ハ警視總監)ノ指定シタル以外ノ地方ヨリ來ル船舶又ハ其ノ港ニ碇泊中ノ船舶ニ傳染病患者又ハ死者アリタルトキハ此ノ規則ヲ準用ス

第十三條 府縣知事(東京府ハ警視總監)ハ大和船漁船等ノ檢疫ニ關シ別段ノ規程ヲ設クルコトヲ得

第十四條 明治十四年内務省達乙第四十九號傳染病豫防規則第十三條船舶検査手續ハ廢止ス

内務省令第十三號 (明治卅年五月六日)

傳染病豫防法第六條ニ依リ清潔方法消毒方法左ノ通定ム

第一章 清潔方法

第一條 清潔方法ノ要項左ノ如シ

一 傳染病患者アリタル家ニ於テハ殊ニ患者ノ居室其ノ他病毒汚染ノ疑アル場所ニ注意シ消毒方法ノ施行ヲ了リタル後掃除ヲ行ヒ其ノ塵芥ハ之ヲ焼却スヘシ

二 家屋掃除ノ際床下ノ塵芥其ノ他ノ不潔物ハ之ヲ取除ケ焼却スヘシ

三 傳染病患者アリタル家ノ井戸流、臺所流、便所又ハ芥溜ノ掃除ヲ要スルトキハ消毒方法ノ施行ヲ了リタル後之ヲ行フヘシ但必要ノ場合ニハ修理改造及井戸浚ヲ爲スヘシ

四 傳染病豫防法第五條第二項ノ場合ニ於テハ前各號ヲ準用スヘシ

第二條 傳染病流行ニ際シ溝渠ヲ攪拌スルハ却テ病毒蔓延ノ媒介ヲ爲スノ虞ナシトセス必要ノ場合ニハ消毒藥(生石灰末若クハ石灰)ヲ投シタル後浚滌スヘシ

第三條 傳染病ノ流行前又ハ流行後ニ於テ清潔方法ヲ行ヒ家宅ノ掃除溝渠ノ浚滌ヲ爲ス場合ニ於テハ濫リニ消毒藥ヲ撒布スヘカラス

第四條 溝渠ヲ浚ヘタル汚泥塵芥ハ直ニ一定ノ運搬器ニ入レ健康上有害ナラサル様一定ノ場所ニ棄ツヘシ汚泥ヲ路傍ニ散逸セシメ又ハ之ヲ堆積スヘカラス

第二章 消毒方法

第五條 消毒方法ハ左ノ四種トス

一 焼却

二 蒸氣消毒

三 煮沸消毒

四 藥物消毒

第六條 焼却ニ適スルモノハ左ノ如シ

- 一 傳染病患者若クハ死體ニ用ヒタル被服、臥具、布片、便器其他ノ器具等ニシテ甚シク病毒ニ汚染シ消毒後再ヒ用ニ供スル目的ナキ者
- 二 傳染病患者ノ吐瀉物其ノ他ノ排泄物等

第七條 蒸氣消毒ニ適スルモノハ左ノ如シ

- 一 衣服、臥具、布片等總テ絹布、綿布、麻布、毛織物類

二 硝子器、陶器、磁器其他鑲製若ハ木製品類等ニシテ瀧熱ニ堪フル者

第八條 蒸氣消毒ヲ施行スルトキハ左ノ各項ニ注意スルヲ要ス

- 一 革類、革製品、漆器具ノ他ノ塗物類、護膜製品、護膜附品、糊附品、膠附品、毛皮、象牙、鼈甲、角ノ類ハ物品ヲ損スルヲ以テ蒸氣消毒ヲ避クヘシ
- 二 被服類ニ蒸氣消毒ヲ施スニハ豫メ袖中又ハ衣囊中ヲ檢索シ若シ彈丸火藥等爆發又ハ發火シ易キ物品アルトキハ之ヲ取出スヘシ又消毒中他物ニ染色ノ恐アルモノ等ハ蒸氣消毒ヲ避クヘシ
- 三 蒸氣消毒ハ流通蒸氣ヲ用ヒ成ルヘク消毒器中ノ空氣ヲ驅逐シ一時間以上攝氏百度以上ノ濕熱ニ觸レシムヘシ

第九條 煮沸消毒ニ適スルモノハ蒸氣消毒ニ適スルモノニ同シ

煮沸消毒ハ沸騰後一時間以上煮沸スヘシ

- 第十條 藥物消毒ニ供スル藥劑並其ノ用法ハ左ノ如シ
 - 一 石炭酸水(二十倍)(結晶石炭酸五分、鹽酸一分、水九十四分)
 - 石炭酸水ヲ製スルニハ石炭酸五分ニ凡水一分ヲ加ヘ攪拌又ハ振盪

- シツ、徐々ニ定量ノ水ヲ注キ後塩酸一分ヲ加フヘシ温湯ヲ用フレ
ハ其溶解殊ニ速カナリトス但使用ノ際ハ毎回振盪スルヲ要ス
- 石炭酸水ハ各種物件ノ消毒ニ適ス但使用ノ際ハ左ノ諸件ニ注意スヘシ
- 一 吐瀉物其ノ他排泄物ニハ同容量ヲ加ヘ能ク攪拌スヘシ
 - 二 器具室内等ヲ消毒スルニハ擦拭又ハ撒布スヘシ
 - 三 手足等ヲ消毒スルニハ洗滌シタル後更ニ淨水ヲ以テ洗淨スヘシ
 - 四 衣類等ヲ消毒スルニハ塩酸ヲ加ヘサルモノヲ用ヒ十二時間以上浸漬シ其ノ後淨水ヲ以テ更ニ洗濯スヘシ
- 二 昇汞水(千倍)(昇汞一分、塩酸十分、水九百八十九分)
- 昇汞水ヲ製スルニハ昇汞ヲ定量ノ水ニ溶解シ後塩酸ヲ加フヘシ
昇汞水ハ猛毒ニシテ無色無臭ナルカ爲メ危険ヲ速キ易キノ虞アリ
故ニ貯藏使用ノ際充分ニ注意ヲ加ヘ又其危険ヲ防カン爲メ十萬分
一ノ「フロキシ」ヲ加ヘテ著色シ一見識別シ易カラシムルヲ要ス
但金屬製ノ器ニ貯藏スヘカラス」昇汞水ハ陶器、硝子器又ハ木製
器具ノ消毒ニ用フヘシ飲食器、玩具、疊、敷物ノ消毒飲料水ニ滲透

スヘキ場所ノ消毒及金屬製品、糞便、吐瀉物ノ消毒ニ用フヘカラス

三 生石灰(少量ノ水ヲ灌ケハ熱ヲ發シテ崩壞スルモノ)

生石灰末(生石灰ニ少量ノ水ヲ加ヘ粉末ト爲シタルモノ)

生石灰末ハ用ニ臨ミテ之ヲ製シ吐瀉物其ノ他ノ排泄物、溝渠、芥溜床下等ノ消毒ニ用フヘシ吐瀉物其ノ他ノ排泄物ヲ消毒スルニハ少クモ其ノ容量五十分一ヲ投シ能ク攪拌スヘシ溝渠、芥溜ニ對スル量ハ之ニ準シ床下ニ在テハ其ノ全面ニ撒布スヘシ

石灰乳(十倍)(生石灰一分、水九分)

石灰乳ヲ製スルニハ一分ノ生石灰ニ九分ノ水ヲ徐々ニ加ヘ能ク攪拌スヘシ其ノ用量ハ生石灰末ノ五倍トス但石灰乳ハ用ニ臨ミテ之ヲ製シ使用ノ際ニハ毎回攪拌スルヲ要ス

普通石炭ヲ生石灰末石灰乳ニ代用スル場合ニハ倍量ヲ用フヘシ木灰ハ生石灰石灰等ヲ得ルコト能ハサル場合ニ於テ虎列刺病患者ノ吐瀉物赤痢病患者腸窒扶私病患者ノ排泄物ノ消毒ニ代用スルコトヲ得其ノ用量ハ吐瀉物排泄物ノ五分一トス灰汁トシテ使用スル

ニハ木灰一分ニ水四分ヲ加ヘ之ヲ煮沸シテ製スヘシ其ノ用量ハ吐瀉物排泄物ノ同容量トス但石炭灰藁灰ハ木灰ト同一ノ効ナシトス

四 格魯兒石灰水(二十倍)(格魯兒石灰五分水九十五分) 格魯兒石灰水ノ應用竝用量ハ石灰乳ニ同シ但用ニ臨ミテ製スヘシ

第十一條 消毒方法ノ應用ハ左ノ如シ

第一 患者

傳染病患者治癒シタルトキハ全身入浴ヲ行ヒ衣服ヲ更メシムヘシ
場台ニ依リテハ温濕布ヲ以テ拭淨シ入浴ニ代ユルモ妨ケナシ

第二 死體

傳染病ノ死體ヲ棺ニ斂ムルニハ其ノ被服ニ昇汞水若クハ石炭酸水ヲ充分ニ撒布シ又ハ昇汞水若クハ石炭酸水ニ浸漬シタル布ヲ以テ包ミ又ハ石灰若クハ木灰ヲ以テ填ツヘシ

第三 看病人、病家ノ家人其ノ他病者ニ觸接シタル者

三看病人、病家ノ家人其ノ他消毒方法ノ施行又ハ患者、死體、排泄物ノ運搬等ノ爲病者ニ觸接シタル者ハ時々若クハ其ノ都度手足及衣服ヲ

消毒シ入浴スヘシ

第四 患者、死體等ノ運搬器

傳染病ノ患者、死體等ヲ運搬シタル駕籠釣臺ノ類ハ使用後毎回昇汞水若クハ石灰酸水ヲ以テ擦拭スヘシ

第五 便所、芥溜、溝渠等

傳染病患者ノ吐瀉物其ノ他排泄物ノ入りタル便所ノ糞池、肥料溜等ニハ生石灰末石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ灌キ能ク攪拌スヘシ但便所ハ石炭酸水ヲ以テ消毒シタル後直ニ使用シ糞便ハ一週間ノ後肥料ニ供セシムルコトヲ得

病毒ニ汚染シタル土地ニハ石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ灌キ消毒スヘシ

病毒ノ混入シタル芥溜ニハ石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ灌キ其ノ塵芥ハ焼却スヘシ
病毒ノ混入シタル溝渠ニハ生石灰末、石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ灌クヘシ

第六 衣服器具敷物等

傳染病患者ノ著用セル衣類臥具竝其ノ病室ニ在ル諸器具又ハ看病人及患者ニ接シタル家人ノ衣類其ノ他病毒汚染ノ虞アルモノハ各物件ノ種類ニ從ヒ消毒方法ヲ施行スヘシ

第八條第一ニ掲ケタル物品ノ類ハ曹達石鹼(毛皮ニハ避クヘシ)ヲ以テ洗ヒ又ハ石炭酸水ヲ以テ拭淨シ若クハ之ヲ撒布スヘシ

第五條ニ掲クル各消毒方法ヲ施行スルコト能ハサルモノハ日光ニ曝シ若クハ大氣中ニテ乾燥セシムヘシ

第七 患者ノ居室

石炭酸水若クハ昇汞水ヲ以テ室内各部ヲ拭淨スヘシ消毒後ハ日光ノ射入空氣ノ流通ヲ良クシ乾燥セシムルヲ要ス

第八 瀛車

傳染病患者若クハ死體アリタル瀛車内ノ消毒ハ第七ニ準スヘシ傳染病患者ノ吐瀉物其他排泄物ニ對シテハ消毒藥ヲ混シ適宜處置スヘシ車室ニ附屬スル便所ハ石炭酸水ヲ以テ消毒スヘシ

第九 船舶

傳染病患者若クハ死體アリタル船室内ノ消毒ハ第七第八ニ準スヘシ
其ノ他ノ場所ニ對シテハ消毒藥ノ撒布擦拭等適宜處置スヘシ
船底水ニハ其ノ容量二百分一ノ生石灰末ヲ加ヘ二十四時間ヲ經タル
後汲出サシムヘシ

文部省訓令第一號 (明治卅年一月十一日)

北海道廳 府縣

學校ノ清潔ハ衛生上忽ニスヘカラサル所ナルヲ以テ學校衛生顧問ニ諮詢
シ左ノ通清潔方法ノ標準ヲ定ム依テ各學校ヲシテ之ニ準據シ其清潔ヲ保
タシムルコトヲ務ムヘシ

學校清潔方法

清潔方法ヲ分チテ日常清潔方法定期清潔方法及浸水後清潔方法トス

甲 日常清潔方法

- 一 教室及寄宿舎ハ毎日人ナキ時ニ於テ先ツ窓戸ヲ開キ如露ヲ以テ少

- シク牀板及階段ヲ潤ホシ掃出シタル後濕布ヲ以テ建具校具等ヲ拭フヘシ但掃除ノ爲ニ室内ヲ潤ホスハ生徒ノ再ヒ之ニ入ルマテニ充分乾燥シ了ルヲ度トスヘシ
- 二 教室及寄宿舎ニハ其人員ニ應シ紙屑籠ト少量ノ水ヲ盛レル唾壺トヲ備ヘ紙片其他棄却物ハ必ス紙屑籠ニ投入シ痰唾ハ必ス唾壺ニ於テシ決シテ室内廊下等ニ放下セシムヘカラス
- 紙屑籠及唾壺ハ毎日之ヲ掃除スヘシ
- 三 寄宿舎内ニ於テハ戶外ニ於テ用キル履物ヲ禁スヘシ但止ムヲ得サル事情アリテ特ニ之ヲ許ストキハ適宜ノ方法ヲ設ケテ室内ノ不潔ニ陥ラサルコトヲ務ムヘシ
- 四 靴ノ儘昇降スル校舎ノ出入口ニハ人員ニ應シ靴拭ヲ備フヘシ
- 五 寢具ハ毎月少クトモ一回之ヲ日光ニ曝シ被覆寢衣等ハ務メテ洗濯セシムヘシ
- 六 便所ノ尿溝及注壁等ハ毎日一回水ヲ以テ洗ヒ周房ハ濕布ヲ以テ拭フヘシ樋箱ニハ成ルヘク蓋ヲ設クヘシ

- 七 糞壺内ニハ防臭藥トシテ粗製過滿倫^{クワマンカンサンカリ}酸加里、粗製格魯兒^{コロルマンカン}滿倫(以上百倍乃至三百倍)硫酸鐵、泥炭末、木炭末、乾燥土粉、灰等ヲ撒布シ期ヲ衍ラス汲取ラシムヘシ
 - 八 食堂、炊事場、浴室、洗面所、洗濯所等ハ時々窓戸ヲ開キテ空氣ヲ通シ惡臭、煙氣又ハ湯氣ノ鬱滯ナキヲ務メ且掃除ヲ怠ルヘカラス殊ニ食堂ニ於テハ每食前如露ヲ以テ牀面ヲ潤ホシ食後ニハ濕布ヲ以テ其食卓等ヲ拭フシヘシ
 - 九 芥菜場ノ不潔物ハ期ヲ衍ラス搬送セシムヘシ
 - 十 下水ハ常ニ疏通セシメ炊事場、浴室、洗面所、洗濯所等ノ下水ハ毎月少クトモ一回大掃除ヲ行フヘシ
 - 十一 庭園、體操場、遊戲場、簷下、椽下等モ亦常ニ清潔ヲ保タシムヘシ
- 乙 定期清潔方法
- 定期清潔方法ハ每年少クモ一回夏休又ハ其他ノ長休ニ際シ之ヲ行フ者トス
- 十二 先ツ教室、寄宿舎内等ニ在ル机、腰掛、寢臺、戸棚等ヲ室外ニ出シ戸、障子、窓懸等ヲ外シ敷物ヲ剝キタル後如露ヲ以テ牀板及ヒ廊下

ヲ潤ホシ天井、四壁、牀板、廊下等盡ク之ヲ掃ヒ然ル後清水ヲ以テ洗拭スヘシ但シ汚染殊ニ甚シキ部分及ヒ器具等ハ熱湯汁若クハ石鹼水ヲ以テ洗拭スヘシ

十三 簷下、牀下等モ手ノ届ク限リ之ヲ掃ヒ外部ノ羽目及簷廻リハ龍吐水等ヲ以テ洗滌スヘシ

十四 寢具、窓懸、敷物等ニシテ洗濯シ得ヘキモノハ之ヲ洗濯シ其洗濯シ得ヘカラサルモノハ先ツ其塵ヲ掃ヒ書籍文具等ト共ニ數日之ヲ日光ニ曝シ刷掃ス

十五 器具、寐具等ハ總テ室ノ乾キタル後ニテサレハ室内ニ持込ム可ラス室ハ掃除後五日間以上窓戸ヲ開キテ空氣及日光ヲ通セシムヘシ

十六 牀板、壁面等ニ虧隙アルモノハ此際之ヲ填塞シ風抜穴、烟突等ノ塵煤ハ之ヲ除去スヘシ

十七 浴室、洗面所、食堂、炊事場、生徒控所、雨中體操場、便所、下水、芥棄場等ニ破損アル者ハ此際盡ク修理ヲ加ヘ且太掃除ヲ行フヘシ

丙 浸水後清潔方法

洪水ノタメ水害ヲ被リタル學校ハ開校前左ノ清潔方法ヲ施行スヘシ

十八 水ニ浸サレタル校舎殊ニ寄宿舎ノ建具牀板等ハ取外シテ空氣ヲ通シ且牀下ノ汚物泥土ヲ除去シ場合ニ依テハ焚火、火鉢等ヲ用キテ充分ニ乾燥セシムヘシ

十九 建具、牀板、校具、腰張等ノ浸水シタルモノハ清水又ハ熱湯ヲ以テ洗拭シタル後可成之ヲ日光ニ曝シ充分ニ乾燥セシムヘシ

二十 浸水ノ害ヲ被リタル井戸ハ必ス數回之ヲ浚渫シテ汚物ヲ除キ井戸側ハ清水ヲ以テ洗ヒ能ク水ノ澄ミタル後ニ之ヲ使用スヘシ但開校後一箇月間ハ必ス其水ヲ煮沸シテ飲用スヘシ

三十一 右ノ外定期清潔方法ニ掲ケタル各項ヲ適宜應用スヘシ

縣令第四十五號 (明治廿九年五月一日)

市町村清潔規則左ノ通相定ム

市町村清潔規則

第一條 市町村ハ常ニ清潔ヲ保持シ傳染病毒ノ發生ヲ豫防スヘシ

第二條 市街並ニ準市街地ニ於ケル下水溝及下水溜ノ構造ハ左ノ制限ニ從フヘシ

一 下水溝ハ可成汚水滲漏セサル様構造シ且ツ適當勾配ヲ付スヘシ
但大下水ハ汚水ノ滲漏セサル様構造スルニハ及ハスト雖トモ適當ノ勾配ヲ付シ汚水ノ流通ヲ良クスヘシ

二 下水溜ハ汚水ノ滲漏セサル様構造シ且ツ蓋ヲ備フヘシ

三 下水溝及下水溜ハ成ルヘク飲料水ト隔リタル場所ニ設クヘシ

四 埋込下水溝ニハ金網其他ノ材料ヲ以テ芥除ヲ付スヘシ

第三條 市町村ハ毎年二回(三月、十二月)以上下水溝及下水溜等ヲ浚渫シ市町村内一般ノ大掃除ヲ爲スヘシ

飲料水ニ供スル井戸、竈、水溜等ハ毎年一回以上浚渫又ハ掃除シ其近傍ハ常ニ清潔ニシ汚水滲透又ハ汚物混入等ノ虞ナカラシムヘシ

第四條 市街地ニ於テハ掃除人夫ヲ置クカ又ハ他ニ適當ノ方法ヲ設ケ毎週一回以上準市街地ハ毎月三回以上各戸及街路溝渠等ノ塵芥及汚物ヲ取集メ衛生上無害ノ地ニ棄却又ハ燒棄スヘシ

旅人宿、料理店、飲食店、寄席、劇場、貸座敷、工場等ニ在テハ適宜散亂又ハ漏泄ノ虞ナキ蓋付ノ容器ヲ設ケ該容器ニ塵芥汚物ヲ集メ置キ前項末文ノ通り棄却又ハ燒棄スヘシ

第五條 市街並ニ準市街地ニ於テ便所ノ構造ハ左ノ制限ニ從フヘシ
但路傍ノ肥溜ハ市街準市街地外ト雖トモ堅牢ノ蓋ヲ備フヘシ

一 糞尿所ハ成ルヘク飲料水ヲ隔タリタル場所ニ設クヘシ

二 大便所數個ヲ並設スルトキハ各其糞池ヲ異ニスヘシ

三 糞尿池ハ壘、叩キ若クハ一寸以上ノ厚板ヲ以テ汚液ノ滲漏セサル様構造スヘシ

四 糞尿池周圍ノ地盤ハ叩キセメント等ヲ以テ汚液ノ滲漏セサル様構造スヘシ

第六條 下水溝、下水溜、便所、芥溜ハ傳染病流行ノ際ニ於テハ勿論傳染病流行セサルモ雖トモ夏期ニ在テハ時々適當ノ清潔法又ハ消毒法ヲ行フヘシ其清潔法又ハ消毒法執行ノ度數及方法ハ其土地ノ狀況ニ依リ所轄警察署長又ハ分署長之ヲ指示スルモノトス

第七條 此ノ規則ニ對スル責任者ハ左ノ區別ニ依ル

一 一個人又ハ共有ニ屬スル井戸、窨、水溜、下水溝、芥溜、便所、肥溜等
ハ其所有者又ハ設置者

一 宅地内ノ清潔法ハ居住者、居住者ナキトキハ家作主、家作主ナキ
トキハ地主

一 右ニ列記スルモノ、外ハ總テ其市町村

第八條 本則第二條及第五條ニ依リ下水溝下水溜又ハ便所ヲ新設改造シ
タルトキハ所轄警察官署ニ届出ツヘシ

第九條 警察官吏ハ常ニ清潔法實施ノ情况ヲ視察シ井戸、窨、水溜、下水
溝、下水溜、便所、芥溜、肥溜等ノ浚濬修理改造ヲ命シ又ハ塵芥汚物ノ掃
除ヲ命スルコトアルヘシ

第十條 第二條第三條第二項第四條第二項第五條第六條第八條ヲ犯シ又
ハ第九條ノ命令ニ違ヒタル者ハ壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

附 則

第十一條 本則ニ市街並準市街ト稱スルハ明治廿七年(十一月)縣令第五
拾六號ノ定ムル所 依ル

第十二條 從前造設シタル便所下水溝下水溜等ニシテ本則ニ適合セサル
モノハ明治三十年三月限り改造スヘシ但本條期限迄ニ改造スル能ハサ
ル事情アルモノハ其事由ヲ具シ相當ノ期限ヲ定メ所轄警察官署ヲ經由
シ當廳ニ申出テ特ニ猶豫ヲ請フヘシ

種痘規則 (明治十八年十一月九日布告第三十四號)

第一條 種痘ハ小兒出生後滿一年以内ニ之ヲ行フヘシ若シ不善感ナルト
キハ更ニ一週年内ニ再三種ヲ行フヘシ

第二條 種痘ハ善感後ト雖モ五年乃至七年ニ再種ヲ行ヒ再種後五年乃至
七年ニ三種ヲ行フヘシ

第三條 天然痘流行ノ兆アルトキハ第一條第二條ノ期限ニ拘ハラヌ掛官
吏ノ指定シタル期限内ニ種痘ヲ行フヘシ

第四條 種痘ヲ受クヘキ者病氣或ハ事故アリテ第一條第二條第三條ノ時
期ニ種痘ヲ行フコト能ハサルトキ病氣ハ醫師ノ診斷書事故ハ親戚又ハ
隣保ノ證印ヲ爲シタル證書ヲ副ヘ戶長役場ニ届出ヘシ

第五條 種痘ヲ受ケシ者ハ醫師ノ指定シタル日ニ於テ檢診ヲ受ケ痘漿採取ヲ要スルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第六條 種痘濟ノ者ハ醫師ヨリ種痘證ヲ受領シ戸長役場ニ届出ヘシ但天然痘ニ罹リタル者ハ醫師ヨリ其證ヲ受領シ本條ニ準スヘシ

第七條 十六歳未滿ノ者ノ尊長後見人若ハ雇主等ニシテ現ニ其幼者ヲ監督スル者ハ前各條ノ責ニ任スヘシ

貧院育兒院等ハ入院ノ者ハ該主長ニ於テ前各條ノ責ニ任スヘシ第八條 醫師ハ種痘ノ善感不善感ヲ檢診シ種痘證ヲ付與スヘシ

但天然痘ニ罹リタル者ヲ治療シタルキハ本條ニ準シ其證ヲ付與スヘシ第九條 第一條、第二條、第三條、第四條、第五條、第六條、及第八條ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス

第十條 府縣知事縣令ハ種痘明細表ヲ製シ毎年一月七月ノ兩度内務卿ニ報告スヘシ

第十一條 此規則ヲ施行スル方法細則ハ府知事縣令ニ於テ便宜取設ケ内務卿ニ届出ヘシ

種痘施術心得書 (明治十八年三月二十四日内務省達甲第九號)

種痘術ヲ施ス者ハ種痘ノ適否接種ノ方法痘苗採取及貯蓄ノ法善感不善感ノ鑑別種痘ノ注意等ヲ詳知セサル可カラズ其要左ノ如シ

第一 種痘ノ適否

第一條 種痘ハ左ニ掲クル者ニハ施サ、ルヲ可トス

- 一 生後七十日ヲ經サル者
- 二 種痘ノ爲ニ一時増進スヘキ病患アル者
- 三 丹毒流行ノ土地ニ居住スル者
- 四 蔓延性ノ皮膚病アル者
- 五 熱性病ニ罹リ居ル者

第二條 種痘ニ適スル時期ハ春(三月、四月、五月)秋(九月、十月、十一月)二季ヲ以テ最良トス然レトモ四季共ニ之ヲ施シテ妨ナシ

第二 接種ノ方法

第三條 種痘ヲ施スハ上膊(三稜筋抵止ノ部位)ニ於テ各々三針乃至五針(受痘者ノ年齢體質等ニ隨フ)トテ各針ノ距離曲尺五分以上ニシテ痘瘡

ノ量輪互ニ密接セサル様注意スヘシ
第四條 施術ニ先チ針尖ヲ拭淨シ一時ニ數人ニ接種スルトキハ一人毎ニ之ヲ拭淨スヘシ

第五條 良性ナル痘漿ヲ採リテ移種スルヲ確實ノ良法トスレトモ此法ヲ行フコト能ハサルトキハ貯蓄ノ痘苗ニシテ成ルヘク新鮮ナル者ヲ撰ヒ用ユヘシ但痂皮ハ用ヒサルヲ可トス

第三 痘苗採取及貯蓄ノ法

第六條 痘苗ハ左ニ掲ク者ヨリ採取スヘカラス

一 痘泡ノ成形過度及過大ノ者 發量非常ニ大ナル者 泡縁又ハ量部

ニ水泡ヲ生スル者 痘泡非常ニ隆起シテ澄明ノ漿液ヲ漏出スル者 一種ノ疑フヘキ色例ヘハ紅藍色ヲ呈セルカ如キ者

但此等ノ異常痘泡ノ近傍ニ在ル正泡モ亦同シ

二 痘漿ノ血液ヲ混セル者 泡ノ中央ニ在ル痘漿ノ腐敗ニ向ントスル者 痘泡ノ己ニ化膿ニ傾キシ者 爬搔又ハ摩擦ノ爲ニ痘泡破潰セシ者

三 梅毒腺病及ヒ皮膚病ニ罹リ居ル者 營養不良ノ者

四 丹毒ヲ併發セル者 經過不整ニシテ不善感ノ疑アル者 (第十三條ヲ參觀スヘシ)

五 天然痘ヲ經タル者 再三種ノ者

第七條 痘漿ヲ採ルハ通常接種後第八日(二十四時間ヲ以テ一日ト算ス

下皆同シ)ヲ以テ佳トスト雖モ時候ノ寒暖及各人ノ性質ニ隨ヒ第七日

又ハ第九日ヲ以テ適度トスルコトアリ痘泡ハ善感良性ノ者ニシテ其含

包セル所ノ漿液ハ渾濁セヌ粘稠露滴ノ如クナルヘシ

第八條 痘漿ヲ採ルニハ痘泡ノ中心ヲ避テ庖面ヨリ斜ニ淺刺シ深ク刺シ

テ出血セシムヘカラス

第九條 發痘一顆ナル者ノ痘泡ハ其漿液ヲ採ルヘカラス又數顆アルモ其

一顆ハ傷タヘカラス

第十條 痘苗ヲ貯蓄シテ接種ノ用ニ供セントスルニハ硝子板間ニ貯ヘテ

密封シ又ハ硝子製毛細管ニ吸入セシメテ其兩端ヲ固封シ日光及寒熱ノ

劇度ヲ避ケ貯フヘシ (痘苗ノ貯法甚宜シキヲ得ルトキハ五個月間充分

ノ効力アリ)

第四 善感、不善感ノ鑑別

第十一條 種痘ノ善感、不善感ヲ鑑別スルニハ左ノ各項ヲ以テ要點ト爲ス

一 接種後第二日以内ニ成形ヲ始メシヤ否

二 痘疱常形ニシテ其大サ及硬サハ皮下皮上共ニ同一ナルヤ否

三 紅暈ハ常形ナルヤ否

四 經過整然トシテ其時期ヲ誤ラサルヤ否

五 第八日ニ至リテ微熱ヲ發スルヤ或ハ然ラサルモ其他ノ徵候ヲ呈スルヤ否

六 痂皮ハ黯褐色又ハ黑色ニシテ其厚サ及硬サハ常度ナルヤ否

第十二條 種痘善感ノ徵候ハ左ノ經過ニ就キテ知ルヘシ

接種後第一日第二日ノ間ハ他ノ刺傷ニ異ナルコトナシ施術後針痕ノ周

ニ淡紅色ノ小暈ヲ發スレトモ暫時ニシテ消失ス(或ハ此暈ヲ見サルコトアリ)

第三日ニハ針痕ノ部ニ小ナル紅點ヲ生シ試ニ指頭ヲ以テ之ニ觸ルレハ

稍々隆起セルヲ覺ユ(經過緩慢ナル者ハ第四日第五日ニ至リ始テ此紅

點ヲ生スルコト有リ)

第四日ニハ紅色ニシテ硬ク且ツ隆起セル圓形若ハ隋圓形ノ小結節ヲ生

ス

第五日ニハ結節細小ノ水泡ト爲リ其周圍ニ狭キ紅暈ヲ見ル

第六日ニハ水泡稍々増大シ其邊緣隆起シテ疱ノ中央ニハ陷凹ヲ呈シ疱

中ニハ稀薄透明ニシテ稍々帶藍色ナル液ヲ充實シ周圍ノ紅暈稍々増大ス

第七日ニハ諸症益々増進ス

第八日ニハ痘疱全ク成形ス其大サハ豆大ニシテ周圍ハ焮腫シ微シク疼

痛アリ疱中ノ液ハ倍々充實シ紅暈亦著シク増大ス此期ニ當リ(或ハ此

期以前)微熱ヲ發シ或ハ全ク熱候ナク顔面ハ蒼白色ヲ呈スルコトアリ

又腋下ニ疼痛ヲ覺エ水脈腺腫起スルコトアリ

第九日ニハ紅暈更ニ増大シ其色澤モ亦加ル

第十日ニハ疱液化膿シテ白濁或ハ黃色ノ濃稠液ト爲リ疱ノ中央稍々凸

隆ス然レモ其形必ス扁圓ナリ

種痘規則

一〇七

第十二日ニ至ルマテハ痘疱其形狀ヲ變スルコト無ク此ハヨリ収斂ヲ始メ疱ノ中央ヨリ邊緣ニ向ヒテ次第ニ乾固シ漸ク褐色ニ變シ周圍ノ紅暈モ亦漸ク消退ス

爾後黯褐色又ハ黑色ニシテ堅實ナル厚痂ヲ結ヒ初ハ皮膚ニ緊著シテ容易ニ剝離セス結痂後八日乃至十日ニ至リ始テ剝脫ス其剝脫ノ後ニ遺セル癍痕ハ圓形又ハ隋圓形ニシテ淺キ凹窩ヲ爲シ其窩内ニハ更ニ數多ノ小凹點ヲ呈ス

但一回種痘セシ者ニ再三種シテ感染スルコトアルモ其泡顆小ニシテ七八日間ニ全ク經過スルヲ常トス

第十三條 種痘不善感ノ諸徴ハ左ノ如シ

一 接種後第二日以内ニ成形ヲ始メ常形ニ達セスシテ直ニ廣ク蔓延セル炎症ヲ發シ皮下ニ硬ヲ覺ヘスシテ紅暈ハ不整形ナリ痘疱ハ速カニ化膿シ其ノ隆起ノ狀或ハ半球形或ハ圓錐形ト爲リ乾固スレハ黃色ニシテ鬆疎ナル疱皮ヲ結フ(時トシテ第二日後ニ成形ヲ始ムル者アレトモ其經過總テ不整ナルヲ以テ自ラ善感ノ者ト區別スルヲ

得ヘシ又不善感ノ者ト雖モ腋下ニ疼痛ヲ覺エ微熱ヲ發スルコト無キニ非ス)

二 接種後第一日ニ大ナル赤色ノ疱ヲ生シ速ニ漿液ヲ充實シ上皮破レテ膿面ヲ呈シ或ハ濕潤セル淡色ノ痂皮ト爲ルヲ見ル

三 紅暈速ニ増大シテ腫起シ或ハ遂ニ潰瘍ニ陥ル

四 第八日ニ至リ數泡相合シテ一大潰瘍ト爲リ或ハ一面ノ痂皮ヲ結ヒ其潰瘍又ハ痂皮ノ周圍ニハ廣ク赤色ヲ呈ス

五 痂皮剝脫ノ後ニ遺セル癍痕ハ深クシテ不整形ヲ呈シ其底面平滑ナリ

第五 種痘ノ注意

第十四條 初種ノ不善感ハ痘苗ノ不良ナルカ或ハ其人一時ノ不感性ヲ有セルニ因ル者ナルカ故更ニ三四週ノ後善良ナル痘苗ヲ選ヒテ再ヒ接種スヘシ

第十五條 種痘ヲ施スニ當リテハ併發症ヲ防キ殊ニ天然痘流行ノ際ニハ接種後第八日ニ至ルマテハ嚴ニ其感染ヲ防禦スヘシ然レトモ受痘者已

ニ暗ニ天然痘ニ感染シ其潜伏期ニ於テ接種スルコト間々之アリ
第十六條 天然痘流行シ種痘ヲ猶豫ス可カラサル際ニハ第一條各項ニ揭
タル者ト雖モ熱性病ヲ除クノ外ハ總テ接種スヘシ

第十七條 種痘中ハ寒冷ヲ避ケシメ成ルヘク清潔ノ空氣中ニ居ラシムヘ
テシ平常慣習セル食物等ハ總テ禁忌スルニ及ハス別ニ醫藥ヲ要セス

縣令第三十三號 (明治廿六年四月一日)

明治十八年(十二月)本縣甲第九號布達種痘細則左ノ通り改正ス

種痘細則

第一條 市町村ニ於テハ病院又ハ開業醫ノ私宅若クハ其他適宜ノ場所ヲ

選ヒ種痘所ヲ設置シ何市町村種痘所ト明記シタル標札ヲ掲ゲ置クヘシ

第二條 種痘所ニハ一ヶ所毎ニ其受持醫ヲ撰定シ之レカ種痘ヲ負擔セシ

五ヘシ

但一名ニシテ數箇所ノ種痘所ヲ受持ツモ妨ケナシ

第三條 種痘所ノ地名番地及受持醫ノ氏名ハ市長ハ直ニ町村長ハ郡役所

ヲ經由シ縣廳ヘ届出ツヘシ但變更アルトキモ本條ニ準ス

第四條 市町村長ハ第一號書式ニ依リ本籍寄留ヲ問ハス必ラズ種痘人名

簿ヲ製シ月々戸籍簿及寄留簿ニ照シ之レニ増減訂正ヲ加ヘ種痘ノ用ニ

供スヘシ

第五條 市町村長ハ毎年春(三月四月五月)秋(九月十月十一月)二季豫メ

種痘所受持醫ト協議ノ上種痘日及檢診日ヲ定メ第四條種痘人名簿ニ據

リ定日毎ニ接種スヘキ人員ヲ定メ其時日場所等ヲ種痘規則第七條ノ責

任者ニ通知シ遺漏ナク接種及檢診セシムヘシ

但種痘所入口又ハ其他適宜ノ場所ニ種痘日檢診日ヲ揭示スヘシ

第六條 種痘規則第一條第二條ニ該當スルモノハ市町村長ノ通知ニ從ヒ

其種痘所ニ就キ接種スヘシ

但其望ニ依リ他人種痘所又ハ病院若クハ開業醫ニ就キ接種スルモ妨

ケナシ

第七條 種痘規則第三條ノ場合ニ於テハ種痘人名簿ニ記載ノ外滞在者ト

雖モ普ク接種セシムヘシ

- 第八條 種痘規則第四條ニ依リ種痘延期シタル者病氣全快若クハ事故止ミタルトキハ速ニ其旨市町村長ニ届出接種ノ指揮ヲ受クヘシ
- 第九條 市町村長ハ種痘規則第六條ノ届出ニ依リ證書ヲ檢閲シ初種再三種善感不善感或ハ天然痘濟ノ別ヲ種痘人名簿ニ記入シ割印ノ上本人ニ返付スヘシ
- 第十條 種痘規則第八條ノ種痘證及ヒ天然痘濟ノ證ハ第二號書式ニ依リ記載スヘシ
- 第十一條 市町村へハ毎年春秋二季痘苗一具若クハ數具配付スヘキニ付市町村長ハ速ニ種痘所ニ送付シ第五條ノ手續ヲ爲スヘシ
- 第十二條 種痘所受持醫ハ種痘者ノ族籍氏名年齢及初種再三種善感不善感ノ別ヲ記載シ種痘所ニ備ヘ置キ掛官吏ノ點檢ニ供スヘシ
但病院並ニ開業醫ニ於テ接種シタルモノモ亦本條ニ準ス
- 第十三條 管内外送籍ノ節市町村長ハ種痘(初再三種善感不善感及年月日)或ハ天然痘濟ノ別ヲ取調ヘ入籍地市町村長へ通知スヘシ
但寄留ノ者ハ寄留ノ節特ニ之ヲ原籍市町村長ヨリ寄留地市町村長ニ

- ニ通報シ原籍へ復歸スルトキハ寄留地市町村長ヨリ原籍市町村長へ同様通報スヘシ
- 第十四條 市町村長ハ第三號書式ニ依リ種痘人員表ヲ製シ市長ハ毎年二月末日限リ縣廳へ町村長ハ全二月十日限リ郡役所へ差出シ郡役所ニ於テハ之ヲ取纏メ一表ヲ製シ二月末日迄ニ縣廳へ報告スヘシ
- 第十五條 種痘規則第一條第二條第三條ノ外ニ接種スルモノハ前各條ノ手續ヲ施行セス
- 第十六條 臨時掛官吏ヲ派出シ種痘ノ實況ヲ監視セシメ又ハ種痘人名簿等ヲ檢査セシムルコトアルヘシ
- 第十七條 種痘規則第一條ニ依リ種痘人名簿

種痘人名簿

出生年		再種年		天然痘		種痘兒氏名	
月	日	月	日	年	月	氏名	氏名
何年何善感	何年何善感	何年何善感	何年何善感	何年何善感	何年何善感	何某	何某長男
何年何善感	何年何善感	何年何善感	何年何善感	何年何善感	何年何善感	何某	何某

証

何國何郡市何町番地華族士族平民

何

年

某

齡

右天然痘濟

何國何郡市何町村番地

醫師

何

某

印

年月日

第三號書式

何市役場所所轄内種痘人員表

明治何年中

種 初	區 別		滿一年以內	滿一年以上二年以下	滿二年以上五年以下	滿五年以上十年以下	滿十年以上十五年以下	滿十五年以上	合 計
	善 感	不善 感							
疾病事故ニ種痘セサル者									
疾病事故ニ種痘セサル者									
善 感									
不善 感									

再 種	三 種	合 計	
		善 感	不善 感
疾病事故ニ種痘セサル者	疾病事故ニ種痘セサル者		
善 感	善 感		
不善 感	不善 感		

種痘規則第三條ニ據リ接種セシモノ

善感

何十人

不善感

何百何十人

右之通候也

何市長又ハ何郡何町村長

何

某

印

年月日

知事宛

解釋

一一年以上滿二年マテノ欄ニハ一年一月以上滿二年マテ二年以上滿五年マテノ欄ヘハ二年以上滿五年マテノ者ヲ記入ス可シ以下諸欄皆同シ
 一初種ノ欄内ヘハ小兒出生後滿一年以内ニ種痘セシモノ、善感若クハ疾病事故ニテ種痘セサルモノ、數ヲ記入ス可シ其不善感ナルモノハ種痘規則第一條後段ニ依リテ再二種ヲ行ヘル後善感ナレハ善感不善感ナレハ不善感トシテ本欄内ヘ記入スヘシ又疾病事故ノ止ミ種痘セシモノ、數ハ例ヘハ年齡六年ニ至リ疾病事故止ミタリトスルキハ年齡ノ滿一年以内ニアラサルモ種痘規則第一條ノ手續ヲ履ミ初種ノ五年以上滿十年マテノ欄内ヘ記入スヘシ再三種欄モ疾病事故ハ此例ニ同シ

內務省令第八號 (明治廿九年七月十一日)

痘苗賣下規則左之通之ヲ定ム

痘苗賣下規則

第一條 種痘用ノ痘苗ハ東京及大阪痘苗製造所ニ於テ之ヲ製造シ賣下ク

ルモノトス

第二條 各痘苗製造所痘苗賣下區域ハ左ノ如シ

東京府	神奈川縣	新瀉縣	埼玉縣
群馬縣	千葉縣	茨城縣	栃木縣
愛知縣	靜岡縣	山梨縣	岐阜縣
長野縣	宮城縣	福島縣	巖手縣
青森縣	山形縣	秋田縣	石川縣
富山縣	北海道廳		
右東京痘苗製造所			
京都府	大阪府	兵庫縣	長崎縣
奈良縣	三重縣	滋賀縣	福井縣
鳥取縣	島根縣	岡山縣	廣島縣
山口縣	和歌山縣	德島縣	香川縣
愛媛縣	高知縣	福岡縣	大分縣
佐賀縣	熊本縣	宮崎縣	鹿兒島縣

痘苗賣下規則

第三條 市町村又ハ醫師其他何人タリトモ痘苗ヲ要スルトキハ直チニ痘苗製造所ニ賣下ヲ請求スヘシ

若シ製造上ノ都合ニ依リ直チニ送付スルコト能ハサル場合ニ於テハ痘苗製造所ヨリ豫メ其送付期日ヲ請求者ニ通知スヘシ

第四條 各痘苗製造所ニ於テ外國ヨリ痘苗ノ請求ヲ受ケタルトキハ内地ノ供給ヲ妨ケサル限リ之ニ應スルコトヲ得

第五條 痘苗製造所ニ於テ賣下クル痘苗代價ハ一具(五人分)金五錢トシ運送費ヲ要ス 但外國ニ發送スル痘苗代價ハ一具金參拾錢トス

第六條 痘苗製造所ニ納付スル痘苗代價ハ總テ登記印紙ヲ以テ納ムヘシ

第七條 痘苗請求具數ニ對シ貼用ノ印紙ニ過不足アルトキハ印紙相當ノ具數ヲ送付スルモノトス但一具ノ代價ニ滿タサル分切捨トス

第八條 痘苗代價トシテ納付スヘキ登記印紙ハ痘苗賣下請求書ニ貼付シ請求人記名ノ下ニ押捺スル印ヲ以テ書面ト印紙ノ彩紋トニカケ消印ノ

上差出スヘシ

附 則

第八條 此規則ハ明治二十九年七月二十五日ヨリ施行ス

內務省令第九號 (明治廿九年七月十一日)

種痘用ノ痘苗ハ當分ノ內痘苗賣下規則第二條ノ區域ニ拘ハラズ總テ東京痘苗製造所ニ請求スヘシ

縣令第三十四號 (明治廿六年四月一日)

蠅類ノ飲食物ニ止集スルハ飲食物ヲ不潔ナラシムルノミナラス往々傳染病毒傳播ノ媒介ト爲ルノ虞アルニ付商店ニ露陳シ又ハ行商スル飲食物ニシテ其儘食用スヘキモノニハ適宜覆蓋ヲ設クヘシ

死體、汚物ノ處置家屋什器ノ消毒及清潔方法

一 死體及汚物ノ消毒 死體ハ總テ沐浴セシムヘカラス死體及其被服ニハ

死體汚物ノ處置家屋什器ノ消毒及清潔方法

石炭酸水又ハ昇汞水ヲ灌キ棺底ニ消毒藥ヲ注キタル衾褥ヲ敷キ死體ヲ其内ニ入レ其死體ノ肛門部ニ昇汞水ヲ浸シタル襪襪綿絮等ヲアテ棺蓋ハ固ク密封シ其外部ニ同消毒藥ヲ撒布シ棺廓ノ接際ニハ松脂若クハ鬚附油ノ類ヲ塗り液體ノ漏出ヲ防クヘシ尙火葬スヘキ場合ニ在リテハ病毒ニ汚染シタル物及其疑アル物其他焼却スヘキ物品ヲ其棺内ニ入レ死體ノ動搖ヲ防キ其十葬スヘキ場合ニ在テハ其焼却スヘキ物品ノ代リニ格魯兒石灰ヲ以テスヘシ但シ墓地ハ傳染病屍體埋葬地ニ限リ塋穴ハ深サ一丈以上トナシ格魯兒石灰ヲ埋メ棺ノ下部ノ厚サハ二尺以上周圍及上部ハ一尺以上トナスヘシ然レトモ死體ハ成ルヘク火葬セシムルヲ善トス

患者ニ用ヒタル衣服、臥具、敷物、飲食器其他看病人ノ衣服等總テ吐瀉物ニ汚染シ又ハ汚染シタル疑アルモノハ火力消毒法ニ依リ焼却スルハ豫防消毒ニ取リテ最モ効アリト雖トモ亦之レヲ消毒所ニ送り蒸氣消毒煮沸消毒ニ依ルモ妨ケナキモノナリ然シテ火葬場又ハ消毒所ニ送付スヘキ物品ハ相當ノ消毒ヲ爲シ堅固ニ之ヲ包ミ途上取締ニ注意スヘシ

患者ノ沐浴シタル湯水ハ其量五分ノ一以上ノ石炭酸水、昇汞水又ハ石灰乳ヲ灌キ攪拌シ六時間以上ヲ經テ之レヲ飲料水ヨリ隔リタル場所ニ投棄スルヲ要ス

患者發生セル家屋ノ便所ニシテ糞便糞池ニ溢レ生石灰石灰乳若クハ格魯兒石灰水等ヲ投入スルノ餘地ナキモノハ之レヲ他ノ糞池又ハ桶箱等ニ汲分ケ各別ニ消毒スヘシ若シ糞池ノ構造惡シク消毒ノ目的ヲ充分ニ達シ能ハサルノ見込アルトキハ多量ノ石灰乳ヲ灌キ糞池及周圍ノ板及セ汚サレタル土層ハ之ヲ掘取リ皆焼却スヘシ尙未タ消毒セサル患者ノ吐瀉物其他病毒ニ汚染シタルモノ等ヲ糞池ニ投入シタルトキハ總テ消毒セサルヘカラス

患者ノ吐瀉物ヲ投棄シ若クハ投棄シタル疑アル芥溜ハ昇汞水、石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ撒布シタル後塵芥ヲ取除ケ之ヲ焼却シ其跡ニハ同消毒藥ヲ撒布スヘシ

病毒ノ混入セル下水又ハ其疑アルモノニハ昇汞水、石灰乳、若クハ格魯兒石灰水ヲ灌キ攪拌シタル後多量ノ水ヲ灌キテ充分疏通セシムヘシ

其他消毒ヲ要スヘキ飲食器、玩具、金屬器、又ハ糞便吐瀉物若クハ飲料水ニ滲透スヘキ場所ニハ決シテ昇汞水ヲ使用ス可ラス然レトモ總テ燒却スヘキ物品或ハ手足ヲ消毒スルニハ用フヘシ吐瀉物、糞池、下水、芥溜等ノ消毒ニ使用スルニハ多ク生石灰、石灰乳ニシテ吐瀉物、糞池、下水等ニ在テハ其容量ノ十分ノ五以上ノ石灰乳若シ生石灰ナレハ三十分ノ一ヲ灌キテ攪拌スヘシ芥溜ニ在リテハ藥液ノ周ネク浸潤スルヲ度トス

格魯兒石灰水ハ床下及土間等ノ消毒ニ用フルモノニシテ石灰乳ト同シク糞池、下水及芥溜等ヲ消毒スヘシ

硫酸若クハ粗製硫酸ハ石炭酸水石炭乳等ナキトキニ代用品トシテ糞池下水等ノ消毒ニ用フルモ漆喰、敲、金屬品等ハ損傷サル、ノ虞アルヲ以テ此等ノモノニハ一切使用スヘカラス

乾布拭淨法ナルモノハ物品ヲ拭擦シテ消毒スルモノニシテ屢々乾布ヲ交換シ其使用シタル乾布ハ速ニ燒却スヘシ此法ハ漆器、陶器、金屬器又ハ藥品ヲ用ヒ難キ物品ニ施行スヘキモノナリ

一家屋ノ消毒 室内各部ヲ掃除シ床、縁側、板間、柱、敷居、壁、階梯建具其他室内什具等病毒附著ノ虞アルモノハ石炭酸水又ハ昇汞水ヲ以テ拭淨シ或ハ之ヲ撒布シ消毒後更ニ淨水ヲ以テ拭淨スヘシ疊、建具、壁、什具ニシテ藥品ヲ用ヒ難キモノハ乾布拭淨法ヲ施スヘシ尙疊、蓆、絨氈、綴通等ハ石炭酸水ヲ撒布シ然ル後日光空氣ニ晒シ之ヲ乾燥セシムヘシ此他床下等ヲ充分掃除シ濕地ハ生石灰乾燥地ハ石灰乳若ハ格魯兒石灰水ヲ充分ニ撒布シ塵芥ハ燒却スヘシ其撒布スヘキ量ハ床下ノ全部ヲ被覆スルヲ以テ度トナシ臺所、流シ等ハ掃除ノ後石炭酸水若クハ石灰乳ヲ撒布スヘシ

以上消毒施行ノ後ハ日光ノ射入空氣ノ流通ヲ良クシ室内全ク乾燥スル迄ハ家人ハ起臥スヘカラス但シ雨天ナル時ハ火氣ニテ乾燥スヘシ一船舶ノ消毒 ハ家屋消毒ノ規模稍大ナルモノト心得之カ消毒法ハ彼是取捨施行セハ大過ナルヘシト雖モ船舶ニハ特種ノ消毒法ヲ行ハザルベカラザル場合アリ其ハ他事ニアラズシテ人ノ知ル如ク船底ニハ常に澗水ノ存在ヲ免レサル是ナリ而シテ其水ハ汚穢ニシテ病毒發育ノ好適

地ナルガ故ニ之ガ消毒法ヲ嚴ニセルザベカラス今之ガ消毒ヲ施スニハ其船底ノ水ニ昇汞ヲ投入シ攪拌スルヲ良トス然レドモ船ハ鐵ヲ以テ關鍵セラル、カ或ハ裝飾セラル、者ニシテ鐵ハ昇汞ノ爲メニ腐蝕セラレ大ニ船體ヲ害スルノ恐アルガ故ニ先ヅ昇汞ヲ投入攪拌シテ既ニ微菌ノ殺滅シタルトキハ海水ヲ以テ洗滌スベシ(但シ海水中ニハ食鹽ヲ含ムガ故ニ善ク昇汞ヲ中和シ侵蝕ノ虞ナカラシムルモノナレバナリ)然レトモ船底水中ノ微菌が果シテ死滅セシヤ否ヤヲ知ラスンハ消毒法更ニ功ナキモノナリ今之ヲ檢スルニハ銅ハ昇汞ニ遭ヘバ之ヲ灰白青色ニ變スルモノナリトノ理ヲ應用シ豫メ金剛砂紙(磨紙)ヲ以テ研磨シタル銅片數箇ヲ諸所ニ投入シ三十分許リノ後之ヲ引キ上ケ檢スルニ其銅灰白青色ヲ呈スレハ船底水ハ少クモ十分ノ一ノ昇汞ヲ含有スルモノナルヲ知ルヘシ千倍ノ昇汞水ハ確カニ微菌ヲ死滅セシムルニ足ルモノナリ其他船舶ニ病毒附著ノ虞アルトキハ石炭酸水、昇汞水又ハ石灰乳ヲ灌キ消毒ヲナシ積載ノ貨物ハ適當ノ消毒法ヲ施コセシ後ニアラスンハ陸上ダセザルヲ可トス而シテ患者及乗込人ハ石炭酸ヲ以テ消毒シ病毒ノ他

ニ傳播セザルヲ主トス兎ニ角普通ノ消毒ヲ施コシタル上ハ船體殊ニ便所等ハ海水ヲ以テ充分ニ洗滌シ窓戶ヲ開放シ空氣ノ流通ヲ能クシ船室物品ノ乾燥ヲ旨トシ日光消毒ヲ行ナフベシ若シ河川ニ於テ患者投身スルカ又ハ吐瀉物其他病毒ニ汚染セル物品ヲ投棄若シクハ洗滌シタルトキハ下流ニ於テ(一)河水ノ汲取及ビ飲用(二)漁獵及ビ游泳(三)衣服及ビ物品ノ洗滌ヲ禁スルヲ良トス

一 瀛車、馬車、人力車ノ消毒 瀛車中ニ於テ患者發生シタルトキハ先ツ患者ヲ前項示ス方法ニ從カヒ適當ノ處置ヲナシ同車人ハ之ニ驚キ叨リニ他室ナトヘ乗替エヘカラス但シ充分ノ消毒ヲナシタル後ニ於テハ妨ケナシト雖モ下車ノ後ハ暫ク社會公衆ノ爲メニ人ニ接近セサルヲ良トス又患者發生ノ車室ニ積載シタル物品ハ適當ノ消毒ヲ施シタル後ニアラスンハ下車スヘカラス車體ハ(若クハ車室)昇汞水又ハ強石炭酸水ヲ以テ消毒シ其病毒ニ汚染シタル敷物及附屬品等ハ之ヲ燒却スルニ客ナル勿レ其他傳染病患者ノ屍體ヲ載セタルトキモ以上ノ法ニ準ヒ消毒ヲ施コスヘシ是レ單ニ瀛車ノ消毒ニノミ限ラスシテ馬車、人力車ノ方ニモ

應用スヘキモノナレハ其意シテ見ルヘシ
 家屋ハ什具ヲ出シ疊ヲ揚ケ建具ヲ外シテ室内ヲ掃除シ床下ノ汚濕シタル土ト乾燥シタル土砂ト交換シ（或ハ單ニ乾燥シタル土砂ヲ撒布スルノミニ止ムルコトアリ）又ハ焚灰若クハ石灰ヲ撒布スヘシ但シ下タ流シ等卑濕ニシテ不潔ニ傾キ易キ場所ハ殊ニ注意シテ清潔ナラシムヘシ室内ニハ日光ヲ射人シ空氣ヲ流通セシムルハ勿論什器疊建具等ヲモ日光ニ曝露セシムヘシ（日光消毒法）

便所ハ生石灰、石灰乳若クハ「コロールカルキ」水ヲ投入攪拌スヘシ其共用ニ係ル便所ハ前記ノ消毒藥ヲ毎日投入攪拌ヲ怠ルヘカラス下水ハ始メ生石灰又ハ石灰乳ヲ投入シ次テ淤泥ヲ浚深シタル後ニ再ヒ生石灰、石灰乳若クハ「コロールカルキ」水ヲ投入シ消毒スルヲ可トス芥溜ハ石灰乳若クハ格魯兒石灰水ヲ撒布シ其塵芥ハ取除クヘシ取除キタル塵芥ハ猥リニ棄却スヘカラス燒却スルヲ確實トス井戸ハ浚深シテ損所ヲ修繕シ汚穢水ノ滲透ナカラシムル様注意スル事

朕帝國議會ノ協賛ヲ經タル獸疫豫防法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名

御璽

明治二十九年三月二十九日

内閣總理大臣臨時代理

樞密院議長 伯爵黑田清隆

農商務大臣 子爵榎本武揚

法律第六十號

獸疫豫防法

第一條 此ノ法律ニ獸類ト稱スルハ牛、馬、羊、豕、犬ヲ謂ヒ獸疫ト稱スルハ左ノ十病ヲ謂フ

- 一 牛疫
- 二 炭疽
- 三 氣腫疽
- 四 鼻疽及皮疽
- 五 傳染性胸膜肺炎
- 六 流行性鷺口瘡

- 七 羊痘
- 八 豕虎列刺
- 九 豕羅斯疫
- 十 狂犬病

第二條 獸類獸疫ニ罹リタルコト若ハ其ノ疑アルコトヲ發見シタル所有者、管理人又ハ獸醫ハ直ニ其ノ旨ヲ所轄警察署又ハ市町村長（特別市制ヲ施行スル市ニ於テハ區長、市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ區戸長又ハ之ニ準スヘキ者）ニ届出ヘシ

第三條 獸類獸疫ニ罹リタルトキ若ハ其疑アルトキハ所有者又ハ管理人ニ於テ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ直ニ之ヲ鎖鋼シ若ハ健獸ト隔離シ其ノ監督ヲ承クヘシ

第四條 牛疫感染ノ疑アリ又ハ之ニ罹リタル牛、羊及狂犬病ニ罹リタル犬ハ所有者又ハ管理人ニ於テ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ直ニ之ヲ撲殺スヘシ

前項ノ所有者又ハ管理人現場ニ在ラサルトキハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ニ於テ直ニ撲殺シ及病毒ニ汚染シ又ハ其ノ疑アル物品ヲ燒棄、埋却シ若ハ之ニ消毒ヲ行フコトヲ得

第五條 地方長官（東京府ハ警視總監以下之ニ做フ）ハ獸疫豫防上必要ト認ムル片ハ病性鑑定ノ爲割檢ヲ要スル獸類ヲ撲殺シ又ハ鼻疽及皮疽傳染性胸膜肺炎、豕虎列刺、豕羅斯疫ニ罹リタル獸類ノ撲殺ヲ命スルヲ得

第六條 所有者又ハ管理人第四條ノ指揮ニ從ハス及前條ノ命令ニ從ハサルトキハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ニ於テ直ニ撲殺スルコトヲ得

第七條 病性鑑定ノ爲撲殺シタル獸類ヲ除クノ外此ノ法律ニ依リ撲殺シ又ハ獸疫ニ罹リ斃死シタル獸類ノ屍體ハ所有者又ハ管理人ニ於テ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ直ニ之ヲ燒棄又ハ埋却スヘシ

前項ノ屍體ハ各部ヲ截取シ又ハ割檢ヲ爲スコトヲ得ス但シ病性鑑定又ハ學術研究ノ爲特ニ地方長官ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第八條 所有者又ハ管理人ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ病毒ニ汚染シ又ハ其疑アル物品ヲ燒棄、埋却シ若ハ之ニ消毒ヲ行フヘシ

所有者、管理人、車長又ハ船長ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ獸疫ニ罹リ若ハ其ノ疑アル獸類ヲ繫留シタル場所、汽車、船舶等ニ消毒ヲ行フヘシ

所有者又ハ管理人前二項ノ指揮ニ從ハサルトキ及車長、船長前項ノ指揮ニ從ハサルトキハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ハ直ニ燒棄、埋却シ若ハ消毒ヲ行フコトヲ得

第九條 此ノ法律ニ依リ撲殺シ又ハ獸疫ニ罹リ斃死シタル獸類ノ屍體及病毒ニ汚染シタル物品ノ埋却地ハ發掘若ハ使用スルコトヲ得ス但シ地方長官ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十條 第四條、第五條及ヒ第八條第一項ノ場合ニ於テ地方長官ハ三人以上ノ評價人ヲシテ物品及發病前ノ獸類ノ價格ヲ評價セシメ左ノ標準ニ依リ所有者ニ手當金ヲ下付ス其ノ評價額ヲ不當ト認ムルトキハ更ニ他ノ三人以上ノ評價人ヲシテ評價セシムルコトヲ得

一 牛疫、鼻疽及皮疽、傳染性胸膜肺炎、豕虎列刺、豕羅斯疫ニ罹リ撲殺シタル獸類、評價額三分ノ一

二 病性鑑定ノ爲撲殺シタル獸類、評價額五分ノ三

三 牛疫ニ感染ノ疑アル爲撲殺シタル牛羊、評價額五分ノ四

四 燒棄又ハ埋却シタル物品、評價額二分ノ一

手當金額ハ第一ノ場合ニ於テハ一頭六十圓、第二ノ場合ニ於テハ一頭百五十圓、第三ノ場合ニ於テハ一頭二百圓、第四ノ場合ニ於テハ總計十圓ヲ超過スルコトヲ得ス

第十一條 此ノ法律ニ依リ左ニ掲タル獸類ハ撲殺シ又ハ物品ヲ燒棄若ハ埋却シタルトキハ手當金ヲ下付セス

一 第二條ニ違背シ届出ナキ獸類及之ニ觸接シタル物品

二 第六條ノ場合ニ於ル獸類及第八條第一項ニ違背シタル場合ニ於ケル物品

三 狂犬病ニ罹リタル犬及其ノ病毒汚染ノ疑アル物品

四 第十二條ノ命令ニ違背シ移動シタル獸類及物品

五 第十五條ノ命令ニ違背シ檢疫ヲ受ケス又ハ輸入シタル獸類及物品

第十二條 地方長官ハ獸疫豫防上必要ト認ムルハ區域ヲ定メ獸類ノ種類ヲ限リ其出入、往來並病毒傳播ノ疑アル物品ノ運搬ヲ停止スルコトヲ得

第十三條 地方長官ハ獸疫流行中必要ト認ムルトキハ屠獸場及獸類化製場ノ營業ヲ停止シ又ハ獸類ノ種類ヲ限リ其ノ市場共進會等ノ開設ヲ停止スルコトヲ得但シ此ノ場合ニ於テハ直ニ其ノ旨ヲ農商務大臣ニ届出ヘシ

第十四條 地方長官ハ獸疫豫防上必要ト認ムルトキハ區域ヲ限リ健獸ノ檢査ヲ行フコトヲ得

第十五條 外國ヨリ獸疫侵入ノ危險アリト認ムルトキハ有病地ヨリ又ハ有病地ヲ經テ輸入スル獸類及物品ノ檢査ヲ行ヒ若ハ其ノ輸入ヲ停止スルコトヲ得

第十六條 獸疫豫防ニ關スル費用ハ國庫府縣市町村及一個人ノ負擔トス其ノ負擔ノ區分ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十七條 第四條第一項ニ違背シタル者第五條ノ命令ニ違背シタル者及第十五條ノ檢査ヲ受テ輸入停止ニ違背シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

獸醫第二條ニ違背シタルトキハ罰前項ニ同シ

第十八條 第七條、第八條第二項第一項、第九條ニ違背シタル者及第十三條ノ命令ニ違背シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

所有者又ハ管理人第二條ニ違背シタルトキハ罰前項ニ同シ

第十九條 第三條ニ違背シタル者及第十二條ノ命令ニ違背シタル者ハ刑法第二百四十九條ノ例ニ依リ處罰ス

第二十條 第一條ニ掲ケタル獸類獸疫ノ外獸畜傳染病豫防上必要ト認ムルトキハ勅令ヲ以テ此ノ法律ノ全部又ハ一部ヲ他ノ獸畜又ハ他ノ獸畜傳染病ニ適用スルコトヲ得

第二十一條 此ノ法律施行ニ關スル規則ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

附 則

第二十二條 此ノ法律ハ明治三十年四月一日ヨリ施行ス

獸畜傳染病豫防ニ關スル從前ノ規則ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

農商務省令第一號 (明治三十年一月七日)

明治二十九年(三月)法律第六十號獸疫豫防法施行細則左之通相定ム

獸疫豫防法施行細則

- 第一條 警察官又ハ市町村長（特別市制ヲ施行スル市ニ於テハ區長市町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ區戸長又ハ之ニ準スヘキ者）獸疫發生ノ届出ヲ受ケタルトキハ地方長官ニ其旨ヲ報告シ同時ニ其部内ニ榜示スヘシ
- 第二條 獸疫ニ罹リタル獸類ノ全癒、斃死若クハ撲殺ハ所有者又ハ管理者ニ於テ獸醫ト連署シ直ニ所轄警察官署又ハ市町村役場ニ届出ヘシ
- 前項ノ届出ヲ受ケタル警察官又ハ市町村長ハ地方長官ニ報告スヘシ
- 第三條 第一條及第二條第一項ノ届出ヲ受ケタル警察官及市町村長ハ相互速ニ通報スヘシ
- 第四條 獸疫發生ノ届出又ハ通知ヲ受ケ若クハ其發生ヲ探知シタル警察官ハ直ニ現場ニ出張シ必要アルトキハ獸醫ヲシテ診斷セシムヘシ
- 第五條 第一條及第二條第二項ノ報告ヲ受ケタル地方長官ハ直ニ其旨管内ニ告示シ農商務大臣及鄰接府縣ノ地方長官ニ報告スヘシ
- 外國ノ獸疫侵入スルカ又ハ一地方ニ於テ獸疫蔓延ノ兆アルトキハ地方

長官ハ農商務大臣及鄰接地並ニ航路ノ關係アル道廳府縣ノ地方長官ニ

急報スヘシ

第六條 地方長官ハ獸疫流行中其狀況ヲ調査シ每週別記様式ニ依リ農商務大臣ニ報告スヘシ但シ鼻疽及皮疽ハ每月末ニ報告スルモ妨ケナシ

第七條 地方長官ハ獸疫豫防法第十二條及第十三條ニ依リ停止ヲ命シタルトキハ其旨農商務大臣及鄰接地並ニ航路ノ關係アル道廳府縣ノ地方長官ニ報告スヘシ

第八條 獸疫豫防法第三條ニ依リ獸類鎖飼ヲ要スルトキハ之ヲ一定ノ場所ニ繫キ其逸出ヲ防キ其隔離ヲ要スルトキハ病獸ヲ在來ノ場所ニ留置シ健獸ヲ安全ノ場所ニ移シ相互ノ交連ヲ絶テ病毒傳播ノ媒介ヲ防クヘシ

前項ノ隔離ヲ實行シ難キ場合ニハ特ニ警察官ノ許可ヲ得健獸ヲ留置シ病獸ヲ他ニ移スコトヲ得

第九條 獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ヲ鎖飼シ又ハ隔離シタル場所ニハ警察官ノ許可ヲ得タル者ノ外出入スルヲ許サス

第十條 地方長官ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ヲシテ獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ノ鎖鋼若クハ隔離ヲ嚴重ニ監督セシムヘシ但シ必要アルトキハ警察官ヲシテ病獸ヲ看守セシムルコトヲ得

第十一條 地方長官ハ所屬官吏、市町村吏及獸醫ニ檢疫委員ヲ命スルコトヲ得

第十二條 地方長官ハ獸疫豫防法第十四條ニ依リ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ヲシテ健獸ノ検査ヲ行ハシムルコトヲ得

第十三條 地方長官ハ獸疫流行中屠獸場又ハ獸類化製場ノ監督ヲ嚴重ニスヘシ

第十四條 地方長官ハ必要ト認ムルトキハ豫防區域ノ各要所ニ警察官又ハ相當ノ看守人ヲ配置スヘシ

第十五條 獸類ノ撲殺ハ其所在地ニ於テ行フヘシ但シ特別ノ事由アルトキハ燒棄又ハ埋却スヘキ場所ニ於テスルコトヲ得

第十六條 獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ノ屍體ヲ運搬セントスルトキハ天然孔ヲ塞キ全體ヲ消毒包裹シテ汚物ノ脱漏ヲ防クヘシ其脱漏シタ

ル場合ニハ直ニ之ヲ除去シ其場所ヲ消毒スヘシ

第十七條 獸疫ニ罹リ若クハ其疑アル獸類ノ屍體ヲ埋却セントスルトキハ皮膚ヲ亂截シ消毒藥ヲ散布スヘシ

屍體及病毒汚染ノ物品ヲ埋却スル土坑ハ深サ八尺以上トシ屍體及物品ヲ投入シタル後厚ク石灰ヲ散布シ土ヲ以テ土坑ヲ填塞スヘシ但シ羊痘

豕虎列刺、豕羅斯疫、狂犬病ノ場合ニ於テハ土坑ノ深サ四尺以上トス

第十八條 獸疫豫防法第九條ノ埋却地ハ人家、飲料水、河流及道路ニ接近セサル適當ノ位置ヲ區畫シ木標ヲ建テ人及獸類ノ往來ヲ禁スヘシ

第十九條 獸疫ノ病毒ニ觸接シタル者又ハ其疑アル者ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ消毒シタル後ニアラサレハ他ノ獸類ニ接近スルコトヲ得ス

第二十條 地方長官ハ獸疫豫防法第十二條及第十三條ノ停止ヲ解キタルトキハ其旨管内ニ告示シ農商務大臣及鄰接地並ニ航路ノ關係アル道廳府縣ノ地方長官ニ報告スヘシ

第二十一條 第五條第七條及第二十條ノ報告ヲ受ケタル地方長官ハ其旨

管内ニ告示スヘシ

第二十二條 獸類ノ屍體及其病毒汚染ノ物品ヲ運搬スルニハ牛疫、傳染性胸膜肺炎及氣腫疽ノ場合ニ於テハ牛、鼻疽及皮疽ノ場合ニ於テハ馬又炭疽ノ場合ニ於テハ牛馬ヲ用フヘカラス

第二十三條 地方長官ハ狂犬病流行ノ際危險アリト認ムル區域ニ於テハ所有者ナキ犬ヲ撲殺セシメ所有者ノ記名アル犬ハ嚴重ニ繫留セシムヘシ但シ使用上必要ナル飼犬ハ口網ヲ施シ綱ヲ附シテ牽キ行カシムルコトヲ得

第二十四條 消毒ヲ行ハントスル者ハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ獸疫豫防心得ニ掲ケタル消毒法ニ依ルヘシ

別記様式

獸疫毎週調査表 自何年何月何日 至何月何日

應府縣名

獸類種類	牝牡	年	齡	發病	病名	斃死	撲殺	快復	評價	手當	郡村	所有主氏名
				月日	月日	月日	月日	月日				

備考	發病地、病原、病勢其他云々

(備考)

表中斃死、撲殺及快復ヲ報告スル場合ニ於テ既ニ其獸類ノ發病報告ヲ爲シタルモノハ朱書スヘシ

農商務省告示第四號 (明治三十年二月二十四日)

獸疫豫防ニ關スル心得事項左ノ如シ

獸疫豫防心得

第一項 獸疫流行地ニ於テハ獸類ニ減食、發熱其他疑ハシキ徵候ヲ認メタルトキハ速ニ書面若クハ口頭ヲ以テ最寄警察官署、巡查駐在所又ハ市町村役場ニ届出ツルコト

第二項 前項ノ場合ニ於テハ直ニ獸醫ヲシテ診察セシムルコト

獸疫豫防心得

第三項 病獸ハ其廐舎ニ繫留シ健獸ハ成ルヘク別舎ニ隔離シ相互ノ交通ヲ絶チ決シテ觸接セシムヘカラス又取扱人、飼槽、水槽、毛布、梳拭具其他一切ノ器具ヲ別ニシ病毒傳播ノ媒介ヲ防クコト

第四項 病獸所在ノ入口ニハ病名ヲ標示シ人及傳染ノ虞アル獸類（炭疽ニ在テハ牛、馬、羊、豕、氣腫疫及傳染性胸膜肺炎ニ在テハ牛、鼻疽及皮疽ニ在テハ馬屬、流蚕性鷓口瘡ニ在テハ牛、羊、豕、豕疫ニ在テハ豕）ノ出入ヲ禁シ家禽類ノ接近ヲ防クコト

第五項 獸疫流行ノ地方ニ於テハ豫防上必要ナル者ノ外ハ猥リニ病獸アル家ニ群集スヘカラサルコト

第六項 獸疫流行ノ地方ニ於テハ傳染ノ虞アル獸類ヲ區別シ出入、往來、賣買、讓與ヲナサシメサルコト牛疫ノ場合ニ於テハ特ニ其取締ヲ嚴ニスルコト

第七項 獸疫流行地近傍ノ牧場ニハ傳染ノ虞アル獸類ヲ放牧スヘカラサルコト

第八項 水源ニ於テ獸疫流行スルトキ其下流沿岸ノ地方ニ於テハ傳染ノ

虞アル獸類ヲシテ其河水ヲ飲用セシメサルコト又獸體、飼養器具等ヲ洗滌スヘカラサルコト

第九項 牧場、屠獸場、家畜市場等ニ於テ獸疫發生シタルトキハ其病獸ヲ適宜ノ場所ニ圍ヒ置キ健獸ノ接近ヲ防キ速ニ警察官及獸醫又ハ検査委員ノ指揮ヲ受クルコト

第十項 炭疽、鼻疽及皮疽ハ人ニ傳染スルノ虞アルヲ以テ病獸ヲ取扱フ者ハ最モ注意ヲ加ヘ手足、顔面等ニ創傷、潰瘍アルトキハ病獸ニ觸接スヘカラサルコト

第十一項 狂犬病ニ罹リタル獸類ニ咬傷セララル、トキハ人、獸類共ニ危険ノ症ニ陷ルヲ以テ狂獸アルノ場合ニハ特ニ注意シテ其逸走ヲ防キ成ル可ク人、獸類ヲシテ狂獸ニ接近セシメス速ニ之ヲ撲殺スルコト

第十二項 狂獸ニ咬傷セラレタル獸類ニシテ其確徵ヲ現ハサル間持主ニ於テ撲殺ヲ欲セサルトキハ嚴重ニ之ヲ鎖錮シ其徵候現ハル、トキ直チニ之ヲ撲殺スルコト

假性皮疽ノ場合ニ於テ鼻粘膜ニ潰瘍又ハ結節ヲ生シタルトキ、結節及

潰瘍全身ニ蔓延シ又ハ陰部ニ波及シタルトキ、結節深在シ治術ヲ施シ能ハサルトキ若ハ病症頑固ニシテ劇シキ膚列虞蒙ヲ發シタルトキハ該患馬ヲ撲殺スルコト

第十三項 病獸ノ糞尿其他ノ排泄物及病獸ニ使用シタル敷藁、飼料ノ殘物等ハ散逸ヲ防キ一定ノ場所ニ收集シ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ニ從ヒ燒棄若クハ消毒埋却スルコト

第十四項 病獸ノ取扱人其他總テ病獸ニ觸レタル者ハ其都度消毒スルコト
第十五項 撲殺スヘキ獸類ヲ燒棄場又ハ埋却地ニ牽キ行ク場合ニハ其道筋ハ傳染ノ虞アル獸類ノ所在地ヲ避ケ警察官及獸醫ノ監督ヲ受クヘキコト

第十六項 病獸牽付途中若クハ屍體運搬中ニ於テ糞尿其他ノ汚物ヲ漏ラストキハ土ト共ニ之ヲ除キ去リ其場所ニ濃厚石炭酸水、格魯兒石灰又ハ石灰乳ヲ撒布スルコト

第十七項 病獸ノ屍體ハ石灰乳ニ浸ヤル布片、綿類ヲ以テ鼻、口、肛門、陰門等ヲ塞キ濃厚石炭酸水又ハ石灰乳ニ浸シタル筵、菰類ヲ以テ全體ヲ纏

包シ天然孔ハ成ルヘク上方ニ向ケテ運搬スルカ又ハ特別ノ箱ニ入レテ運搬スルコト

第十八項 病獸若クハ其疑アル獸類ノ屍體ハ皮膚ヲ亂切シ石灰乳、粗製石炭酸又ハ石油ヲ注テ埋却スルコト

第十九項 病獸ヲ牽出シタル後廐舍内ノ敷藁、糞便等ハ散逸セサル様運搬シテ燒棄シ若クハ石灰乳又ハ格魯兒石灰水ヲ注キ深く埋却スルコト

第二十項 廐舍内ハ熱滲汁又ハ熱湯ヲ注キテ充分ニ洗滌シ石灰乳又ハ格魯兒石灰水ヲ注キ窓戶ヲ密閉シ格魯兒瓦斯又ハ亞硫酸瓦斯ノ薰煙ヲ行ヒ二十四時ヲ經テ窓戶ヲ開放スルコト

第二十一項 廐舍ノ隔壁、障木、床板等ハ熱滲汁若クハ熱湯ヲ以テ洗滌シ石灰乳又ハ格魯兒石灰水ヲ注キ「セメント」、漆喰等ノ床ハ格魯兒石灰水ヲ以テ洗滌シ損所アレハ新ニ修理ヲ加ヘ腐朽ノ木壁、床板等ハ成ルヘク取毀テ燒棄スルコト

第二十二項 廐舍ノ土床ハ深サ一尺以上掘起シ新鮮ノ土砂ト取換ヘ病毒汚染ノ土ハ敷藁同様ニ處分スルコト

第二十三項 病毒ニ汚染シタル金屬製ノ物品ハ灼熱シ木製ノ器具ハ成ルヘク燒棄シ其燒棄シ能ハサルモノハ熱湯ヲ以テ洗滌シ石灰乳又ハ格魯兒石灰水ヲ注キ曝乾スルコト

第二十四項 糞尿溜及排泄溝ハ汚物ヲ浚渫シ熱湯汁又ハ熱湯ニテ洗滌シテ生石灰又ハ石灰乳ヲ撒布シ洗滌シタル汚物ニハ強硫酸又ハ生石灰ヲ混シ深ク埋却スルコト

第二十五項 運動場、欄柵等ノ病毒ニ汚染シタルトキハ其汚土ヲ掘起シ生石灰又ハ石灰乳ヲ撒布シ欄柵ハ熱湯又ハ熱湯汁ヲ以テ洗滌シ石灰乳又ハ格魯兒石灰水ヲ注クコト

第二十六項 牧場ハ病毒ニ觸レタル部分ヲ區劃シ病毒汚染ノ土ヲ掘起シ生石灰又ハ格魯兒石灰ヲ撒布スルコト

第二十七項 病毒ニ汚染シタル瀛車、船舶ハ熱蒸氣ヲ用ヒテ消毒シ之ヲ用ヌル能ハサルトキハ熱湯又ハ海水ニテ洗滌シ石灰乳又ハ格魯兒石灰水ヲ注キ曝乾シ日光ヲ入ル、コト能ハサル船室ハ更ニ格魯兒又ハ亞硫酸ノ薰煙法ヲ行フコト

第二十八項 革具類ハ熱湯汁(二百倍)又ハ熱石鹼水ヲ以テ洗滌シ曝乾シ

テ後濃厚石炭酸水ヲ施スコト
第二十九項 病獸又ハ其屍體汚物取扱ヒ又ハ消毒ニ從事シタル者ノ衣服ハ燒棄シ又ハ煮沸曝乾スルコト

第三十項 病獸又ハ病毒汚染ノ物品ニ觸レタル者ノ履物ハ燒棄シ靴ハ石灰乳又ハ濃厚石炭酸水ニ浸シ獸脂ヲ塗リテ曝乾スルコト

第三十一項 獸疫流行地ニ於テハ病獸アルノ家ハ勿論總テ獸類飼養者ノ家ニ出入スル者ハ履物ニ注意シ殊ニ牛痘、炭疽、氣腫疽流行ノ場合ニハ成ルヘク入ルトキハ其家ノ構外ニ於テ履物ヲ脱シ出ルトキハ石炭酸水ニテ足ヲ洗ヒ後之ヲ穿ツコト

第三十二項 獸疫流行地ニ於テハ厩舎内ニ多量ノ乾草其地ノ飼料及不要ノ器具類ヲ置カサルコト

第三十三項 病毒ニ汚染シタル厩舎ニハ消毒ヲ行ヒタル後ト雖成ルヘク長ク傳染ノ虞アル獸類ヲ牽キ入レサルコト但シ之ヲ使用セントスルトキハ警察官及獸醫又ハ檢疫委員ノ指揮ヲ受クルコト

第三十四項 獸疫流行地ニ於テ特ニ左ノ衛生事項ニ注意スヘシ

- 一 獸類ノ健否ニ注意シ清潔ナル滋養、易化ノ飼料ヲ給スルコト
- 二 獸體ハ勿論厩舎、器具等ヲ清潔ニスルコト
- 三 厩舎内ニ新鮮ノ大氣ヲ通スルコト
- 四 厩舎内ノ温度ヲ調節スルコト
- 五 清潔ノ飲料水ヲ給スルコト
- 六 共同牧場ニ放牧セサルコト

第三十五項 消毒法ハ左ノ四種トス

- 一 燒却 燒却ニ適スルモノハ牛疫炭疽等ニ罹リテ斃死セル獸類ノ屍體肥糞、敷藁毛布、飼槽、水槽其ノ他甚シク病毒ニ汚染シタル物品ニシテ消毒後再ヒ用ニ供スル目的ナキモノ
- 朽破ノ厩舎、床板、隔木等貽ント價値ナキモノハ成ルハク燒却スルヲ良トス

二 蒸氣消毒 蒸氣消毒ニ適スルモノハ被服、毛布、器具等ニシテ一時間以上攝氏百度以上ノ溫熱ニ觸レシムヘシ但シ革具類ニハ之ヲ避クル

ヲ要ス

三 煮沸消毒 煮沸消毒ニ適スルモノハ被服、毛布ノ類ニシテ沸騰後一時間以上煮沸スヘシ

四 藥物消毒 藥物消毒ニ供スル藥劑竝其ノ用法ハ左ノ如シ

- 一 生石灰末 (生石灰ニ少量ノ水ヲ加ヘ粉末トナシタルモノ但シ生石灰ハ少量ノ水ヲ灌ケハ熱ヲ發シテ崩壞スルモノヲ撰ム)
- 生石灰ハ用ニ臨ミテ之ヲ製シ厩舎、糞尿溜、屍體等ノ消毒ニ用フ
- 石灰乳(十倍)(生石灰一分水九分)
- 石灰乳ハ用ニ臨ミテ之ヲ製シ一分ノ生石灰ニ九分ノ水ヲ徐々ニ加ヘ攪拌スヘシ其用量ハ生石灰末ノ五倍トス
- 普通石灰ヲ生石灰末、石灰乳ニ代用スル場合ニハ倍量ヲ用フヘシ
- 石灰乳ハ厩舎ノ隔壁、隔木、欄柵、床板其ノ他病毒ニ汚染セル場所ノ消毒ニ用フ
- 一格魯兒石灰水(二十倍)(格魯兒石灰五分、水九十五分)
- 格魯兒石灰水ノ應用竝用量ハ石灰乳ニ同シ但用ニ臨ミテ製スヘシ

一石炭酸水(二十倍)(結晶石炭酸五分鹽酸一分水九十四分)
 石炭酸水ヲ製スルニハ石炭酸五分ニ凡水一分ヲ加ヘ攪拌又ハ振盪
 シツ、徐々ニ定量ノ水ヲ注キ後鹽酸一分ヲ加フヘシ温湯ヲ用フレ
 ハ其ノ溶解殊ニ速カナリトス但使用ノ際ニハ毎回振盪スルヲ要ス
 石炭酸水ハ屍體、金屬、木製ノ器具器械、革具類ノ消毒ニ供ス
 稀釋石炭酸水(結晶石炭酸三分鹽酸一分水九十六分)
 手足等ノ消毒ニ供ス但シ石炭酸水ニテ洗滌シタル後更ニ清水ヲ以
 テ洗淨スヘシ

粗製石炭酸

屍體、排泄物、糞尿溜等ノ消毒ニ供ス

一昇汞水(千倍)(昇汞一分鹽酸十分水九百八十九分)

昇汞水ヲ製スルニハ昇汞ヲ定量ノ水ニ溶解シ後鹽酸ヲ加フヘシ

昇汞水ハ猛毒ニシテ無色無臭ナルカ爲メ危險ヲ來シ易シ故ニ貯藏

使用ノ際十分ニ注意ヲ加フルヲ要ス但シ金屬製ノ器ニ貯藏スヘカ

ラス

昇汞水ハ陶器、石器、木製器具ノ消毒ニ供ス

格魯兒瓦斯(格魯兒石灰一分ニ粗製硫酸又ハ鹽酸二分ヲ注キ瓦斯ヲ

發生セシム)

厩舎、日光射入ノ惡シキ室内等ノ薰煙ニ供ス但シ窓戶ヲ密閉シテ

薰煙シ一兩日ノ後窓戶ヲ放開シ風ヲ通スヘシ

一熱鹵汁(粗製加里又ハ曹達一分水二十分若ハ新製ノ木灰一分水五

分ヲ煮沸シテ製ス)

厩舎、器具等ノ洗滌消毒ニ供ス

第三十六項 左ニ各獸疫ノ病性、原因、症候等ヲ畧說ス

一牛疫

(病性) 牛疫ハ牛屬固有ノ熱性傳染病ニシテ羊、山羊及他ノ反芻獸

ニ傳染ス傳播ノ迅速ナル斃死ノ夥多ナル獸疫中最モ險惡ノ症ナリ

トス

(原因) 傳染毒ノ本態ハ未タ詳ナラスト雖固性竝ニ揮發性ニシテ病

獸ノ呼氣、津唾、涙、鼻、口、眼ノ粘液、汗、糞、尿、血液竝ニ體內諸臟

獸疫豫防心得

器ニ存ス或ハ病獸ヨリ直接ニ傳染シ或ハ間接ニ糞、敷藁、芻秣、毛、皮、肉、被服、凜車、船舶、家畜商、犬、家禽等ノ媒介ニ由テ傳染ス。傳染毒ハ乾燥ノ氣中ニ在テハ速ニ死滅スルモノ、如シ然トモ適好ノ境遇ニ在テハ數週間乃至數箇月勢力ヲ保ツ本疫ノ始テ侵入スルヤ其毒勢最モ強烈ナリ傳染毒ハ攝氏六十度以上ノ熱、零以下十五度ノ寒氣、腐敗及諸種ノ消毒藥ニ依リ滅殺スルコトヲ得

(症候) 本病ハ急性ノ經過ヲ取り主トシテ消化器粘膜炎ヲ侵ス病毒ノ潜伏期ハ普通六日乃至九日トス初兆ハ熱候ニシテ體温ハ攝氏四十一度若クハ四十二度マテ昇騰シ脈小ニシテ一分時ニ六十乃至百二十ヲ算シ泌乳、食慾共ニ減少シ倦怠シテ頭ヲ低ル斯ノ如キ前兆ニ續テ惡寒戰慄シ皮温不均、呼吸促迫、各部ノ粘膜炎ハ特ニ紅ヲ潮シ食思、反芻全ク止ミ反テ渴ヲ増ス通便遲滯シ糞ハ乾固ニシテ粘液ヲ附著シ間々輕キ痲痛ヲ發ス次テ眼、鼻、陰門ヨリ液(初期ハ漿液樣次期ハ漿液ニ粘液ヲ雜ヘタルモノ)ヲ漏ラシ大ニ流派ヌ糞ハ漸次ニ柔軟流動狀トナリ大ニ下痢ス其糞汁ハ粘液樣ニシテ惡臭ヲ放チ

往々血液ヲ混シ頻ニ努責窘迫シ直腸ノ粘膜炎露出ス病獸ハ遽ニ羸瘦シ行歩踉蹌トシ時トシテハ大ニ興奮シテ不安トナリ發狂ノ狀ヲ呈シ或ハ呼吸困難トナリ重性肺炎ノ徵ヲ發ス

口腔及陰腔ノ粘膜炎ハ赤色ノ斑點若クハ線條ヲ現ハシ灰白色乃至灰黃色ノ乾酪樣滲出物痲皮之ヲ覆フ其滲出物ハ容易ニ剝脫シテ暗赤色ノ爛斑ヲ呈ス輕症ニ於テハ痲皮、爛斑ヲ缺如スルコトアリ又皮膚ニ小結節膿疱及皮痲ヲ見ルコトアリ

以上ノ症候漸次亢進スルニ從ヒ眼、鼻、口ノ分泌液增多シ惡臭ヲ放チ陰門、肛門哆開シ體温沈下シ虚脱シテ斃ル

(經過及豫後) 豫後不良ニシテ大約一週日ヲ經レハ斃ル經過ハ疫ノ性質及牛ノ種類ニ依テ差アリ侵入ノ初ニ當リテハ急劇ナルモ其終ニ及ヘハ漸ク輕緩トナル斃死ノ割合ハ百頭ニ付凡ソ九十頭乃至九十五頭ナリ

二 炭疽

(病性) 炭疽ハ一種ノ杆菌(バチルス、アంతラシス)ニ依テ發スル

危険ノ傳染病ニシテ哺乳獸及鳥類ヲ侵シ通常病獸ヨリ直接ニ傳染セス人類、器具、芻秣、昆螺等ノ媒介ニ由テ傳染シ又地中潜伏ノ病毒ヨリ傳播ス

(原因) 病毒ハ動物體ノ各部ニ存シ就中血液、分泌液、内臓、糞便等ノ中ニ多シ此細菌ハ芽菌ハ芽胞ヲ生ス而シテ芽胞ハ頗ル抵抗力ニ富ミ容易ニ死滅セス地中ニ在テハ幾年間熱力ヲ存スルヲ以テ極テ危険ナリ

(症候) 此病ハ俄然發生シ危劇ノ經過ヲ取リ多クハ一日乃至三日以内ニ斃ル其主要ノ徵候ハ劇甚ノ全身違和、大熱、粘膜出血トス此他皮膚ノ癰、浮腫、腸患、腦症、呼吸困難ノ如キ局所症候アリ隨テ炭疽ニ種々ノ細別アリ

甲 局部發生ナキモノ即チ通常芽胞傳染ニ依テ發スルモノニシテ甚急性、急性及次急性ノ別アリ(一)甚急性炭疽ニ在テハ腦卒中ノ狀ヲ呈シ數分時乃至一時間ニシテ口、鼻、肛門等ヨリ血液ヲ漏ラシ搖擗ヲ發シテ斃ル往々前夜壯健ノ獸翌朝ニ至テ斃死スルヲ見ルコト

アリ又勞役、放牧若クハ採食中卒倒スルコトアリ此種ハ牛羊ニ多ク特ニ流行ノ初ニ方リテ屢々之ヲ見ル(二)急性炭疽ハ經過前者ニ比スレハ較々長ク二時間乃至十二時間ニ互リ最モ長キハ二十四時間ヲ閱ス病獸ハ急ニ發熱シ(體溫攝氏四十度乃至四十二度)腦充血又ハ肺充血ノ徵ヲ呈シ天然孔ヨリ血液ヲ漏ラシ搖擗ヲ發シ遂ニ窒息ニ由テ斃ル時トシテハ症狀一時輕減シ再ヒ舊ニ復ス(三)次急性炭疽熱又ハ間歇性炭疽ト稱スルモノニシテ普通牛馬ニ於テ見ル所ノ症トス症候ノ大體ハ急性ニ同シギモ經過ハ平均二十四時乃至四十八時最モ長キハ五日乃至七日ニ彌ル熱候顯著ニシテ惡寒戰慄皮溫不定、全身大違和ノ外肺充血及腦充血ノ徵ヲ發シ之ニ加フルニ重症腸患ノ狀(痲痛ノ徵)ヲ以テシ病勢ノ弛張頗ル頻繁ナリ

乙 局部發症アルモノ即チ通常杆菌傳染ニ依テ發スルモノナリ皮膚ノ癰及浮腫ハ特ニ牛馬多ク癰ハ限局シ其初メ硬固ニシテ熱痛ヲ帶フルモ後ニハ寒冷無痛ニシテ脱疽ニ陥ル浮腫ハ扁平捏粉様ニシテ往々波動シ寒冷無痛ナリ經過ハ三日乃至七日ニ互リ治癒スルモ

ノ少シトス腫瘍發生ノ前後ハ發熱ス

又癰及浮腫ハ舌、咽喉及直腸ニ發ス所請舌炭疽、直腸炭疽是ナリ此等ノ場合ニ於テハ癰ノ外熱、呼吸困難、喉頭狹窄音、嚥下困難、一般ノ「チアノーデ」ヲ呈シ顎下、頸、胸前等ニ腫瘍ヲ發シ通便ニ方リ窘迫シ疼痛ヲ訴ヘ十二時乃至二十四時間内ニ斃ル此種ハ豕、犬ニ最モ多シ

動物ノ種類上ヨリ論スレハ間歇性炭疽、炭疽性卒中及癰ハ牛馬ニ多ク羊ニ在テハ炭疽卒中ヲ主トシ犬ニ在テハ癰、豕ニ在テハ咽喉及舌ノ炭疽ヲ主トス

(豫後) 豫後ハ概シテ不良ニシテ斃死ノ割合ハ百頭ニ付凡ソ七十頭乃至九十頭トス最モ急性ノモノハ悉ク死ス時トシテ經過輕易ニシテ自然ニ治スルモノ亦ナキニアラヌ一タヒ此症ニ罹リテ快復スレハ暫時免病質トナル

(公衆衛生上ノ關係) 炭疽ハ人ニ傳染シ險惡ノ症ヲ發セシムルヲ以テ公衆衛生上至大ノ關係アリ愛知縣、埼玉縣ニ於テハ往年此傳染

ノ爲メ惡疾ヲ發シ死去シタル者アリ而シテ人ノ傳染スルハ創傷ヨリ毒ヲ受ケ又ハ病獸ノ肉ヲ食スルニ由ル

三 氣腫疽

(病性) 本病ハ特異ノ細菌ニ依テ發スル牛ノ傳染病ニシテ主トシテ幼牛ヲ侵ス其病毒ハ皮膚又ハ粘膜ノ傷創ヨリ體內ニ入ル

(原因) 病毒ハ抵抗力至大ニシテ二年間モ發芽力ヲ失ハス尋常薄弱ノ消毒藥ハ病毒ヲ殺滅スルヲ得ス本病ノ常在地ニ於テハ病毒ハ地中ニ存シ之ヨリ傳染ス

(症候) 氣腫疽ハ急劇ノ傳染病ニシテ皮膚ニ皰癬性ノ腫瘍(所謂氣腫)ヲ發シ全身症狀水脈腺腫及運動異常ヲ呈ス氣腫ハ體ノ諸部(肢ノ上部、頸、肩、胸下、腰、十字部等)ニ發スルモ飛節及腕節ヨリ下方ニハ曾テ發スルコトナシ稀ニハ口蓋、舌根、咽頭ニ發スルヲアリ腫瘍ハ初起小ニシテ疼痛ヲ帶ヒ速ニ蔓延シ數時間内ニ於テ非常ニ巨大トナリ甚シキハ全軀幹ニ散蔓スルコトアリ試ミニ腫瘍ヲ壓スレハ皰癬音(摺ヲ火中ニ投シテ燒クカ如キ音)ヲ發シ之ヲ打テハ鼓音

ヲ放チ瘍ノ中央ハ乾燥無感覺ニシテ黑色ヲ帶ヒ皮革ノ如シ甚シキハ全ク壞死シテ冷却ス之ヲ切ルモ疼痛ヲ覺エス暗赤色ニシテ惡臭アルノ泡沫液ヲ漏ラス腫瘍ハ一箇ニ過キサレモノアリ又數多簇發スモモノアリ腫瘍鄰接ノ水脈腺ハ大ニ腫脹ス全身症狀トシテハ食慾、反芻頓ニ廢絶シ病獸ハ倦怠沈憂シ大熱(攝氏四十二度マテ)ヲ發シ肢ニ氣腫アルカ爲メ大ニ運動異常ヲ呈シ或ハ跛行シ或四肢ヲ地上ニ曳ク氣腫ノ蔓延スルニ從ヒ呼吸愈々促進シ時トシテハ痲痛ヲ發シ急ニ虛脱シテ斃ル

(潜伏期及經過) 潜伏期ハ平均二日ナリ病性急劇ナル以テ發病後一日半乃至三日ニシテ斃レ治スルコト稀ナリ

四 鼻疽及皮疽

(病性) 本病ハ馬屬ニ發スル惡性傳染病ニシテ一種特異ノ細菌ニ原因シ皮膚、水脈系及呼吸器ヲ侵スモノトス

(原因) 本病ハ直接ニ病獸ヨリ健獸ニ傳染シ又馬具、被衣、飼槽等ノ如キ媒介物ニ依テ傳染ス皮膚、潰瘍ノ分泌液、鼻ノ漏液ハ最モ傳染

力ヲ逞フスルモ病毒ハ又諸内臟及血液中ニ存ス病毒侵入ノ徑路ハ呼吸器粘膜、皮膚及消化器粘膜トス

(症候) 本病ニ慢性ト急性トノ二種アリ各其症候ヲ異ニス

甲 慢性症ノ初發ハ緩慢陰微ニシテ年月ノ久キニ彌ルヲ以テ人多クハ之ヲ覺ラス隨テ從前ハ非常ニ長キ潜伏期ヲ有スルモノト看做シタリ然ルニ接種試験ニ依レハ潜伏期ハ僅々三日乃至五日ニ過ス鼻疽ノ主徴ニ三アリ(其一)鼻ノ一孔若クハ兩孔ヨリ灰白色ノ粘液少量ヲ漏ラス末期ニ至レハ潰瘍ヨリ出ル灰黃色又ハ灰綠色ノ粘稠液ニ清澄水様ノ加答兒分泌液ヲ混ス其狀恰モ菜種油ニ蛋白ヲ混シタルカ如シ又往々漏液中ニ血液ヲ混ス(其二)鼻粘膜ニ小結節及潰瘍ヲ生ス時トシテ此瘍者全ク缺如シ或ハ晚期ニ至リ始テ發生ス鼻腔下端ノ小結節ハ管ニ目撃シ得ルノミナラス又指以テ觸ル、ヲ得ヘシ小結節ハ速ニ潰瘍ニ變ス潰瘍ハ深淺一ナラス瘍底ハ凹陷シテ豕脂狀ヲ呈シ少量ノ惡性膿ヲ漏ラス瘍縁ハ突隆シテ蟲蝕セラレタルカ如キ觀アリ(其三)顎下水脈腺腫脹シ概ネ下顎骨ノ内側ニ固著

シテ膿膿セス

營養漸次不良トナリ皮膚粗剛、毛色光澤ヲ失ヒ全身羸弱シ呼吸困難ヲ加ヘ咳嗽頻發ス不正ノ弛張熱又ハ間歇熱ヲ檢定スルコトアリ又衄血、血尿及骨折ノ素因ヲ認ムルコトアリ末期ニ及ヘハ四肢、胸腹ノ下面ニ浮腫ヲ發シ關節、陰囊、睪丸等ニ炎腫ヲ生ス

皮疽ハ前胸、肩、胸、腹、四肢或ハ其他ノ部位ノ皮膚及皮下織ニ豌豆大乃至胡桃大ノ結節ヲ生シ初ハ硬固ニシテ且疼痛アリ然レトモ漸次其結節ノ中心柔軟トナリ波動ヲ呈シ終ニ破潰シテ噴火口ノ狀ヲ呈シ黃色ノ液ヲ漏泄ス小潰瘍ハ痂皮ニ覆ハル、モノアリ病勢ノ進ムニ從ヒ結節(所謂球腫)曇々發生シ各潰瘍ニ連絡セル水脈管ハ腫起シテ索狀ヲ呈シ(所謂索腫)處々新球腫ヲ發シ恰モ念珠ノ如シ關係アルノ水脈腺亦腫脹硬結シ又ハ膿ヲ醸ス久シキヲ經レハ大ニ衰弱シ甚シキハ斃ル

乙 急性症ハ比較的馬ニ少ク驢騾ニ多シ初ヨリ急性ノ經過ヲ取リ或ハ慢性ノ症全身ニ汎發シテ急性トナリ或ハ他ノ急性病ト合併シ

ヲ來ル接種皮鼻瘍ハ必ス急性ナリ病狀ハ急劇ナル敗血性傳染病ノ徵ニシテ呼吸器粘膜潰爛シ皮膚、肺臟及他ノ臟器ニ病毒轉移ヲ致ス

本症ハ寒戰、大熱 攝氏四十二度マテ昇騰ス)ヲ發シ鼻孔ヨリ膿樣粘液ヲ漏ラシ晚期ニ至レハ血液及敗膿ヲ漏ラシ間々之ニ唾液、食餌ヲ混ス鼻粘膜ハ小結節及潰瘍ヲ發シ潰瘍ハ往々彼此湊合シ終ニ鼻粘膜ノ全部潰爛シ實扶的里塊ヲ被ムル斯ノ如キ變化ハ僅々二三日内ニ發生ス呼吸ハ同時ニ促進シ氣息喘々タリ右ノ他更ニ皮疽ヲ發シ皮膚ノ浮腫、球腫、潰瘍、水脈管ノ索腫、水脈腺ノ腫脹、化膿ヲ見ル食欲減損、嘔下間々困難ニシテ下痢ヲ發シ尿ハ多量ノ蛋白ヲ含ミ體軀ハ急ニ瘦削ス

(經過及豫後) 慢性ノ鼻疽及皮疽ハ緩慢ニシテ數週、數箇月若クハ數年ノ久キヲ經テ鼻粘膜又ハ皮膚ヨリ肺ニ轉移ス(所謂隱性反痘)極テ頑固ノ症ハ七年ニ彌ルコトアリト云フ急性ハ三日乃至十四日ニシテ斃ル

(公衆衛生上ノ關係) 鼻疽及皮疽ノ病毒ハ創傷面ヨリ人ニ傳染シ致命ノ症ヲ發スルヲ以テ病馬ニ觸ル、者ハ慎重ノ注意ヲ要ス

五 傳染性胸膜肺炎

(病性) 傳染性胸膜肺炎ハ一ニ肺疫ト稱ス牛屬特異ノ傳染病ニシテ肺及胸膜ニ炎症ヲ發ス牛疫ニ亞ク險惡ノ症ニシテ最初散發スルコトアルモ多クハ地方性ヲ呈シ或ハ大ニ流行シ某地方ニ於テハ常在病トナル牛屬ノ外山羊ニ發スト云フ

(原因) 病毒ハ一種ノ細菌ニシテ主トシテ病牛ノ呼氣中ニ存シ直接ニ病牛ヨリ健牛ニ傳染シ或ハ人及他ノ媒介物ニ依リ間接ニ傳染ス牛商ノ貸厩ハ傳播上極テ危險ナリ

病毒ハ頗ル抵抗力ニ富ミ傳染厩舎ニ在テハ數箇月若クハ一年餘モ有力ナリ

(症候) 潜伏期ハ平均三週乃至六週日ニシテ一タヒ之ニ罹リタル牛ハ數年間又ハ終生免病ス本病ニ慢性ト急性トノ二期アリ

甲 慢性期即チ發生期ニシテ一ニ隱症期ト稱ス慢性肺病ノ徵ヲ發

二週乃至六週ニ互ル稀ニハ數日ニ過キス肺ノ小葉ニ微細ノ病竈アルニ過キサレヲ以テ初起ハ短ク且乾キタル痛咳ヲ發シ漸々其數ヲ増シ強キ潤聲ノ咳嗽頻發スルニ至ル食慾、泌乳共ニ減少シテ三十九度半乃至四十度ノ熱ヲ發シ皮温均一ナラス肺ノ打診、聽診ノ結果ハ殆ント常態ニ異ナラサルカ或ハ氣胞音ノ常ヨリモ粗厲若クハ微弱ナルヲ聞ク肋間部ヲ壓スレハ疼痛ヲ訴フ稀ニハ此期ニ於テ治ス

乙 急性期一ニ發顯期ト稱シ此期ニ至レハ熱勢大ニ亢進シテ肋膜肺炎ノ諸徵明瞭トナリ呼吸疾速、困難、前肢ヲ開張シテ起立シ臥スルコトヲ欲セス鼻孔豁開シ臍部ノ波動甚シク呼吸スル毎ニ呻吟ス試ニ背、腰及肋間部ヲ壓スレハ苦悶ヲ訴フ咳嗽ハ濕啞聲ヲ帶ヒ咳スル毎ニ苦悶ス又鼻孔ヨリ粘液ヲ漏ラシ間々之ニ血液ヲ混シ或ハ惡臭膿様ノ液ヲ漏泄ス打診スレハ初期ニ鼓音後ニハ濁音ヲ發ス而シテ濁音ハ肺ノ大部ヲ占ム聽診スレハ氣胞音微弱若クハ全缺其代リトシテ氣管支呼吸、羅音及摩擦音ヲ聞ク肺ノ健部ニ於テハ氣胞

音粗厲ナリ體温攝氏四十度乃至四十二度脈八十乃至若クハ其以上ヲ算シ皮温定ラス鼻端乾燥、皮膚粗剛、食慾、反芻、泌乳共ニ休止、煩渴引飲、通便祕澇、尿ハ蛋白ヲ含ミ、孕牛ハ流産シ易シ病久キヲ經レハ呼吸益困難ヲ加ヘ胸垂、胸下四肢ニ浮腫ヲ發シ倦怠、羸瘦甚シク終ニ窒息シテ斃ル

(經過及豫後) 肺疫ノ經過ハ時トシテハ急性時トシテハ慢性ナリ概シテ強壯ノ幼獸竝ニ良美ノ食ヲ喫スルモノニ在テハ急劇ニシテ老獸竝ニ水分過多ノ食ヲ取ルモノニ於テハ緩慢ニシテ險惡ナリ病獸百頭ニ付五十頭乃至七十頭ハ斃死シ三十頭ハ治癒不全ニシテ肺臟ニ慢性ノ變化ヲ貽スモノ多シ

牛ノ大群ニ於テハ疫ノ經過ハ奇異ニシテ初メ數頭ニ散發シ數週ヲ經ルノ後他ノ牛ヲ侵シ次テ大ニ蔓延ス斯ノ如クシテ疫ハ一厩舎ニ存在スルコト數箇月若クハ半年ノ久シキニ互リ終ニ常在病トナル

六 流行性鷄口瘡

(病性) 流行性鷄口瘡ハ一名ヲ口蹄疫ト云フ急性發疹ニ屬スル所ノ

傳染病ニシテ口腔粘膜、趾間ノ皮膚及乳房ニ水泡ヲ發シ主トシテ牛、羊、及豕ニ發ス罕ニハ馬、犬、猫及家禽ニ傳染ス又人ニ傳染スルコト稀ナリトセス一タヒ此症ニ罹ルモ免病質ヲ得ス

(原因) 病毒ノ本態ニ關シ區々ノ說アリト雖未タ明確ナラス病毒ハ唾液、水泡ノ含液、乳汁、血液、糞尿、呼氣等ニ存シ頗ル粘靱ニシテ糞便等ノ中ニ在テハ數箇月若クハ一年間モ有力ナリ病獸ヨリ直接ニ傳染シ或ハ媒介物ニ由リ間接ニ傳染ス而シテ疫ハ專ラ交通貿易ニ依テ傳播ス

(症候) 牛ニ於テハ口腔粘膜、蹄冠及ヒ趾間ノ皮膚ニ疱及潰瘍ヲ發シ羊、山羊、豕ニ在テハ病症概ネ足部ニ限局ス

(一) 口腔ノ症候 平均三日乃至五日ノ潜伏期ヲ經テ發熱シ口腔粘膜紅ヲ潮シ食慾泌乳減少シ反芻休止兩日ヲ經レハ齒齦、舌、頰、唇等ニ麻仁大ノ黃白色水泡ヲ點見ス此水泡ハ漸々増大シ間々甲乙湊合ス初メ澄液ヲ含ムモ後ニ至レハ渾濁シ膿様ノ液ニ變ス終ニ水泡ハ破潰シテ深紅色ノ上皮剝脫面ヲ呈シ(所謂爛斑)頻ニ唾液ヲ漏ラス

水疱多クハ鼻鏡ニ蔓延ス本病ノ經過中病獸ハ大ニ羸瘦シ乳汁ハ一變シテ黃白色ヲ帶凝固シ易ク其味佳ナラズ乳脂、乾酪ヲ製シ難シ病ノ經過ハ一二週日ニ過キサルモ合併症アルトキハ經過一變ス合併症ハ乳房ノ發疹、乳房炎、咽頭炎(嚥下困難、食餌逆出咳嗽)異物性肺炎、鼻腔又氣管支加答兒等ナリ又口腔ノ滲出劇甚ナルキハ格魯布様ノ附著物ハ上皮ト共ニ分解シ臭氣ヲ放ツ又哺乳ノ幼獸ハ重性胃腸加答兒ヲ發スルコトアリ又子宮、陰腔、胸腹ノ皮膚竝ニ角膜ニ水疱ヲ發ス又角ノ實質發炎シ角根ニ水疱ヲ發シ脫角スルコトアリ

(二)蹄ノ症候 蹄冠部及趾間ノ皮膚ハ口腔粘膜ノ如ク紅ヲ潮シ熱痛ヲ帶ヒ一兩日ヲ經テ水疱ヲ發ス水疱破潰スレハ病獸趁跛シ多クハ伏臥ス通常一二週日ヲ經テ治ス合併症ハ趾間皮膚ノ羅斯性炎症潰瘍、膿腫、療疽、關節炎、骨疽、脫蹄、膿毒症創等トス

(經過及豫後) 口蹄疫ノ經過ハ年ニ依テ輕重ノ別アルモ概シテ定型的ノ良性經過ヲ取リ二三週日內ニ癒ユ斃死ハ皆無若クハ百頭中僅ニ一頭ニ過キス然レトモ或ル年ニ於テハ惡性ニシテ成長獸ハ百頭

中一頭乃至五頭哺乳幼獸ハ五十頭乃至八十頭斃死ス

一廐舎若クハ一獸群中ニ於ケル疫ノ經過ハ四週乃至六週日ニ互リ通常速ニ傳播スルモ或ハ徐々蔓延スルコトアリ一旦治癒ニ赴ケハ羸瘦セサル者速ニ舊態ニ復ス時トシテ瘦削、泌乳減少、皮膚粗剛、乳房炎、經久蹄病、痒性皮炎、跛行等ノ如キ餘病ヲ貽スコトアリ

七 羊痘

(病性) 羊痘ハ羊屬固有ノ熱性傳染病ニシテ皮膚ニ痘瘡ヲ發ス群羊ニ傳播シ大ニ羊毛ヲ損スルヲ以テ農業經濟上至大ノ關係アリ

(原因) 傳染毒ハ固性並ニ揮發性ニシテ病羊ノ排泄物、分泌物、呼器皮膚蒸發等ニ存シ特ニ痘漿中ニ多シ毒性ハ粘靱ナルヲ以テ其病毒ニ汚染セル羊舎ニ在テハ五六箇月間モ毒力ヲ存スト雖消毒藥ヲ施セハ容易ニ死滅ス

本病ハ病羊、種痘羊ヲ健羊ノ群中ニ牽入ル、ニ依リ又媒介物(牧羊者、犬、衣服、羊毛、糞、飼料、瀛車等)ニ由テ傳播ス牛、山羊、豕及人ニモ傳染スルコトアリト云フ

(症候) 平均四日乃至七日ノ潜伏期ヲ經テ發熱シ倦怠、沈鬱、頭ヲ低
 レ食慾、反芻共ニ減少ス體温ハ四十一度乃至四十二度マテ鼻騰シ
 脈搏疾速、呼吸増數、結膜潮紅シ眼、鼻ヨリ漿液ヲ漏シ一二日ヲ經
 レハ手ノ稀疎ナル局部(顔面、四肢ノ内面、胸腹、尾ノ下面)ニ紅斑
 ヲ發ス稀ニハ密毛ヲ帶ル部並ニ口腔、咽頭ノ粘膜ニ發疹ヲ見ルコ
 トアリ

發疹後第五日ニハ小結節ノ項褪頭色シ紅暈ヲ匝ラシ痘圍ノ皮膚ハ
 腫脹ス之ト同時ニ熱ハ减退シ更ニ數日ヲ經レハ水泡増大ス水泡ハ
 隆起シ或ハ扁平ニシテ淋巴様ノ無色液若クハ黃赤色ノ液ヲ含ム發
 疹後六日乃至七日ヲ經レハ熟痘トナル爾後痘漿愈々渾濁シ膿疱ニ
 變シ熱候充進シ眼、鼻腔、咽喉及氣管支ノ粘膜ハ加答兒性炎症ヲ發
 シ眼及鼻孔ヨリ膿樣液粘ヲ漏ラシ流涎、食餌吐出、嚥下困難、咳嗽
 呼吸促迫ヲ呈ス時トシテハ頭部大ニ腫脹シ皮膚ノ蒸發氣惡臭ヲ放
 ツ終ニ痘ハ乾涸結痂シ二三週許ニシテ脱落ス
 (經過及豫後) 輕症ハ少數ノ痘ヲ散發シ輕易ノ熱候ヲ呈スルノミ重

症ニ於テハ痘瘡簇發シ數多ノ痘ハ湊合シテ大化膿面トナリ皮膚ハ
 劇性炎ヲ發シ甚シキハ皮膚ノ壞疽ヲ起シ惡臭ヲ放ツ所謂屍臭痘是
 ナリ此ノ如キ症ハ熱度頗ル高ク口腔、咽喉、氣管支及角膜ニ痘ヲ發
 シ關係アルノ水脈腺ハ大ニ腫脹シ間々化膿ス粘膜ノ炎症ハ格魯布
 性ヲ帶ヒ往々格魯布性肺炎ヲ發ス惡性經過ニ於テハ敗血症及膿毒
 症ヲ發シ關節、漿液膜、腦等ニ病毒轉移ヲ致シ或ハ肺炎又ハ喉頭格
 魯布ノ爲メ窒息シテ斃ル此種ノ痘瘡ハ假令ヒ治癒スルモ長キ時日
 ヲ要シ病羊ハ羸弱シ全體ノ毛ヲ脫シ深キ癩痕ト慢性跛行又ハ失明
 ヲ貽ス出血性痘瘡ニ於テハ皮膚、粘膜ノ所々出血シ腐壞スルニ至
 ル之ヲ腐痘ト云フ

羊群中ニ於ケル痘ノ經過ハ急慢善惡一定セス死亡ノ割合ハ通常百
 頭ニ付十頭乃至二十頭惡性ハ五十頭若クハ其以上ナリ故ニ其重症
 老獸並ニ幼弱ノ獸ニ於テハ豫後不良ナリ羊毛脫落、體重減少、流產
 貽後病ノ如キ間接ノ損害極テ大ナリ

八 豕虎列刺

獸疫豫防心得

八(病性) 豕虎列刺ニ腸症ト肺症トノ二種アリ腸症ニ於テハ大腸ノ實扶的里性炎症並ニ其附近水脈腺ノ腫脹ヲ發シ往々肺炎ヲ合併ス英米、瑞西、丁抹ノ諸國ニ於テ大ニ流行シ通常病獸ノ肉若クハ病毒ヲ含メル食物ヲ啖フニ由テ腸ヨリ傳染ス肺症ハ卵圓形細菌ニ由テ發スル傳染性ノ胸膜肺炎ニシテ肺ノ壞死及慢性乾酪性變化ヲ發生シ易シ

(原因) 腸症ノ傳染毒ハ長卵圓形ノ細菌ニシテ運動力ヲ有シ長サ一・二乃至一・五「ミクロミリメートル」幅之ニ半ハシ中央ハ淡明ナリ(フロツシユ氏説)

肺症ノ傳染毒ハ卵圓形ノ細菌ニシテ運動セズ長サ一・二「ミクロミリメートル」幅〇・四乃至〇・五「ミクロミリメートル」兩極ノ染色中央ハ染色セス頗ル家兔ノ敗血菌ニ類シ又家禽虎列刺及出血性敗血症ノ細菌ニ類ス此細菌ハ特ニ肺ノ壞疽竈、肋膜滲出及氣管支水脈腺中ニ夥シク又血液、腹腔ノ臟器(殊ニ脾臟)ニ存ス病毒ハ揮發性ニシテ重ニ呼氣ニ由テ傳染シ其傳染力頗ル劇烈ナリ豕ノ驅逐

往來ハ傳播上最モ危險ノ媒介ナリトス而シテ恐ラクハ皮膚ノ創傷及腸ヨリモ亦傳染スルモノナラント云フ

(症候) 腸症ト肺症トハ各徵候ヲ異ニシ兩症トモニ急性ト慢性トノ區別アリ

甲 急性腸症ハ豕疫侵入ノ初メニ於テ之ヲ見ル平均ノ經過ハ五日乃至八日ニシテ初起ニハ食欲減損及ヒ通便泌瀝ノ兆ヲ呈シ倦怠、鬱憂、頭尾ヲ低レ結膜潮紅シ眼瞼ニ乾涸ノ粘液ヲ凝著ス體溫攝氏四十一度以上四十二度呼吸促迫時トシテハ鼻孔ヨリ膿樣粘液ヲ滲ラス晩期ニ至レハ下痢シ糞ハ稀薄ノ液狀ニシテ惡臭ヲ放チ間々血液ヲ混ス舌、頰、口蓋、軟口蓋、扁桃腺ニハ灰白色若クハ灰黃色ノ實扶的里性潰瘍ヲ發ス又耳、鼻端、腹ノ下面、肢ノ内面並ニ肛圍ノ紅班ヲ見ルコト稀ナリトセス最末期ニ至レハ病獸羸弱シ伏臥スレハ復タ起立スルコト能ハス搖擗ヲ發シテ斃ル

慢性腸症ニ在テハ毫モ顯著ニ病徵ナシ唯虛弱ニシテ能ク發育セス時々咳嗽、下痢、皮疹ヲ生シ又耳ニ淡紅班ヲ發ス

乙 急性肺症ハ頗ル急劇ニシテ往々數時間ニ斃ル其主徴ハ頸、脚等ノ皮膚ノ紅斑及大腹脹、咳嗽、呼吸困難、大熱及卒急ノ羸弱ニ在リ初起病豕ハ稍々興奮シ續テ倦怠疲勞シ弛張性ノ大熱ヲ發シ少ク寒戰シ食慾減損、通便秘結ス此初期ニ於テ外觀上往々一時輕快トナルモ三四日ヲ經レハ短ク且乾キタル痙攣性ノ咳嗽ヲ發シ呼吸促迫シ咳嗽ノ發作中ハ頭部粘膜藍紫色ヲ呈シ大ニ疲勞シ窒息ノ虞アリ呼吸困難、咳嗽ノ發作、熱候並ニ衰弱ハ益重キヲ加ヘ肺ヲ聽診スレハ氣管支呼吸、摩擦音及微弱ノ氣胞音ヲ聞ク終ニ病豕ハ蓐藁中ニ潜伏シ咳嗽ノ際頭ヲ擧ケ得ルノミ急性經過ハ平均三時間乃至九時間ナリト云フ

慢性肺症ニ在テハ肺ノ慢性病竈ハ肺癆ノ徴ヲ呈シ咳嗽、呼吸困難鼻漏、羸瘦、鱗屑狀濕疹、下痢、貧血、麻痺ヲ發ス寄生性肺炎ト誤診シ易シ

九 豕羅斯疫

(病性) 豕羅斯疫ハ一種ノ細菌ニ由テ發スル特異ノ敗血症ニシテ出

血症胃腸炎並ニ腎炎、脾腫及肝臟、心臟、筋肉ノ實質炎ヲ發シ歐羅巴各國ニ流行ス

(原因) 病毒ハ主トシテ消化器ヨリ侵入シ肺ヨリ侵入モサルモノハ如シ蓋シ病毒ハ毛細管ヲ填塞シ屍毒様ノ毒素ヲ生ス而シテ其毒素ハ神經系、筋肉並ニ大腺體ノ實質ヲ害ス家兔ノ體內ニ於テハ病毒減衰スト云フ本病ハ直接傳染ニ由テ蔓延シ病毒ヲ含メル糞又ハ病獸ノ肉、内臟等ヲ食スルニ依テ傳染スルモノ最モ多シ一回罹病シタルモノハ概テ免病ス而シテ本病ノ細菌ハ滯水中ニ蕃殖ス故ニ泥沼沮洳ノ地方ニ於テハ常在病トナリ專ラ夏期ニ流行ス

三箇月乃至十二箇月ノ幼豚最モ之ニ罹リ易ク産初第一月ニハ素因最モ少シ三歳ノ老豕モ稀ニハ傳染スルコトアリ哺乳幼豚ハ病母ノ乳ニ依テ傳染セサルト云フ豕ノ種類ニ依テ罹病性ニ差異アルハ諸家ノ實驗ニ徴シテ明ナリ

(症候) 病毒ノ潜伏期ハ最短三日ニシテ俄然劇症ヲ發ス病豕ハ食ヲ嫌フテ嘔吐シ大熱(攝氏四十三度マテ)及神經障礙ヲ發シ倦怠、沈

鬱、嗜眠、褥下潜匿後肢ノ痿弱麻痺等ノ諸徴ヲ呈シ間々筋肉痙攣及咬牙ヲ認ム初期ハ通便秘澁ニ結膜暗赤色若クハ褐赤色ヲ帯ヒ眼瞼腫起シ腹、胸ノ下面、會陰、脚ノ内面、耳、頭ノ如キ皮膚薄弱ノ部ニ掌大ノ紅斑ヲ發ス紅斑ハ鬱血ニ基クモノニシテ其初メ淡紅ナルモ後ニ至レハ暗赤色若クハ藍赤色トナリ間々増大シ甲乙湊合シ疼痛ヲ帶ヒス又隆起セス次テ病獸ノ糞ハ柔軟水樣トナリ稀ニハ血液ヲ混ス末期ニ至レハ肺浮腫ノ爲メ呼吸大ニ促迫シ全身「チアノーゼ」ヲ發シ體温沈下シ三四日ニシテ斃ル極テ急劇ノ症ハ二十四時間内ニ斃ル經過ノ長キモノハ八日若クハ其以上ニ渉ル

(豫後) 死亡ノ割合ハ百頭ニ付五十頭乃至八十五頭ナリ豫後ハ概テ不良ナルモ經過四日ヲ超ユルモノハ稍々佳良ニシテ治癒ノ望アリ

十 狂犬病

(病性) 狂犬病ハ犬屬ノ固染病ニシテ狂犬ノ咬傷ニ由テ人、家畜(犬、猫、牛、馬、豚、羊、山羊)家禽及野獸ニ傳染ス

(原因) 傳染毒ノ本態ニ關シテハ諸種ノ說アルモ未タ明確ナラス病

毒ハ腦、脊髓及唾液中ニ存シ體外ニ於テハ發育セス

(症候) 潜伏期ハ一定セス犬ニ於テハ平均三週乃至六週ニシテ長キハ數月ニ互リ短キハ數日ニ過キス

狂犬病ニ噪狂鬱狂ノ二種アリ固ト是レ同一ノ病ニシテ唯症狀ヲ異ニスルノミ「バストール」氏ノ說ニ據レハ噪狂ハ主トシテ腦ヲ侵ストキ及病毒ヲ直接ニ腦ニ接種スルトキニ發シ鬱狂ハ專ラ脊髓ヲ侵ストキ又ハ病毒ヲ皮下ニ接種スルトキニ發スト云フ噪狂鬱狂ニ變シ鬱狂亦噪狂ニ轉スルヲアリ又二者ノ中間ニ位スル症狀アリ而シテ狂犬病ハ定型的ノ急性病ニシテ必ス死ニ歸スルモノトス

甲 噪狂 噪狂ニ三期アリ前驅期、刺戟期、麻痺期是ナリ

(一) 前驅期又ハ沈憂期ハ半日乃至二日間持續ス此間病犬ノ舉動一變シ羸惡執拗トナリ不安ニシテ憤怒、驚愕シ易ク動モスレハ蔭下ニ潜匿シ頻ニ居所ヲ變シ時ニ卒然跳起ス稀ニハ從順、溫和ナル者アリ又咬傷部ニ異常ノ癢覺ヲ感シ自ラ之ヲ嚙ミ或ハ之ヲ舐ム味覺亦一變シ常食ヲ嫌ヒ好テ寒冷ノ物ヲ舐メ藁、草、土石、木片、硝子ノ

碎片、糞糞ノ如キ種々ノ異物ヲ嚙下シ甚シキハ自己ノ糞尿ヲ啖フ
 或ハ絶エス自己若クハ他犬ノ生殖器ヲ嗅キ若クハ之ヲ舐ム此期ニ
 於テ已ニ輕微ノ咽頭、痙攣嘔意及ヒ便秘ヲ見ル(二)刺戟期ハ三四
 日ニ亘リ狂亂及痙攣ノ發作ヲ來シ各發作ハ數時間ニ渉ル此期ニ於
 テハ不安ノ徵益々加ハリ檻柵、鐵鎖等ヲ嚙斷シ或ハ窓戸ヲ破壞シ
 テ逃逸セント欲ス戶外ニ在レハ目的ナクシテ奔走シ間々遠隔ノ地
 ニ到ル又大ニ咬癖ヲ發シ眞ニ發狂ノ狀ヲ呈シ人畜ヲ問ハス途中ニ
 遭遇スル者ハ悉ク之ヲ咬傷ス其咬嚙力ノ劇シキ間々齒牙ヲ破碎ス
 ルニ至ル又自體ノ尾、陰具、四肢等ヲ嚙ムモノアリ人畜ヲ避ケ全ク
 人ヲ咬傷スルノ傾向ナキモノハ外例ニ屬ス音聲ハ全ク一變シ粗野
 ノ聲ヲ放テ哮吠ス蓋シ變聲ハ聲帶ノ痙攣ニ由ルモノニシテ診斷上
 ノ一大要徵ナリ或ハ狂亂セスシテ專ラ沈鬱ノ狀ヲ呈シ痴鈍幻惑一
 所ヲ凝眸虛視シ空中ニ向テ蠅ヲ捕フル狀ヲナシ絶エス吠鳴シ鞭箠
 ラ意トセサルモノアリ但シ馴育宜キヲ得タル犬ハ瞑目ニ至ルマテ
 主人ノ命ニ服スル者アルモ斯ノ如キハ絶無稀古ニ屬ス(三)痙攣期

又ハ末期ニ於テ病獸大ニ羸瘦シ粗毛竖起、眼珠陷沒、咽喉痙攣シテ
 一物ヲモ嚙下スル能ス大ニ涎ヲ流ス續テ下顎痙攣シ口ヲ哆キ舌ヲ
 出ス終ニ後肢、尾、直腸、膀胱亦痙攣シ五日乃至八日ヲ(運クモ第十
 日)經レハ腦麻痺及全身虛脱ノ爲メニ斃ル狂犬病ノ經過中體温ノ
 高低ニ關シテハ定説ナシ「ヘリング」氏等ハ攝氏二度以上モ昇騰シ
 又速ニ沈下スルヲ見タリ

乙 鬱狂 躁狂ト異ナル點ハ刺戟狂亂期ヲ缺如スルカ若クハ其期
 極テ短ク夙ニ下顎痙攣ヲ發スルニアリ

十一 假性皮疽

(病性) 假性皮疽ハ一ニ馬ノ分芽微病ト名ケ地方性皮膚病ニシテ一
 種ノ分芽微ニ原因ス其ノ症候、病的變狀等ハ畧々眞性皮疽ニ同シ
 (原因) 本病ノ傳染毒ハ一種ノ分芽微(ザツカロミセス、フハルチス
 ノーシエス)ニシテ病的組織及病的產物ニ現在シ又膿漿中ニ遊離
 シ或ハ膿球中ニ存ス而シテ本病ハ瘴氣性兼觸接性傳染病ニシテ傳
 染ノ本源ハ土地ニ存ス其ノ傳染ノ媒介物ハ土壤、厩舍、器具、鞍、馬

具、芻秣、蘆藎、皮膚寄生虫等ニシテ馬ヨリ馬ニ直接傳染スルハ稍々稀ナルカ如シ

潜伏期ハ未タ詳ナラス

(症候) 本病ハ低濕沮洳ノ地方ニ多ク高燥ノ地ニ少ナク多雨ノ年、洪水ノ後ニ多シ又暑期ヨリモ寒冷ノ候ニ頻發スルモノニシテ皮膚ニ球腫、膿瘍及潰瘍ヲ發スルヲ主徵トス其ノ病機ハ淋巴管ニ沿フテ近鄰ノ皮膚及皮下織ニ蔓延シ劇症ニ在テハ鼻粘膜ニ波及スルコトアリ患部ハ一定セス全身ニ發スルコトアリ或ハ各部ニ限局シテ發ス就中前胸、肩、腋窩、胸腹壁、背、胸腹ノ下面等ニ頻發ス又屢々頸側、包皮、龜頭、陰囊等ニ發シ顔面ニ於テハ唇、頰及鼻翼ニ發ス球腫ハ初メ豆大乃至榛實大ニシテ硬ク發生後四五日ヲ經レハ軟化シテ膿瘍ニ變シ其ノ面ニ落屑脫毛アリ膿瘍ハ速ニ破潰シテ膿ヲ泄ス膿ノ狀ハ患畜ノ體質ニ依テ一樣ナラス或ハ濃稠ニシテ乳皮ノ如ク或ハ稀薄ノ膿漿ヨリ成リ黃白色ノ凝塊ヲ混シ間々血液ヲ雜フ瘍底及瘍縁ヨリ帶赤黃色ノ肉芽ヲ贅生シ帶黃色ノ膿汁ヲ排ス重症ニ

在テハ肉芽ハ皮膚面ニ隆起シ息肉狀ヲ呈ス此ノ如キ潰瘍ハ四肢ノ下部ニ多ク數多簇發スレハ其ノ觀恰モ菌茸ノ皮膚ニ亂生スルカ如シ其ノ甚シキニ至テハ象皮脚ヲ生ス

鼻腔其ノ他呼吸道ノ粘膜變狀ハ概シテ皮疽ニ併發シ吸入作用ニ由テ傳染シ又ハ顔面ノ皮膚ヨリ連續蔓延ヲナス原發ノ純性鼻疽ハ極メテ稀ナリ鼻腔ノ病患ハ概テ兩側ニ發シ侵蝕性ノ凹陷潰瘍ハ稀ニシテ瘍底ヨリ肉芽ヲ贅生ス其狀皮膚ノ潰瘍ニ同シ輕症ノ假性鼻疽ニ於テハ鼻漏^{ナキモ}重症ニ於テハ粘液、膿樣粘液、血液若ハ敗膿狀ノ漏液アリ呼吸ハ往々臭氣ヲ帶ヒ鼻腔狹窄スレハ呼吸困難トナリ鼻塞音ヲ放ツ顎凸淋巴腺ノ腫脹ハ稀ニシテ鼻腔ニ變狀アルモ腺腫ハ必スシモ之ニ伴ハス假性鼻疽ノ劇症ニ在テハ兩側ノ腺腫大スルモ輕症ハ之ヲ缺ク其ノ腺腫ハ稍々硬キモ自在ニ移動シ得ヘク眞性皮鼻疽ニ於ケルカ如ク硬結シテ結節狀ヲ呈セス罌丸等ニ及ホス病的作用ハ先ツ陰囊若ハ包皮ヨリ始マリ播種的作用ニ由テ固有莢膜、罌丸、副罌及精系ニ蔓延シ莢膜ノ二葉ヲシテ癒著セシム局處ノ皮膚變狀ナクシ

テ翠丸ニ原發スルハ稀ナリ又眞性鼻疽ハ肺ニ頻發スルモ假性皮炎ハ肺ヲ侵スハ稀ナリ
 假性皮炎尙ホ一小部ニ限局スレハ全身違和ノ狀ナク患馬ハ快活ニシテ食慾善良毫モ熱候ヲ呈セス病勢増進スルモ尙ホ能ク使役ニ堪フ既ニ鼻腔ニ發生シ或ハ非常ニ蔓延スレハ營養不良トナリ羸瘦、惡液ニ陥リ遂ニ斃ル重症ニ於テハ食慾稍々減シ消耗熱ヲ發スルコトアリ

(經過及豫後) 經過ハ甚タ緩慢ニシテ數月ノ久シキニ瀰ル眞ノ急性症ハナキモ皮膚若ハ呼吸器粘膜ノ大部ニ蔓延スレハ較々急性ノ觀ヲ呈ス本病ハ増進シテ底止スル所ナキカ故ニ自然ニ放置スレハ遂ニ斃ル然レトモ皮膚ノ一小部ニ限局セル輕症ハ手術ニ賴テ全治ス則チ限局ノ輕症ナレハ豫後善良ナルモ全身ヲ侵サレ鼻腔等ニ病變アルモノ已ニ惡液質象皮病ニ陥ルモノハ豫後不良ナリ

牛疫檢疫規則 (明治三十三年二月農商務省令第五號)

- 第一條 韓國、清國及露領西伯利ノ諸港ヨリ輸入スル牛羊、皮骨類其他牛疫傳播ノ虞アル物品ハ檢疫ヲ受ケタル後ニ非サレハ之ヲ陸揚スルコトヲ得ス
- 第二條 檢疫ハ兵庫縣神戸港及長崎縣長崎港ニ於テ之ヲ行フ
- 第三條 檢疫官ハ船舶ニ臨檢シ必要ト認ムルトキハ航海日誌ヲ檢閱スルコトヲ得
- 船長又ハ船長ノ職務ヲ行フ者ハ尋問書ニ事實ヲ記載シ之ニ署名スヘシ
- 第四條 檢疫官ハ必要ト認ムルトキハ牛羊ノ所有者若ハ管理人又ハ船長其他ノ船員ヲシテ之ヲ繫留所ニ送致セシメ且相當ノ期間之ヲ繫留スルコトヲ得
- 第五條 牛疫感染ノ疑アリ又ハ之ニ罹リタル牛羊及病毒ニ汚染シ又ハ其疑アル皮骨類其他ノ物品ハ獸疫豫防法ノ規定ニ從ヒ之ヲ處分スヘシ
- 第六條 檢疫官檢疫ヲ終リタルトキハ證明書ヲ交付スヘシ
- 第七條 檢疫所在地ノ地方長官ハ所屬官吏及獸醫ヲ以テ檢疫官トシ檢疫ヲ行フヘシ

第八條 第一條ニ掲ケタル港ヲ經テ輸入シ又ハ他ノ港ヨリ若ハ他ノ港ヲ經テ輸入スル牛羊、皮骨類其他牛疫傳播ノ虞アル物品ノ検査ヲ行ハントスルトキハ其港名及検査施行ノ期日並場所ヲ告示スヘシ
 本則ノ規定ハ前項ノ検査ニ之ヲ準用ス
 第九條 本則ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
 明治三十年農商務省令第十八號牛疫検査規則ハ本則施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

臨時獸醫備入手當改正

農商務省訓令第十四號 (明治三十二年三月三十一日)

警視廳 北海道廳 府縣(東京府ヲ除ク)

明治三十年(三月)當省訓令第四號臨時獸醫備入手當金三十圓以内トアルハ金三十五圓以内ト改正ス

臨時備入レノ監督獸醫手當支給ノ件

農商務省訓令第十五號 (明治三十二年三月三十一日)

警視廳 北海道廳 府縣(東京府ヲ除ク)

明治二十九年法律第六十號獸疫豫防法施行上臨時獸醫ヲ備入レタル場合之レカ監督ノ任ニ當ル獸醫ニ限リ一箇月金五十圓以内ヲ目途トシ其勤務日數ニ應シ手當ヲ支給スルコトヲ得

畜牛結核病豫防法 (明治三十四年四月法律第三五號)

第一條 乳用牛、外國種牛及雜種牛ハ結核病ノ有無又ハ輕重ヲ定ムル爲行政官廳ニ於テ之ヲ検査ス結核病ニ罹リ又ハ其ノ疑アル畜牛ニ付テモ亦同シ

第二條 乳用牛、種牡牛及ヒ結核病ニ罹リ又ハ其ノ疑アル畜牛ノ検査ハ「ツベルクリン」注射ノ方法ニ依リ之ヲ行フ

第三條 検査ノ期日及場所ハ行政官廳之ヲ指定ス

第一條ニ掲ケタル畜牛ノ所有者又ハ管理者ハ前項ノ指定ニ從ヒ其ノ検査ヲ受クヘシ

第四條 結核病ニ罹リ又ハ其ノ疑アル畜牛ヲ發見シタルトキハ所有者、

管理者又ハ獸醫ニ於テ直ニ之ヲ届出ツヘシ

第五條 結核病ニ罹リ又ハ其ノ疑アル畜牛ハ検査員ノ指揮ニ從ヒ所有者

又ハ管理者ニ於テ之ヲ隔離スヘシ

第六條 重症結核病ニ罹リタル畜牛ハ検査員ノ指揮ニ從ヒ所有者又ハ管

理者ニ於テ之ヲ撲殺スヘシ

輕症結核病ニ罹リタル畜牛ハ検査員ノ指揮ニ從ヒ所有者又ハ管理者ニ

於テ之ヲ鎖鋼スヘシ

第七條 外國ヨリ輸入スル畜牛ハ輸入申告後特ニ定メタル場所ニ於テ「

ツベルクリン」注射ノ方法ニ依リ之ヲ検査ス

前項ノ検査ニ關シテハ税關長及検査員ノ指揮ニ從フヘシ

第一項ノ畜牛ニシテ結核病ニ罹リ又ハ其ノ疑アルトキハ税關長又ハ檢

査員ニ於テ其ノ輸入ノ禁止、緊留其ノ他必要ナル處分ヲ命スルコトヲ

得

第八條 前條ニ依リ輸入ヲ禁止セラレタル者畜牛ヲ撲殺セントスルトキ

税關長及検査員ノ指揮ニ從フヘシ

第九條 結核病ニ罹リタル畜牛ノ乳汁、屍體及其ノ部分、畜牛ヲ置キタル

場所竝病毒ニ汚染シ及其ノ疑アル物品ハ検査員ノ指揮ニ從ヒ所有者又

ハ管理者ニ於テ之ヲ消毒スヘシ

第十條 重症結核病ニ罹リタル畜牛ノ乳汁竝屍體及其ノ部分ハ皮角蹄ヲ

除クノ外検査員ノ指揮ニ從ヒ所有者又ハ管理者ニ於テ之ヲ燒棄又ハ埋

却スヘシ但シ認可ヲ得タル装置ヲ以テ化製スルモノハ此ノ限ニ在ラス

輕症結核病ニ罹リタル畜牛ノ乳汁竝屍體及其ノ部分ノ處分方法ハ主務

大臣之ヲ定ム

第十一條 結核病ニ罹リタル畜牛ヲ置キタル場所竝病毒ニ汚染シ及其ノ

疑アル物品ハ検査員ニ於テ其ノ燒棄又ハ埋却ヲ命スルコトヲ得

第十二條 結核病ニ罹リタル畜牛ノ乳汁、屍體若ハ其ノ部分又ハ病毒ニ

汚染シ若ハ其ノ疑アル物品ヲ埋却シタル場所ハ三箇年之間之ヲ發掘スル

コトヲ得ス但シ行政官廳ノ許可ヲ得タル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十三條 第六條又ハ第十一條ニ依リ畜牛ヲ撲殺シ又ハ物品ヲ燒棄若ハ

埋却シタル場合ニ於テハ其評價額ノ二分ノ一ニ當ル手當金ヲ下付ス畜牛ノ手當金ハ一頭ニ付外國種牛ニ在リテハ七十五圓、雜種牛及內國種牛ニ在リテハ五十圓、六箇月未滿ノ幼牛ニ在リテハ十五圓ヲ超ユルコトヲ得ス物品ノ手當金ハ總テ十圓ヲ超ユルコトヲ得ス

畜牛及物品ノ評價ハ三人以上ノ評價人ヲ選定シテ之ヲ爲サシム 但シ其ノ評價ヲ不當ト認メタルトキハ更ニ三人以上ノ評價人ヲ選定シテ之ヲ爲サシム

第十四條 左ノ場合ニ於テハ畜牛ノ手當金ヲ下付セス

- 一 検査ヲ受ケス、之ヲ拒ミ又妨ケタルトキ
- 二 第四條、第五條又ハ第六條ニ違背シタルトキ
- 三 検査ヲ受ケスシテ畜牛ヲ輸入シタルトキ

左ノ場合ニ於テハ物品ノ手當金ヲ下付セス
一 前項各號ノ一ニ該當スルトキ
二 第九條、第十條第一項又ハ同條第二項ニ基ツキテ發シタル命令ニ違背シタルトキ

三 第七條第二項、第三項又ハ第八條若ハ第十一條ノ命令ニ從ハサル

第十五條 手當金ヲ受クヘキ者其ノ全部又ハ一部ヲ拒否スル處分ニ不服ナルトキハ訴願ヲ提起スルコトヲ得

第十六條 畜牛結核病豫防ニ關スル費用ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ國庫、府縣及一個人ニ於テ之ヲ負擔ス

第十七條 検査ヲ受ケス、之ヲ拒ミ若ハ之ヲ妨ケタル者、検査ヲ受ケスシテ畜牛ヲ輸入シタル者、第五條若ハ第六條ニ違背シタル者又ハ第七條第三項ノ命令ニ從ハサル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條 第四條、第九條、第十條第一項若ハ第十二條ニ違背シタル者又ハ第七條第二項、第八條若ハ第十一條ノ命令ニ從ハサル者ハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 明治三十三年法律第五十二號ハ本法及本法ニ基キテ發スル命令ノ處罰ニ關シテ之ヲ準用ス

附 則